

平成 28 年度

「学校支援のためのコーディネーターに関する調査研究」報告書

栃木県総合教育センター
北海道教育大学釧路校廣瀬隆人研究室

はじめに

少子化による人口減少、グローバル化や知識基盤社会の進展、雇用環境の変化や経済格差の拡大等、社会環境がめまぐるしく変化する中、子どもたちは、様々な困難を乗り越え、高い志と意欲を持って社会を生き抜くための「生きる力」を身に付けることが求められています。この力は学校だけで育まれるものではなく、多様な人々との関わりや体験を重ねていく中で育まれるものであり、子どもたちの豊かな成長には、地域とのつながりや様々な人との関わりは欠かせないものとなっています。また、子どもの安全・安心の確保、学校が抱える課題の複雑化、地域基盤の再構築といった観点からも、学校と地域がより一層連携していくことの必要性が指摘されています。

このような中、国からは、平成 27 年 12 月に中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」が出され、これからの学校と地域の目指すべき連携・協働の姿が示されました。そこでは、地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」(コミュニティ・スクール)への転換と、これまでの学校「支援」を超えて、目的を共有し長期的な双方向性のある「連携・協働」に向かうことを目指した活動(地域学校協働活動)への転換を両輪として推進することが述べられました。さらに、学校と地域がより連携し、協働へと発展していくためには、①コーディネート機能の強化、②より多くの地域住民が参画できる多様な活動の展開、③継続的な活動の実施が必要であり、地域住民や学校との連絡調整を行う「コーディネーター」の養成、配置等の機能強化の必要性が述べられました。

栃木県では、栃木県生涯学習推進計画五期計画「とちぎ輝き『あい』育みプラン」において、生涯学習推進施策の一つに「生涯学習を推進する指導者の養成と活動支援」を位置付け、市町と連携を図りながら、コーディネーターとしての役割を果たす人材の育成を行うこととしています。また、栃木県教育振興基本計画 2020-教育ビジョンとちぎ-では、学校・家庭・地域の連携による教育の充実を基本施策の一つとし、各市町においてコーディネーターの配置を含めた地域の教育活動を推進するための組織体制づくりを促進することを、推進のための主な取組としています。

このように、コーディネーターの養成・配置等の機能強化の必要性が指摘される中、本県は、全国に先駆けて、平成 26 年度から各学校に「地域連携教員」を設置し、学校と地域の連携を効果的・効率的に取り組む校内の体制整備を図りました。今後は、地域の窓口となるコーディネーターの体制整備について、さらに充実を図ることが求められています。

そこで、本調査研究では、栃木県総合教育センターと北海道教育大学釧路校廣瀬隆人研究室の共同研究により、コーディネーターの活動状況、成果、課題等についてアンケート調査やヒアリング調査から得られた回答や事例等をもとに、コーディネーターの役割、配置の在り方等について調査・分析しました。

調査結果から、県内の 6 割強の小中学校にコーディネーターが配置されていること、9 割以上の学校でコーディネーターが配置されているまたは配置の必要性を感じていること、一方でコーディネーターの活動は主に学校支援ボランティアの確保であり、総合的な学校と地域の連携にはまだ進展していないこと等が明らかになりました。

これらを踏まえ、本報告書では、学校と地域の連携をさらに推進し協働へと向かっていくために、コーディネーターの配置や活動の在り方、行政・学校の支援の方向性等について提言するとともに、地域連携教員・コーディネーターが目指すべきこと、留意点等についてまとめています。

今後、学校と地域の連携をさらに進め、発展させていくために本報告書を御活用いただければ幸いです。

結びに、今年度の調査研究の実施にあたり、御教示・御協力を賜りました関係機関の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 1 月

栃木県総合教育センター 所長 軽部 幸治
北海道教育大学釧路校 教授 廣瀬 隆人

目 次

第1章 調査研究の概要	1
1 調査研究の背景と目的	1
2 調査方法・内容等	1
(1) 調査方法	
(2) 調査対象	
(3) 調査内容	
(4) 調査期間	
3 アンケート調査回収結果	2
4 集計・選択肢の表現について	2
5 児童・生徒数による学校規模の分類について	3
6 アンケート調査回答者の概要	3
(1) 地域連携教員	
(2) コーディネーター	
第2章 調査結果	7
1 アンケート調査における調査項目集計結果	7
(1) 地域連携教員	7
(2) コーディネーター	17
2 ヒアリング調査結果	27
(1) コーディネーターの活動状況について(敬称略)	27
○事例1 宇都宮市立晃陽中学校	齋藤 恵美子 28
○事例2 日光市立轟小学校	渡辺 新太郎 30
○事例3 益子町立七井小学校・七井中学校	大岡 忠男 32
○事例4 栃木市立皆川城東小学校・皆川中学校	関口 浩子 34
○事例5 さくら市立上松山小学校	黒澤 道子 36
○事例6 那須町立田代友愛小学校	金田 裕美子 38
○事例7 佐野市立城北小学校	小林 みゆき、丸山 和美 40
(2) 県立学校におけるコーディネーターとの連携事例について	42
○事例1 宇都宮商業高等学校(定時制)	43
○事例2 上三川高等学校	45
○事例3 石橋高等学校	47
○事例4 壬生高等学校	49
○事例5 佐野高等学校	51
○事例6 真岡工業高等学校	53
○事例7 富屋特別支援学校	55
第3章 分析と提言	57
1 調査の分析	57
2 提言	57
3 まとめにかえて	59
第4章 参考資料	61
1 学校支援のためのコーディネーターに関する調査票	
(1) 地域連携教員用	
(2) コーディネーター用	
2 学校支援のためのコーディネーターに関する調査(地域連携教員用) 問7 記述内容一覧	
3 学校支援のためのコーディネーターに関する調査(コーディネーター用) 問8 記述内容一覧	

第1章 調査研究の概要

1 調査研究の背景と目的

平成18年に教育基本法が改正され、学校・家庭・地域の連携が新たに規定された。平成20年には社会教育法が改正され、社会教育行政が積極的に学校支援を行うことが法的に示された。これを受け、学校と家庭・地域の連携を具現化する方策として平成20年度に文部科学省委託事業「学校支援地域本部事業」（現：補助事業「学校・家庭・地域連携協力推進事業」）が始まったことから、コーディネーターの配置がより一層推進された。コーディネーターが連携の要となり、実情に応じてコーディネート活動を展開する中、学校や地域の理解も深まり、活動の充実が図られてきたが、コーディネーターの配置状況や活動状況についての違いや活動上の新たな成果・課題等が見られるようになってきた。

また、本県は、子どもの生きる力を育成するとともに、地域に根ざした特色ある学校づくりを推進するため、全国に先駆けて、平成26年度から各学校に「地域連携教員」を設置し、学校と地域の連携を効果的・効率的に取り組む校内の体制整備を行った。今後は、地域の窓口となるコーディネーターの体制整備についてさらに充実を図ることが求められている。

栃木県総合教育センターと宇都宮大学生涯学習研究センター（現：地域連携教育研究センター）では、平成20年度に「地域と学校をむすぶコーディネーターに関する調査研究」、平成23年度に「学校支援地域本部事業の地域社会に与える影響についての調査研究」を行い、コーディネーターの活動状況、成果、課題を分析し、配置の在り方や効果的に活動を推進するための体制整備等についての方策を明らかにしてきた。今年度は、それらの研究成果を踏まえ、コーディネーターの活動状況、成果、課題等を改めて調査・分析し、今後の連携をさらに推進していくためのコーディネーターの役割、配置の在り方や方策等について提言することを目的とし、本調査研究を行う。

なお、本調査において「コーディネーター」は次のように定義し、調査した。

学校と地域の教育支援人材や機関（地域住民、学校支援ボランティア、団体・関係機関等）が連携する際の窓口となり、学校の地域連携活動について1回きりではない協力を行う地域の人材（公民館職員等の行政職員を含む）。

2 調査方法・内容等

(1) 調査方法

① アンケート調査

- ・県内公立小中学校（小学校 372 校、中学校 157 校）に調査票を送付し、Eメール等により回答を得る。
- ・学校を経由して学校支援にかかる地域コーディネーターへ調査票を送付し、Eメール等により回答を得る。

② ヒアリング調査

- ・アンケート調査の結果より、活動歴、学校種等を踏まえ、活動を意欲的・継続的に進めているコーディネーターを抽出し、ヒアリング調査を行う。
- ・平成27年度に実施した「地域連携教員の実態に関する調査研究」において、「コーディネーターがいる」と回答した県立学校（13校）の中から、学校種等を踏まえ、コーディネーターと連携が効果的に行われている県立学校を抽出し、ヒアリング調査を行う。

(2) 調査対象

① アンケート調査

- ・県内公立小中学校地域連携教員 529 名
- ・学校支援にかかる地域コーディネーター 319 名(※1)

※1 学校支援にかかる地域コーディネーターへの調査は、学校を経由して調査票を配布した。複数のコーディネーターがいる場合は少なくとも代表者 1 名への配布を依頼した。そのため、対象者数はコーディネーターまたはコーディネーターに相当する方がいる学校数と同数になっている。

② ヒアリング調査

- ・学校支援にかかる地域コーディネーター 各地区 1 名ずつ 7 名
- ・県立学校地域連携教員 7 名

(3) 調査内容

① アンケート調査

- ・県内公立小中学校地域連携教員

コーディネーターの有無、コミュニケーションの満足度、依頼内容、配置の効果、学校の支援体制、コーディネーターに求められる力、その他

- ・学校支援にかかる地域コーディネーター

活動学校数、連絡方法、コミュニケーションの満足度、活動内容、活動上の課題、学校からの支援、求められる力、その他

② ヒアリング調査

- ・学校支援にかかる地域コーディネーター

活動のきっかけ、活動概要、活動上の工夫、やりがい・課題、その他

- ・県立学校地域連携教員

コーディネーターの経歴、連携の実際、成果・課題、その他

(4) 調査期間

平成 28 年 8 月～平成 29 年 1 月

3 アンケート調査回収結果

回収結果は下のとおりである。

【表 1 調査対象者数と回収率】

対象者	対象者数	回収数	回収率
小学校地域連携教員	372	362	97.3%
中学校地域連携教員	157	151	96.2%
学校支援にかかる地域コーディネーター	319	234	73.4%

4 集計・選択肢の表現について

回答率(各回答の百分率比)は小数第 2 位を四捨五入した。単数回答の百分率の合計は 100%であるが、四捨五入のために合計が見かけ上 100%にならないことがある。複数回答は回答者数を基数として算出してあり、合計が 100%を上回ることがある。

また、回答選択肢の表現の趣旨を損なわない範囲で語句を省略し、表現を簡略したことがある。

5 児童・生徒数による学校規模の分類について

本調査では、児童・生徒数で学校の大きさを3つに分け、その傾向の差を測るため、児童生徒数が100名までを「小規模校」、101～400名までを「中規模校」、401名以上を「大規模校」として独自に分類している。規模別学校数は次のとおりである。

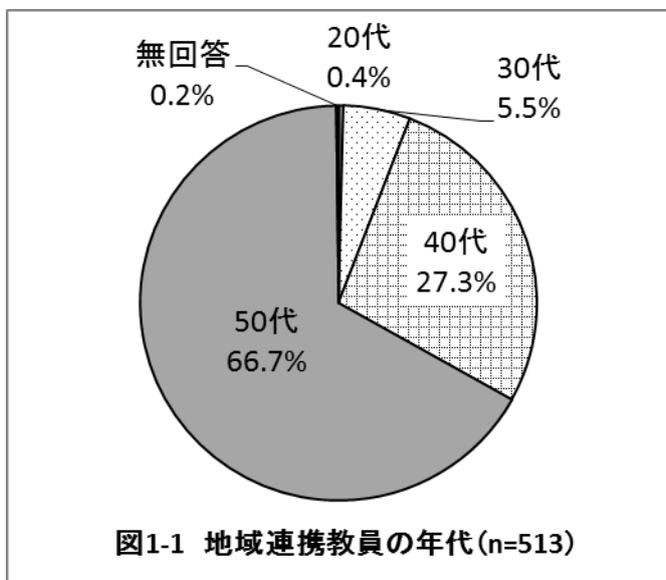
【表2 小中学校の規模別校数】

校種	小規模校(～100名)	中規模校(101～400名)	大規模校(401名～)
小学校(n=362)	98 27.1%	172 47.5%	92 25.4%
中学校(n=151)	23 15.2%	79 52.3%	49 32.5%
合計(n=513)	121 23.6%	251 48.9%	141 27.5%

*単位は(校)

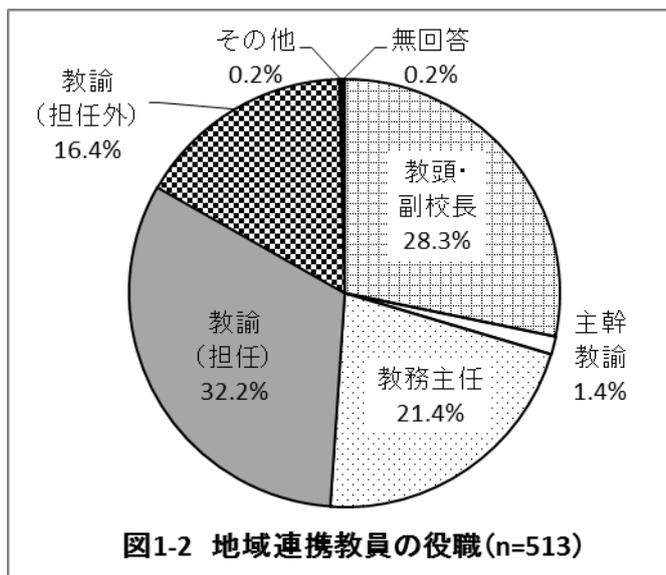
6 アンケート調査回答者の概要

(1) 地域連携教員



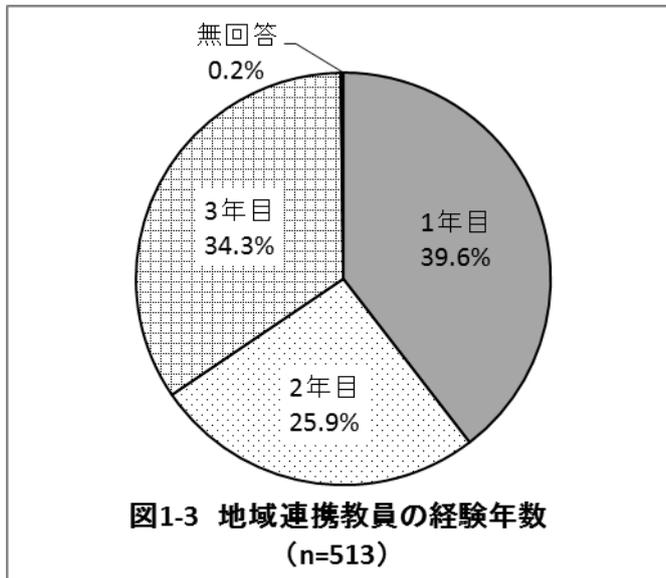
① 年代

地域連携教員の年代は、「50代」が最も多く66.7%、次に「40代」が27.3%で、「40代」「50代」で全体の9割以上を占めた。【図1-1】



② 役職

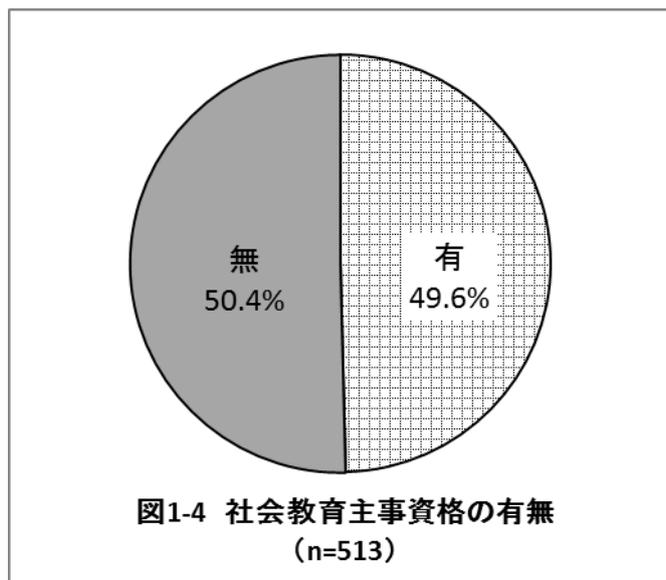
地域連携教員の役職は、「教諭(担任)」が最も多く32.2%であった。昨年度実施した「地域連携教員の実態に関する調査研究」では、「教諭(担任)」と回答した割合は30.2%であり、今年度の方が2ポイント高くなった。次に大きな割合を占めたのが「教頭・副校長」で28.3%だった。【図1-2】



③ 経験年数

地域連携教員の経験年数は、「1年目」が最も多く39.6%、次に「3年目」が34.3%であった。

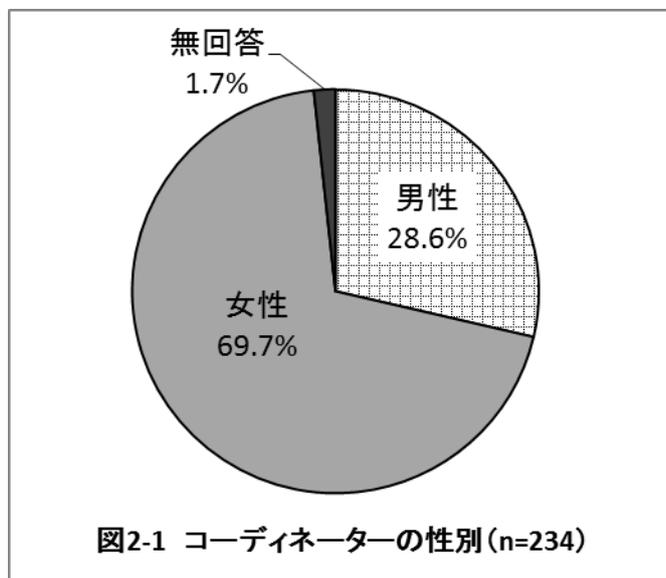
【図 1-3】



④ 社会教育主事資格の有無

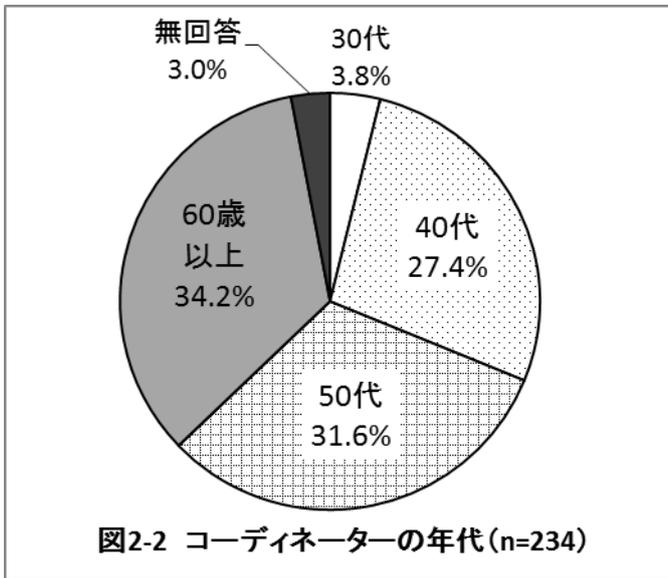
地域連携教員に占める「社会教育主事有資格者」の割合は 49.6%であった。昨年度実施した「地域連携教員の実態に関する調査研究」では、「有」と回答した割合は 47.3%であり、今年度の方が約 2 ポイント高くなった。【図 1-4】

(2) コーディネーター



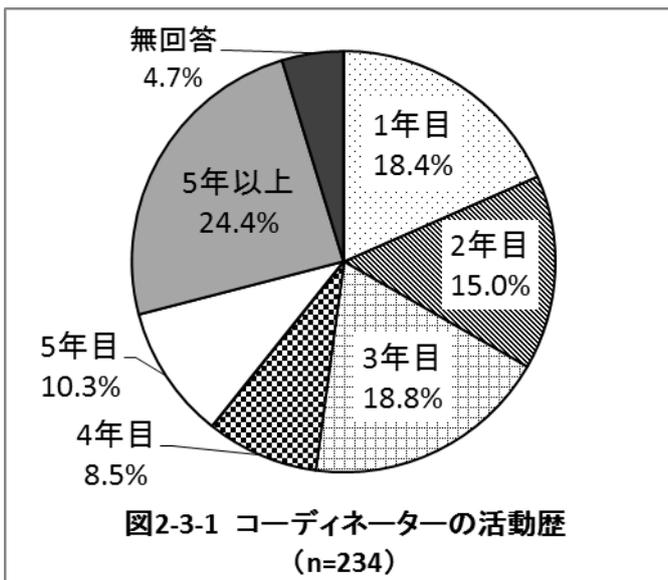
① 性別

コーディネーターの性別は、「女性」が69.7%で約 7 割を占めた。【図 2-1】



② 年代

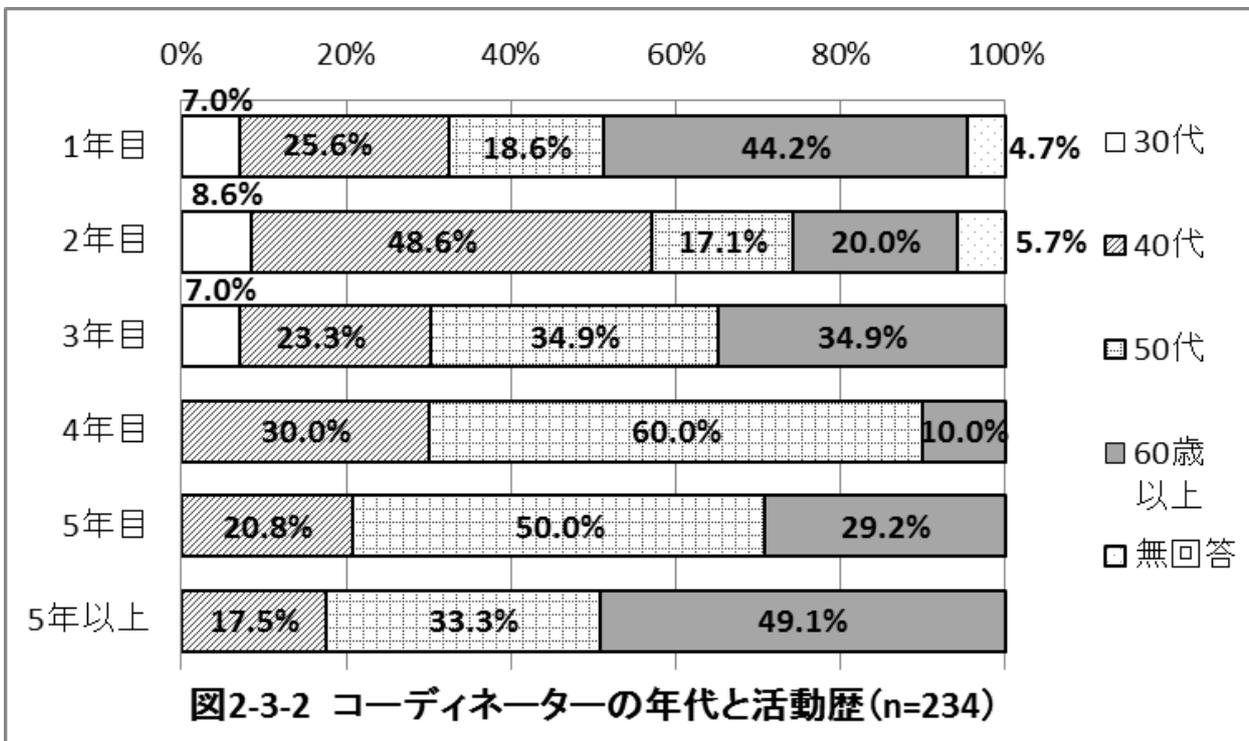
コーディネーターの年代は、「60歳以上」が最も多く34.2%、次に「50代」で31.6%であった。【図2-2】

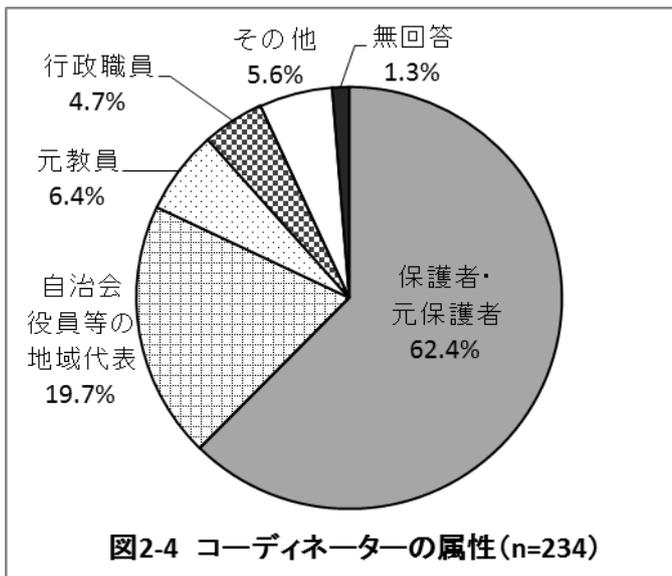


③ 活動歴

コーディネーターの活動歴は、「5年以上」が最も多く24.4%、次に3年目が18.8%、1年目が18.4%であった。【図2-3-1】

また、コーディネーターの活動歴を年代別で見ると、「30代」「40代」は活動歴が3年以下が多く、活動歴が長くなるにつれ、「50代」「60歳以上」の割合が高くなる傾向にあることがわかった。【図2-3-2】





④ 属性

コーディネーターの属性は、「保護者・元保護者」が最も多く 62.4%、次に「自治会の役員等の地域代表」が 19.7%であった。また、「その他」として、学校支援ボランティア、PTA事務等の回答があった。【図 2-4】

<参考>「その他」の回答

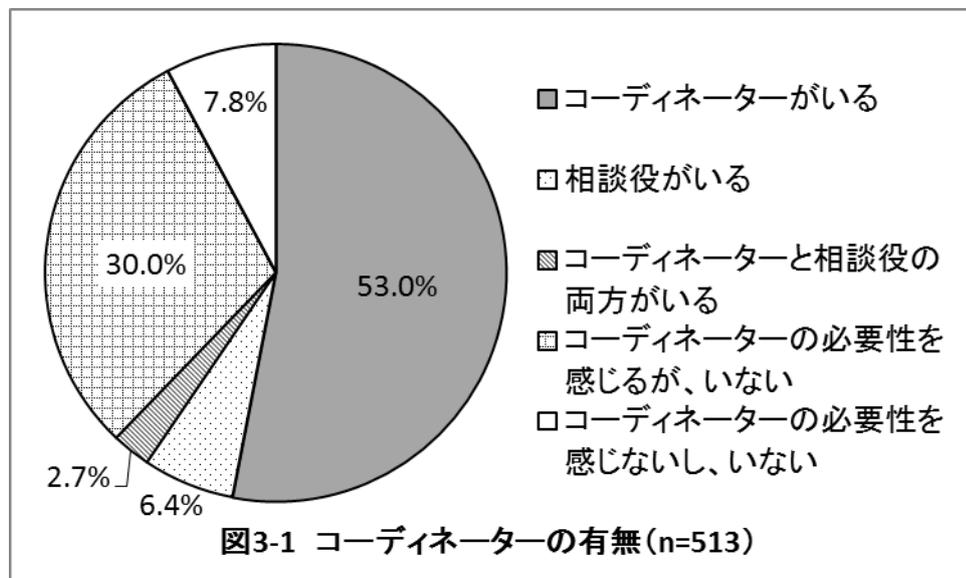
学校支援ボランティア、放課後子ども教室ボランティア、PTA事務、スポーツ推進員、郷土芸能団体リーダー、町ボランティア協議会所属、元幼稚園教諭、民間企業職員、中間支援センター職員

第2章 調査結果

1 アンケート調査における調査項目集計結果

(1) 地域連携教員

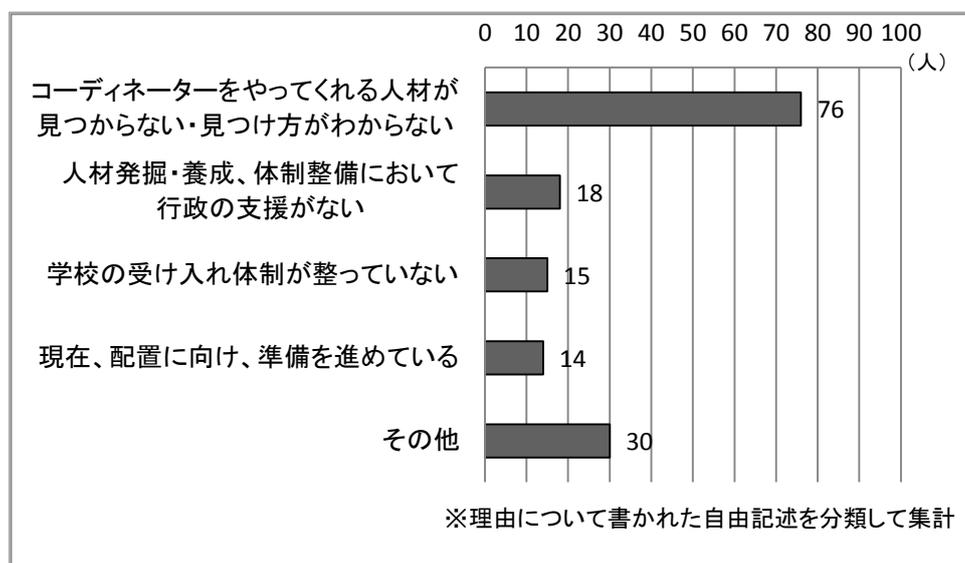
① コーディネーターの配置について



コーディネーターの有無について、「学校や教育委員会から正式に指名されているコーディネーターがいる」と回答した割合は53.0%で、「正式に指名されていないがコーディネーターの役割を果たしている相談役がいる」「コーディネーターと相談役の両方がいる」と合わせると、全体の約62%の学校にコーディネーターの役割を担う人がいるということがわかった。

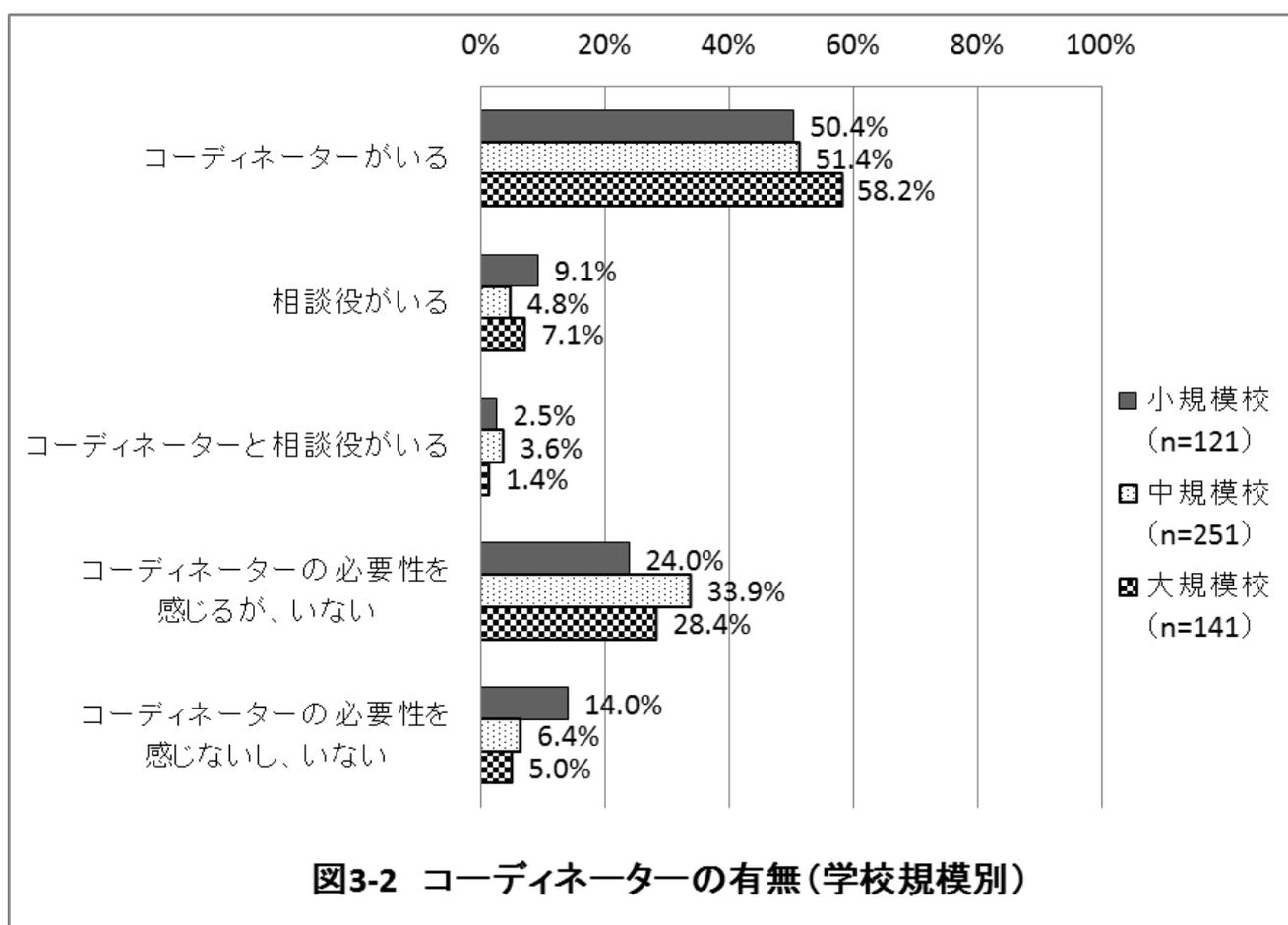
また、「コーディネーターがいない」と回答したのは全体の約38%であり、その内の約8割が「コーディネーターの必要性を感じるが、配置ができていない」との回答であった。その理由として、「コーディネーターをやってくれる人材が見つからない」が最も多くあげられており、学校が独自にコーディネーターを見つけることの難しさが明らかになった。【図3-1、資料1】

<資料1> コーディネーターの必要性を感じるが、配置ができていない理由(複数回答)



■主な記述内容

- ・コーディネーターを引き受けてくれる方が地域内・地区内にいない。いるかどうか分からない。
- ・学校では、コーディネーターの役割を果たしてくれる地域の人材を探すことが難しい。
- ・コーディネーターの見つけ方、配置の仕方等、具体的な方法がわからない。
- ・依頼する人材の検討をしているが、なかなか決まらない現状がある。
- ・コーディネーターという仕事をボランティアでお願いしにくい。また、コーディネーターとしての適性が不明である。
- ・行政から人材が配置されていないので、学校単独では配置が難しい。
- ・行政でコーディネーター養成に力を入れていない。
- ・行政側の推進不足及び行政側との連携不足。
- ・予算面や人材面の課題が大きい。

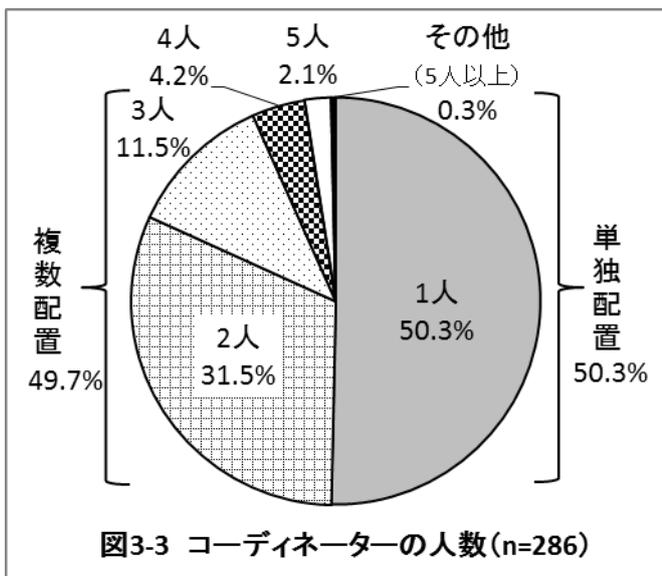


学校規模別の配置状況を見ると、特に小規模校において「コーディネーターの必要性を感じないし、配置もしていない」という回答が多く、中・大規模校との差が見られた。主な理由として、「学区内の人口が少なく、ボランティアの把握ができており、学校と地域との連携が図られている」、「学校支援ボランティアの協力体制が整っており、学校からの各種要望に対しては、特別なコーディネーターを通さずとも協力していただける」、「地域の方々が皆協力的であり、地域連携教員の連絡等で事足りてしまう」等があげられており、小規模校は学校と地域が近い関係にあるためボランティアが容易に把握でき、教員とボランティアが直接連絡調整をとりやすい環境にあることがわかった。【図 3-2、資料 2】

<資料 2> コーディネーターの必要性を感じないし、配置もしていない理由

■小規模校からの記述内容

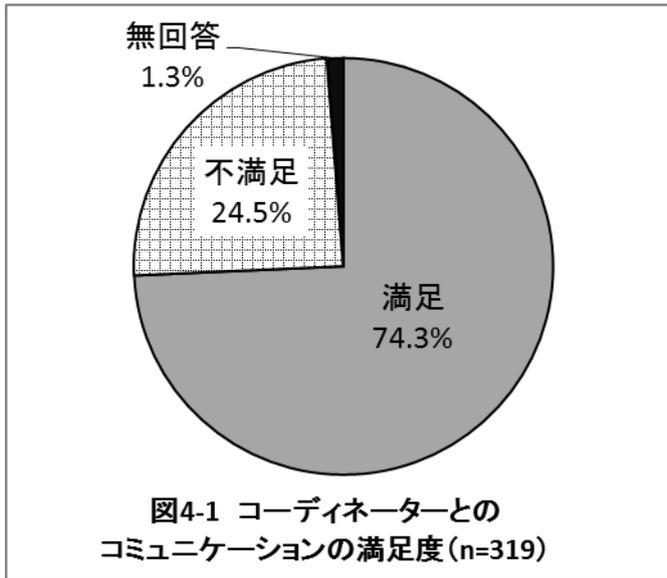
- ・コミュニティが非常に小さいので、保護者を通して関係が深いから。
- ・小規模校で地域密着型の学校なので、すぐに協力していただけるから。
- ・本校は小規模校で落ち着いた地域であり、PTA、育成会が非常に充実していて、教育活動に十分な貢献があるから。
- ・窓口を担うコーディネーターはいないが、協力してくれる住民、相談にのってくれる住民が多いから。
- ・地域の方々が皆協力的であり、地域連携教員の連絡等で事足りてしまうから。
- ・伝統的に地域と連携した行事や活動が多くあり、また、地域が協力的なので、コーディネーターがいなくても連携が取れているから。
- ・学校支援ボランティアの協力体制が整っており、学校からの各種要望に対しては、特別なコーディネーターを通さずとも協力していただけるから。
- ・学区内の人口が少なく、ボランティアの把握ができており、学校と地域との連携が図られているから。
- ・すでに地域人材のリストがあり、連携がスムーズに行われているから。(ただし、新しい人材の確保などを考えると、理想的にはコーディネーターがいた方がよい。)
- ・学校支援ボランティアがある程度固定化しており、学校とボランティアとが直接やり取りをしているから。
- ・小規模校なので教員の計画・準備で十分活動できるから。また、直接連絡を取り合った方が時間的に短くて済むから。
- ・活動内容に応じて直接、学校の意図を相手に相談した方が効率的だから。
- ・PTA会長がその役割を果たしているから。
- ・現在までの経緯により、地域連携教育は概ねできているから。
- ・現在、本校の地域人材活用は市教委が窓口になっている事業なので、必要性を感じないから。



コーディネーターの配置人数を見ると、最も多かった回答が「1人」で50.3%、次に「2人」で31.5%であった。また、コーディネーターが設置されている学校の半数近くで複数配置が進んでいることがわかった。【図3-3】

※ここでは、「学校や教育委員会から指名されたコーディネーターがいる」と回答のあった286校のコーディネーターの人数についてまとめた。

② コーディネーターとのコミュニケーションについて



コーディネーターとのコミュニケーションについて、「満足している」と回答した割合は74.3%であった。その理由として、「定期的な打合せや学校訪問を通して十分なコミュニケーションが図れている」、「学校の状況や依頼する内容をよく理解してくれている」、「コーディネーターからの提案や相談を受けるなど、学校からだけでなく双方向の情報交換が図れている」、「コーディネーターが積極的、協力的に活動してくれる」といった主旨の回答が多く見られた。

また、「満足していない」と回答した理由として、「コーディネーターが設置されて間もなく、十分な話し合いがされていない」「コーディネーター

が忙しく、すぐに連絡を取ることができない」といった理由があげられている一方、「教頭・副校長、教務主任が窓口になっている」、「連絡を取り合う時間の確保が難しい」という回答も目立った。【図4-1、資料3】

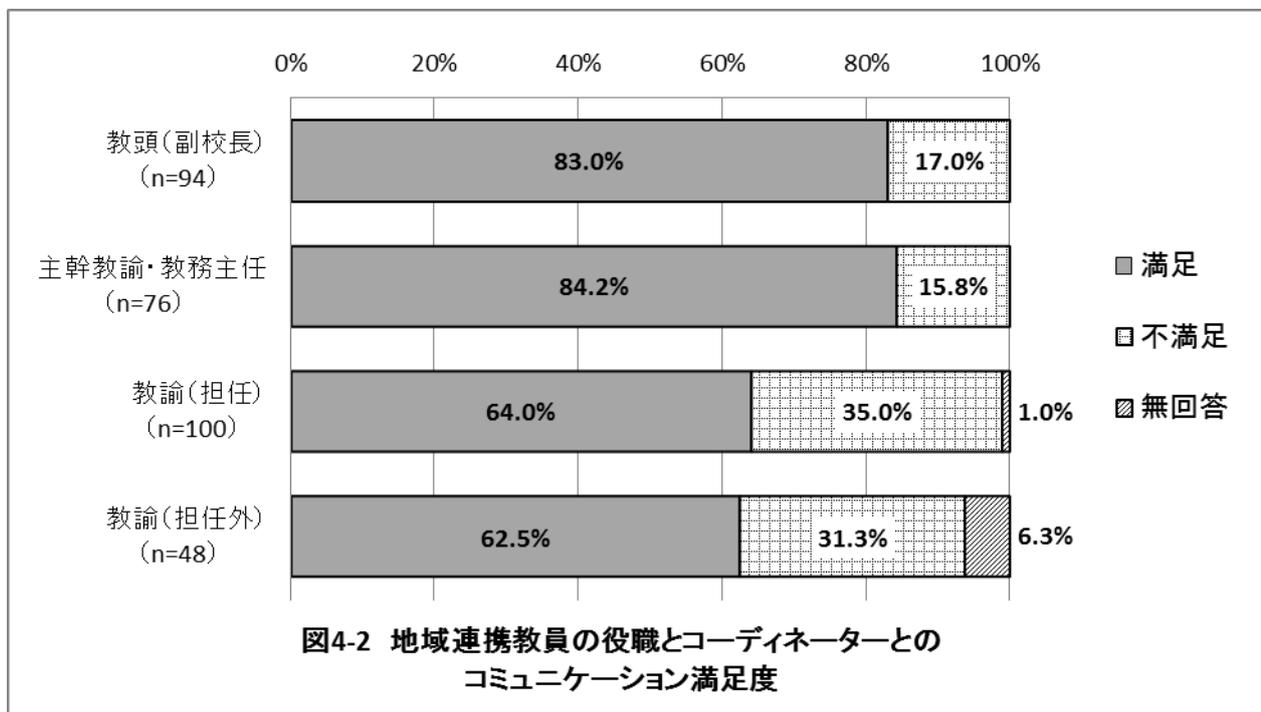
<資料3> コーディネーターとのコミュニケーションの満足度に関する主な記述内容

■「満足している」理由

- ・頻繁に来校いただき、密に連絡が取れている。
- ・定期的(週1回)にコーディネーターが学校を訪問し、コミュニケーションを図っている。
- ・コーディネーター会議を定期的に行っている。
- ・以前から学校に足を運び、教育活動に積極的に関わり、学校の実情もよく理解してくださっている。
- ・学校の状況を理解してくれ、依頼する内容をよく理解してくれている。
- ・学校教育活動に対して理解があり、とても協力的。互いの信頼関係も、十分構築できている。
- ・学校側からだけでなく、コーディネーターからも活動の申し出がある。
- ・いつでも足を運んで相談にのってくれる。同じ方向を向いて活動をしてくれる。
- ・活動後には反省や感想などの情報を交換している。
- ・地域コーディネーター自ら、地域情報の収集や学校との連携に関するはたらきかけを行っている。
- ・コーディネーターは学校のことをよく理解し、とても協力的でコミュニケーションも十分にとれている。
- ・コーディネーターがとても協力的で話しやすい人柄でもある。

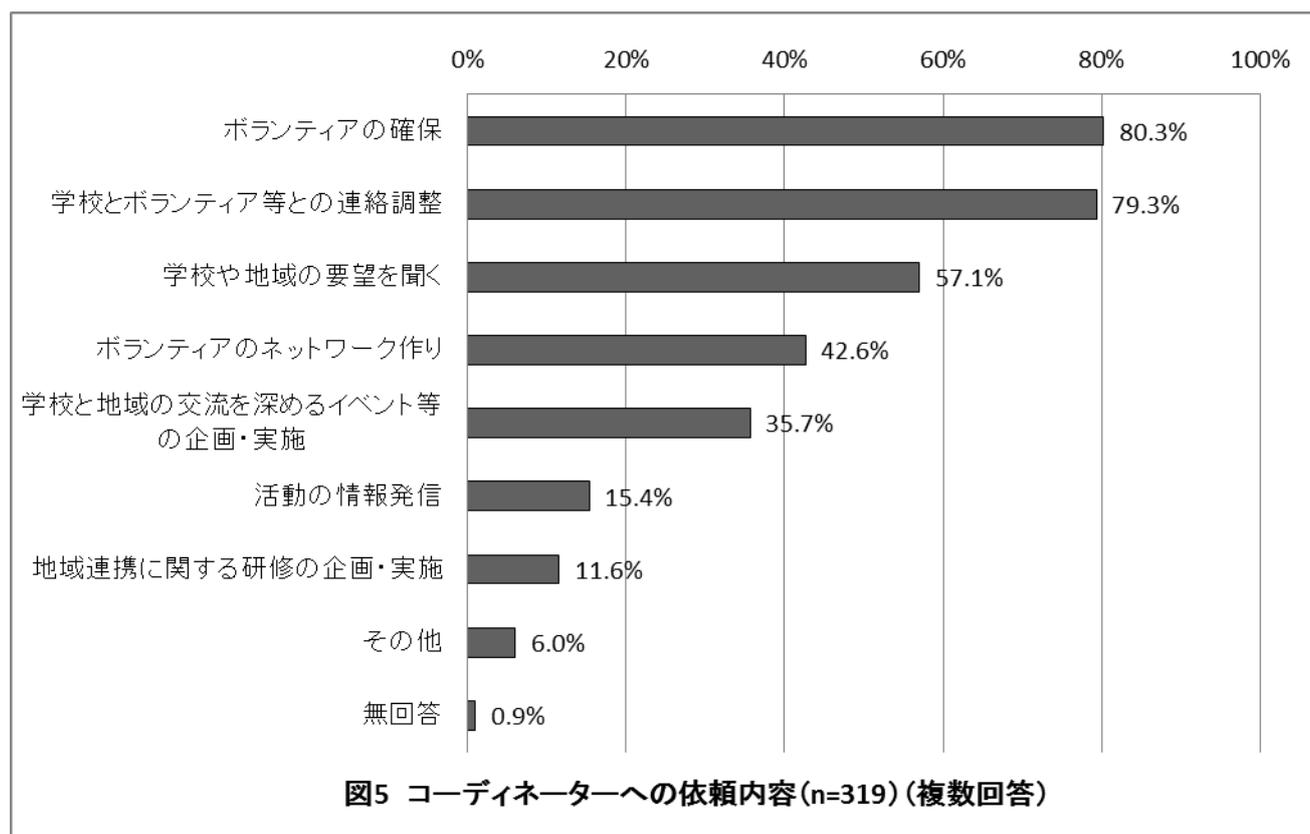
■「満足していない」理由

- ・コーディネーターが設置されて間もないことから、十分な話し合いがまだされていない。
- ・コーディネーターが決まったばかりで、実際の活動はこれからである。
- ・コーディネーターとの人間関係はできているが、本校での実務の連絡は副校長が窓口になっている。
- ・副校長と違い、地域連携担当とコーディネーターがコミュニケーションをとる時間や場が確保されていない。
- ・コーディネーターに仕事があるため、必要な時にすぐに連絡を取ることができない。
- ・コーディネーターが定職に就いてしまい、十分な情報提供ができない状況である。
- ・担任を持っているのでコミュニケーションの時間が取れない。
- ・地域連携関係以外の日々の学校業務が多忙のため、十分に連携を図る時間が取れない。



地域連携教員の役職とコーディネーターとのコミュニケーション満足度の関連を見ると、【図 4-2】のようになり、教頭・副校長、主幹教諭、教務主任よりも、教諭の方が「満足していない」割合が高いことがわかった。教諭は、学校側の窓口となっていないこと、時間を取ることが難しいことから、コーディネーターとコミュニケーションをとりにくい環境にあることが考えられる。

③ コーディネーターへの依頼内容



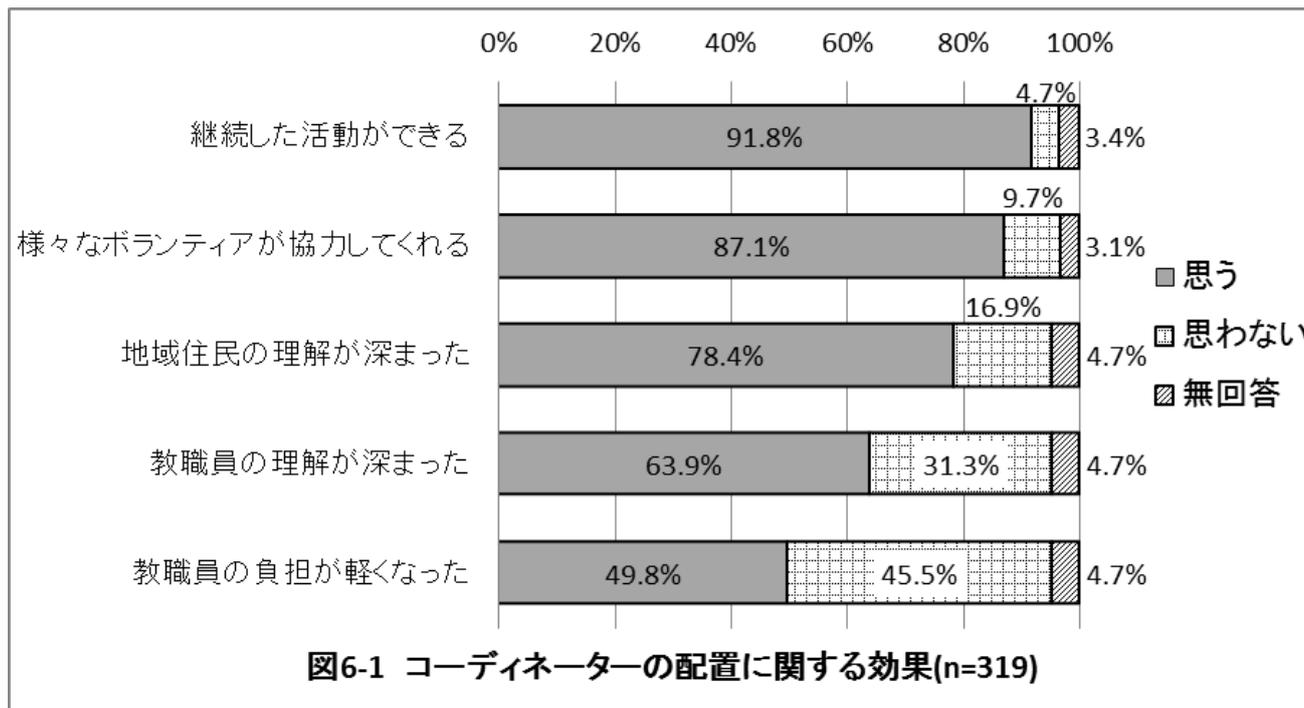
コーディネーターに依頼している内容について、「学校支援ボランティアを確保する」が 80.3%、「学校とボランティアや外部の団体・機関等との連絡調整を行う」が 79.3%と高い割合である。

一方、「学校の広報紙やホームページを通して情報を発信する」は 15.4%、「地域連携に関する研修を計画したり、実施したりする」は 11.6%と低く、教員や地域住民の理解を深め、組織的・効果的に活動を進めるための取組をコーディネーターに依頼したり、一緒に取り組んだりしている学校は少ない様子が見られた。

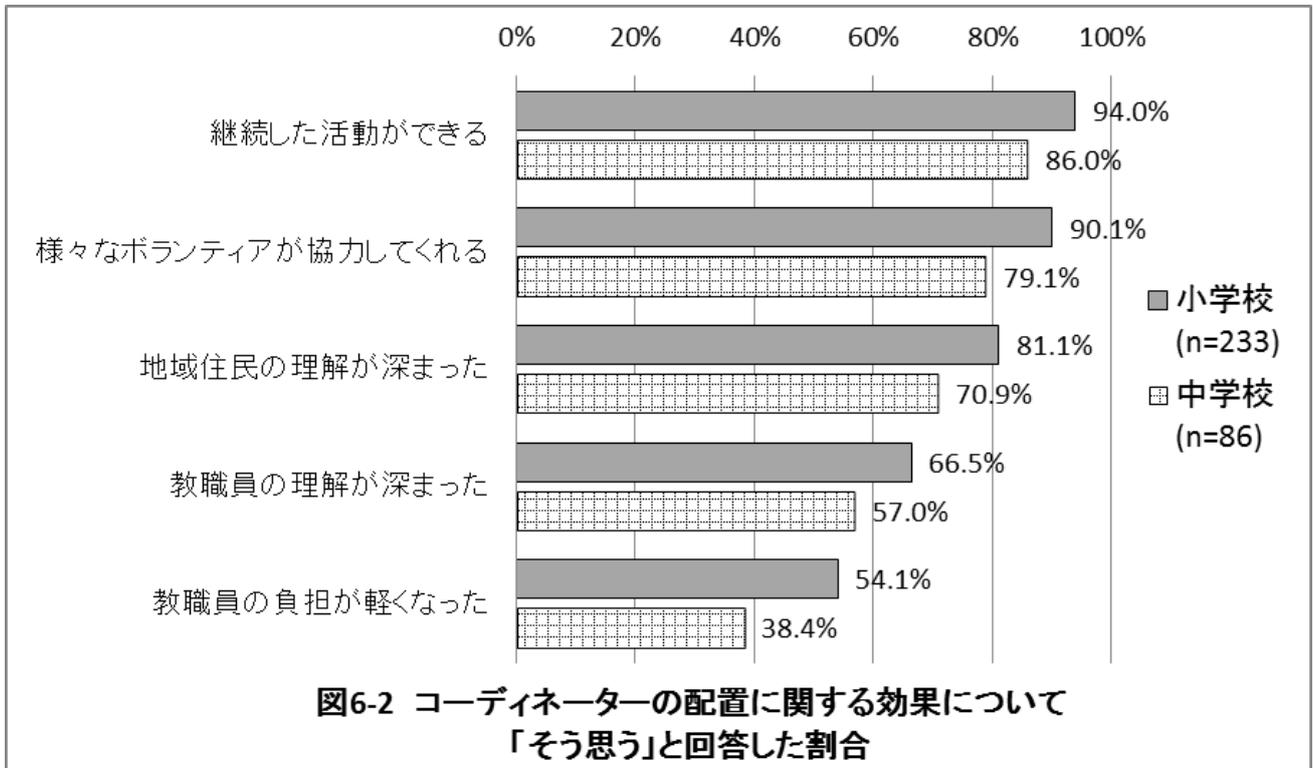
【図 5】

- ＜参考＞「その他」の回答
- ・ボランティアの月予定表を印刷し、ボランティアに配布
 - ・地域協議会の運営業務、情報発信
 - ・回覧物の自治会への依頼
 - ・地域連携活動経費の会計
 - ・学校支援ボランティアとしての活動
 - ・放課後子ども教室の講師
 - ・小学校との連携の橋渡し役
 - ・地域の巡回指導や学校敷地内の緑化運動への協力

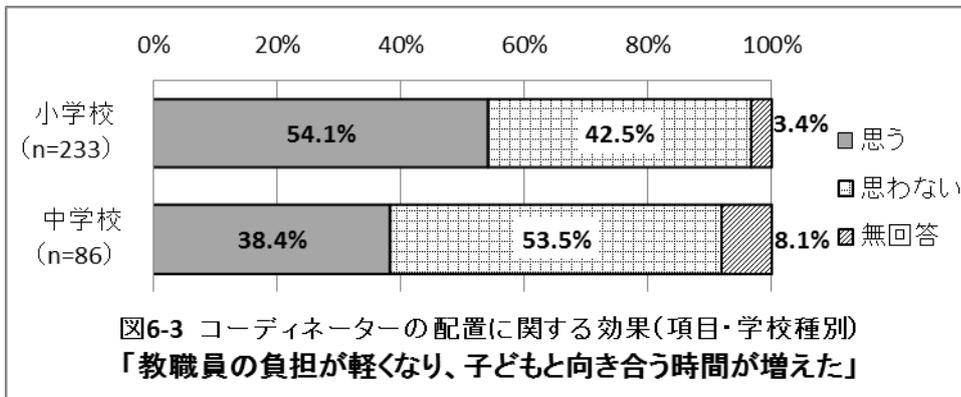
④ コーディネーターの配置に関する効果



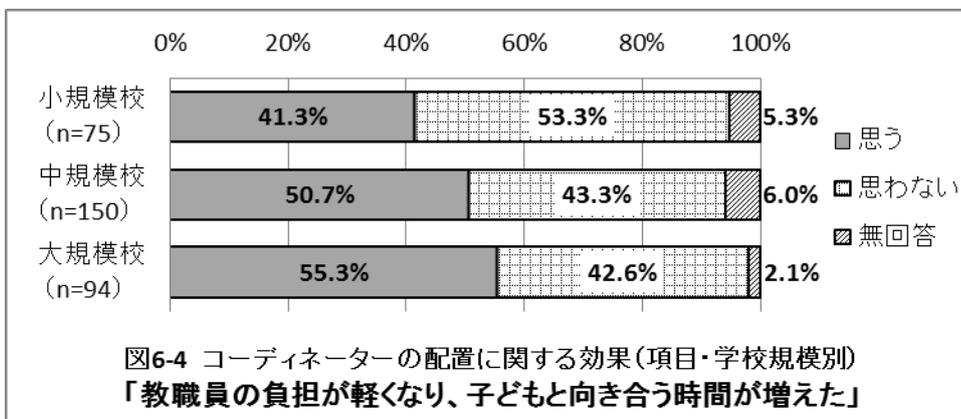
コーディネーターの配置に関する効果として図 6-1にある5つの項目を聞いたところ、全体の91.8%が「学校と地域のつなぎ役となり、継続した連携活動ができるようになった」について「そう思う」と回答した。また、「様々な人がボランティアとして協力してくれるようになった」、「地域住民の学校への理解が深まった」についても、「そう思う」と回答した割合がそれぞれ 87.1%、78.4%と高くなった。一方、「教職員の負担が軽くなり、子どもと向き合う時間が増えた」について「そう思う」と回答した割合は 49.8%にとどまった。【図 6-1】



コーディネーターの配置に関する効果について学校種別に見てみると、小学校の方がどの項目においても中学校より効果を感じていることがわかった。【図 6-2】

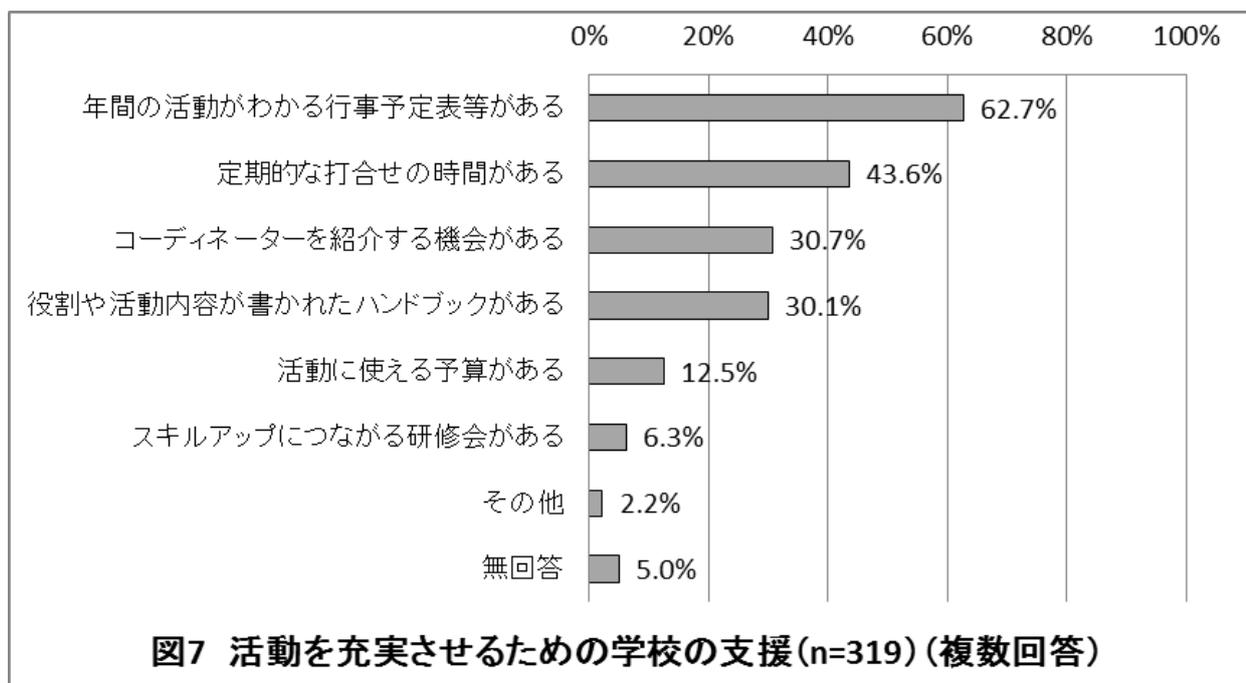


「教職員の負担が軽くなり、子どもと向き合う時間が増えた」について学校種別に見ると、中学校より小学校の方が「そう思う」と感じた割合が15.7ポイント高くなった。【図 6-3】



また、「教職員の負担が軽くなり、子どもと向き合う時間が増えた」について学校規模別に見ると、「そう思う」と感じた割合は学校規模が大きくなるにつれて高くなり、大規模校で55.3%であった。小規模校は41.3%であり、大規模校と14ポイントの差があった。【図 6-4】

⑤ コーディネーターの活動を充実させるための支援体制

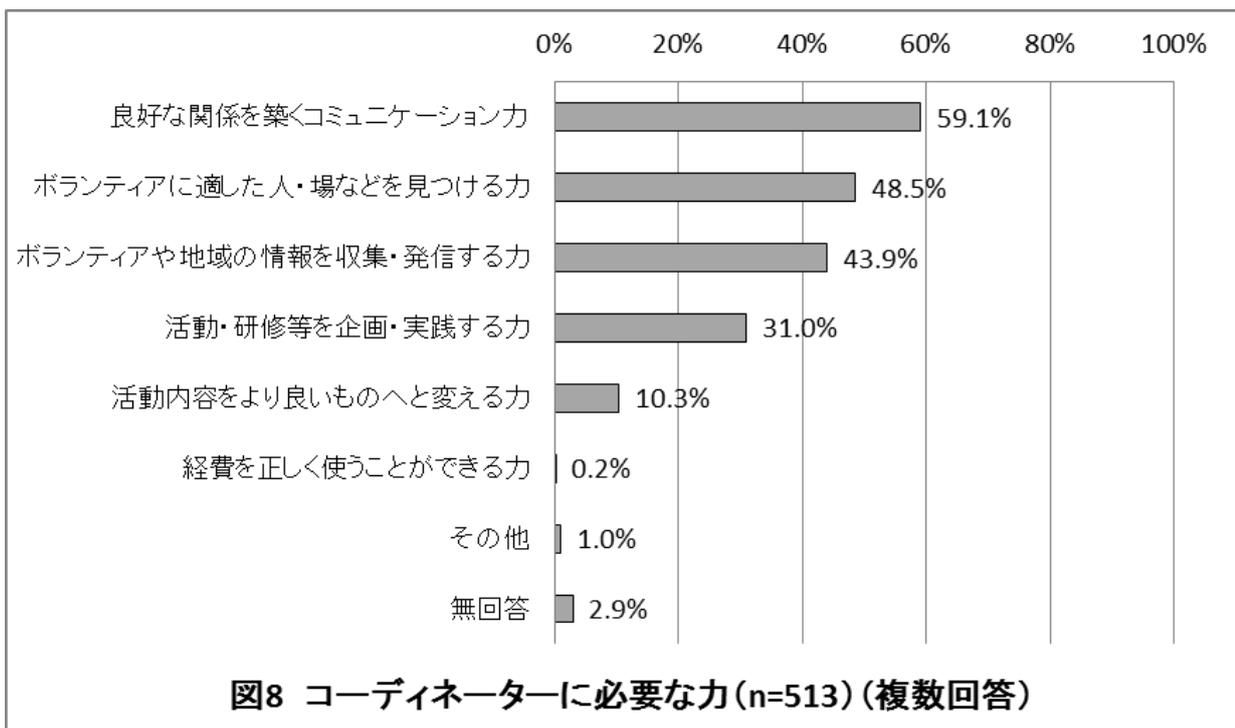


コーディネーターの活動が充実するために、学校ではどのような支援体制が必要かについて聞いたところ、「年間の活動がわかりやすくなるような、学校支援ボランティアに関する行事予定表などを作成する」が62.7%と最も高くなった。【図7】

<参考>「その他」の回答

- ・コーディネーターやボランティアの部屋(教室)の確保
- ・コーディネーターの複数配置による負担軽減とスムーズな引継ぎ

⑥ コーディネーターに必要な力



地域連携を進める上でコーディネーターに必要な能力やスキルについて聞いたところ、「教員やボランティアと良好な関係を築くコミュニケーション力」が59.1%と最も高くなった。【図8】

＜参考＞「その他」の回答

- ・積極性(先生は地域に対して受け身な人が多いので)
- ・地域連携の必要性を感じ、意欲をもって取り組もうとする力
- ・学校教育及び学校生活に精通した上で、様々な提案ができる力

⑦ その他、コーディネーターの活動・配置等に関する意見

コーディネーターの必要性について、既に配置されている学校の地域連携教員からは、学校支援ボランティア活動の実施を通してコーディネーターの効果を感じていることから、必要であるとの意見が多く出された。「コーディネーターが協力的で、よく活動してくれるのでとても助かっている」という感謝の声もたくさん聞かれた。また、配置されていない学校の地域連携教員からも、「活動を円滑に行うためにコーディネーターの必要性を感じる」という意見が出された。一方、地域と近い関係にあたり、学校支援ボランティアが自主的に活動できたりする学校の地域連携教員からは、コーディネーターの必要性を感じないという意見も聞かれた。

コーディネーターが配置されていない学校の地域連携教員からは、「コーディネーターを学校独自で見つけることが難しい」との意見が多くあげられた。特に目立った意見は、「コーディネーターの配置を行政が主となり制度として進めてほしい」、「コーディネーターになり得る人を紹介してほしい」、「研修でコーディネーターを養成してほしい」等、行政からの支援がほしいという意見であった。

コーディネーター配置上の課題として、コーディネーターの負担が大きいこと、次にコーディネーターを引き受けてくれる後継者が見つからないことが多くあげられた。このことを踏まえ、コーディネーターの複数名配置を希望する意見も多くあげられた。既に複数名が配置されている学校の地域連携教員からは、「複数名のコーディネーターがいることで活動が充実し、円滑に進めることができている」との意見もあった。また、コーディネーターの活動頻度や活動内容を鑑み、「ある程度の予算が必要である」との意見も聞かれた。

コーディネーターにふさわしい人物像については、学校教育や学校の実情を理解してくださる方という意見が最も多かった。

また、地域連携教員の課題として、「業務が忙しく、なかなか地域連携まで取り組めない」、「他の分掌を担当する教員との役割分担が難しい」等、学校の体制を整えることについての意見があげられた。

ここでは、主な記述内容のみ掲載する。【資料 4】

※詳細はP65「学校支援のためのコーディネーターに関する調査(地域連携教員用) 問 7 記述内容一覧」参照)

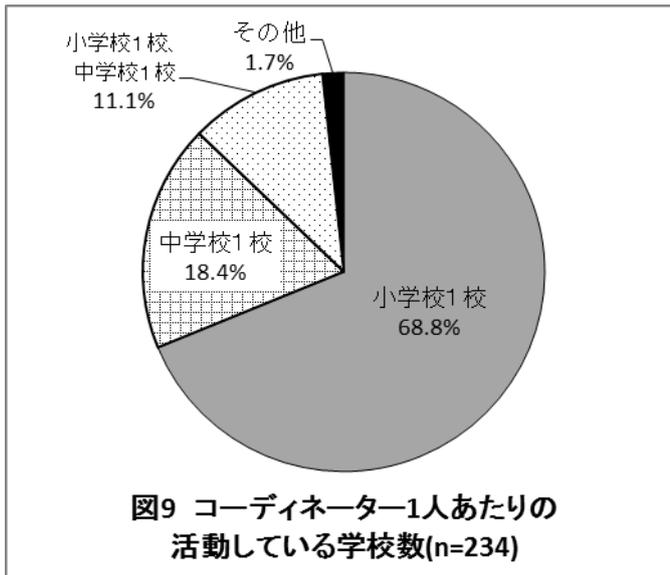
＜資料 4＞ その他、コーディネーターの活動・配置などについての意見に関する主な記述内容

- ・地域連携を推進するにあたり、コーディネーターの配置は不可欠だと思われる。
- ・地域コーディネーターのお陰で、様々な方がボランティアとして学校に来てくれ、教育活動の充実が図れた。学校の要望に快く応えてくれてありがたい。
- ・本校では、コーディネーターが配置されているため、地域連携に関する活動が円滑に実施されていると思う。
- ・本地区にも地域コーディネーターがいてくれるとありがたい。
- ・今後社会の様々なニーズと変化に対応するには、地域をまとめるコーディネーターの必要性をととも感じている。
- ・各学校の地域の実情に応じてコーディネーターを設置したり、しなかったりすればよいのではないかと。一律にコーディネーターを配置したからといってうまく機能するとは限らないのではないかとと思う。

- ・町の教育委員会や生涯学習課でいろいろ手配して下さるので、あえてコーディネーターの必要性を感じない。
- ・学校が独自でコーディネーターを見つけていくことは、現実的に難しい状況だ。今後、県や市と協力し適任者を探していく必要性は感じるが、地域連携教員の力では限界がある。
- ・男性・女性各1名ずつコーディネーターを行政(生涯学習課)で確保して欲しい。学校が探するのは、とても大変である。
- ・行政が予算化等してコーディネーターを養成し、各学校に配置できれば一歩先に進むと思われる。
- ・本校のコーディネーターはとても協力的である。その分、コーディネーターの負担も大きいように感じる。また、次期のコーディネーターを探すことが難しい。
- ・現在のコーディネーターは3年目になるが、今後継続してくれるかは未定。コーディネーターを新たに見つけるのが大変。
- ・本校のコーディネーターは、よくやってくれている。ただ、本人は言っていないが、負担を大きく感じる。コーディネーターは複数人いると都合がよいと思う。
- ・3校が統合し、それぞれの地区からコーディネーターを1名ずつたてることができたので、本当によかった。その地域の歴史・風土をよく知る方々がなってくれ、総合的な学習の時間もスムーズに実施できるようになった。
- ・コーディネーターは基本的にはボランティアであるが、活動の活性化のためには市全体として謝金等を予算化してもらえるとありがたい。
- ・コーディネーターが地域にしっかりとした人脈をもち、学校の要望に対して前向きに対応してくれるので、地域の人材を大いに活用することができる。
- ・コーディネーターも仕事をしている。私も担任しながら地域連携教員をしているので、お互い忙しく、なかなか打合せをする時間がない。
- ・教頭・学年主任・地域連携職員・コーディネーターの役割分担が難しいと感じる。

(2)コーディネーター

① コーディネーター1人あたりの活動している学校数

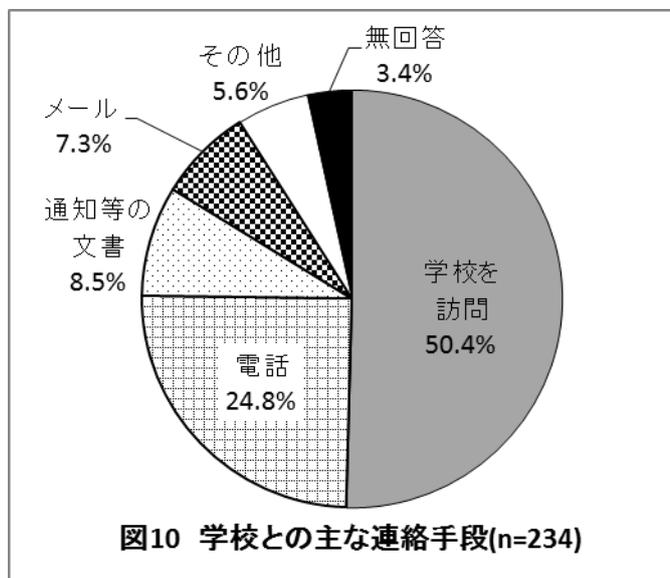


コーディネーターとして活動している学校数について、9割近くのコーディネーターが小学校または中学校どちらか1校で活動していることがわかった。また、近隣の小学校、中学校それぞれ1校ずつで活動している方も11.1%いた。【図9】

<参考>その他の回答

- ・小学校2校 1人
- ・小学校4校、中学校2校 1人
- ・小学校3校、中学校1校 2人

② 学校との主な連絡手段

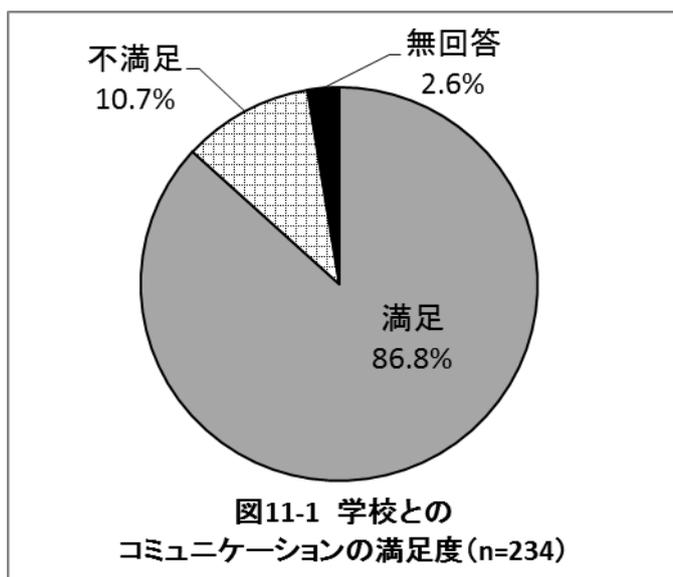


学校との主な連絡手段について聞いたところ、「学校を訪問して会って話す」と回答したコーディネーターが約半数であった。次に「電話で話をする」が24.8%と多かった。【図10】

<参考>その他の回答

- ・同校の職員同士
- ・FAXを利用
- ・SNS
- ・会議を通して連絡する。
- ・まだ実際の活動はスタートしていない。
- ・電話で連絡をいただき、訪問する。
- ・電話と文書を併用し連絡を取る。
- ・週に1度、放課後教室のため学校に行っているの、そのときに担当の先生と連絡を取り合う。
- ・コーディネーター会議(月1回)

③ 学校とのコミュニケーションについて



学校とのコミュニケーションについて、「満足している」と回答した割合は86.8%であった。その理由として「学校を訪問する機会が多く、その都度先生と話している」、「月1回打合せを行っている」等、会って話をする機会が十分にあるという回答が目立った。また、「活動にあたり、積極的に意見を交換している」、「打合せや相談をしながら活動の計画・準備をし、運営している」といった先生と一緒に活動を作りあげているという意見もあった。「活動している教室に必ず先生が来てくれる」、「コーディネーターの意見を丁寧に聞いてもらえる」、「担当の先生がよく声をかけてくれる」等の先生のコーディネーターに対する親身な姿勢・行動もコミュニケーションに満足している理由としてあげられた。さらに、「学校全体がコーディネーターの仕事を理解している」「担当の先生が不在でも、他の先生が窓口となり、伝言できる」といった学校全体での体制づくりや活動への理解に関する声も聞かれた。

一方、「満足していない」と回答した理由として、コミュニケーションの時間が取れないという意見が最も多くあげられた。また、コーディネーターとして指名されたばかりで、まだコミュニケーションが十分にとれていないという意見もあった。【図11-1、資料5】

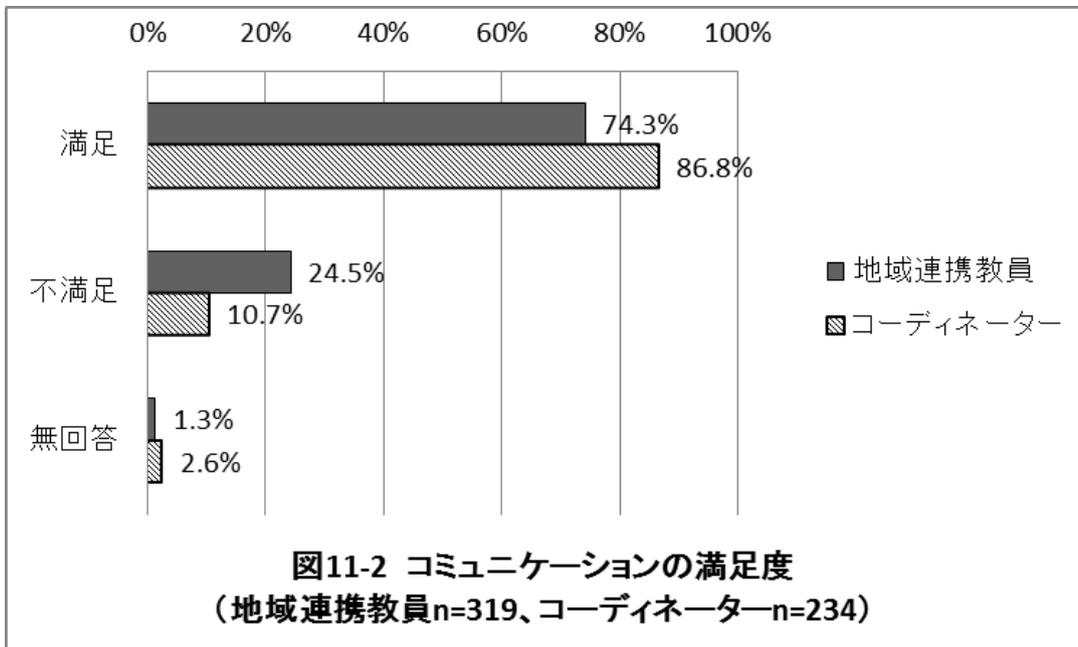
<資料5> 学校とのコミュニケーションの満足度に関する主な記述内容

■「満足している」理由

- ・定期的にメール、訪問で連絡を取っているから。
- ・地域連携活動推進関係者打合せを毎月行っているから。
- ・少なくとも週2回以上は職員室を訪問し、会う機会が多いから。また、顔を合わせた際、先生の方から話しかけてくれるから。
- ・活動にあたり、積極的な意見交換を実施しているから。
- ・お互いに案を出し合い、話し合いながら進めているから。
- ・どちらかが一方的ではなく、話し合いをしながら活動できているから。
- ・地域連携教員が話し合いに積極的に参加してくれるから。
- ・活動している教室に必ず先生が来てくれるから。
- ・事前に資料等を作っておいてくれ、打合せもスムーズにできるから。また、コーディネーターの意見を丁寧に聞いてくれるから。
- ・よく声をかけてくれ、些細なことでも気兼ねなく話すことができるから。
- ・活動後は、コーディネートをした内容について担当の先生が連絡をくれ、このことが活動への意欲と内容の向上につながっているから。
- ・担当の先生と会えない場合は、他の先生によるフォローがあるから。
- ・地域連携教員とそれをバックアップする体制があるので、情報交換に不便を感じていないから。
- ・副校長が窓口となり、担当の先生が不在でも伝言できるから。
- ・学校全体がコーディネーターの仕事を理解してくれているから。

■「満足していない」理由

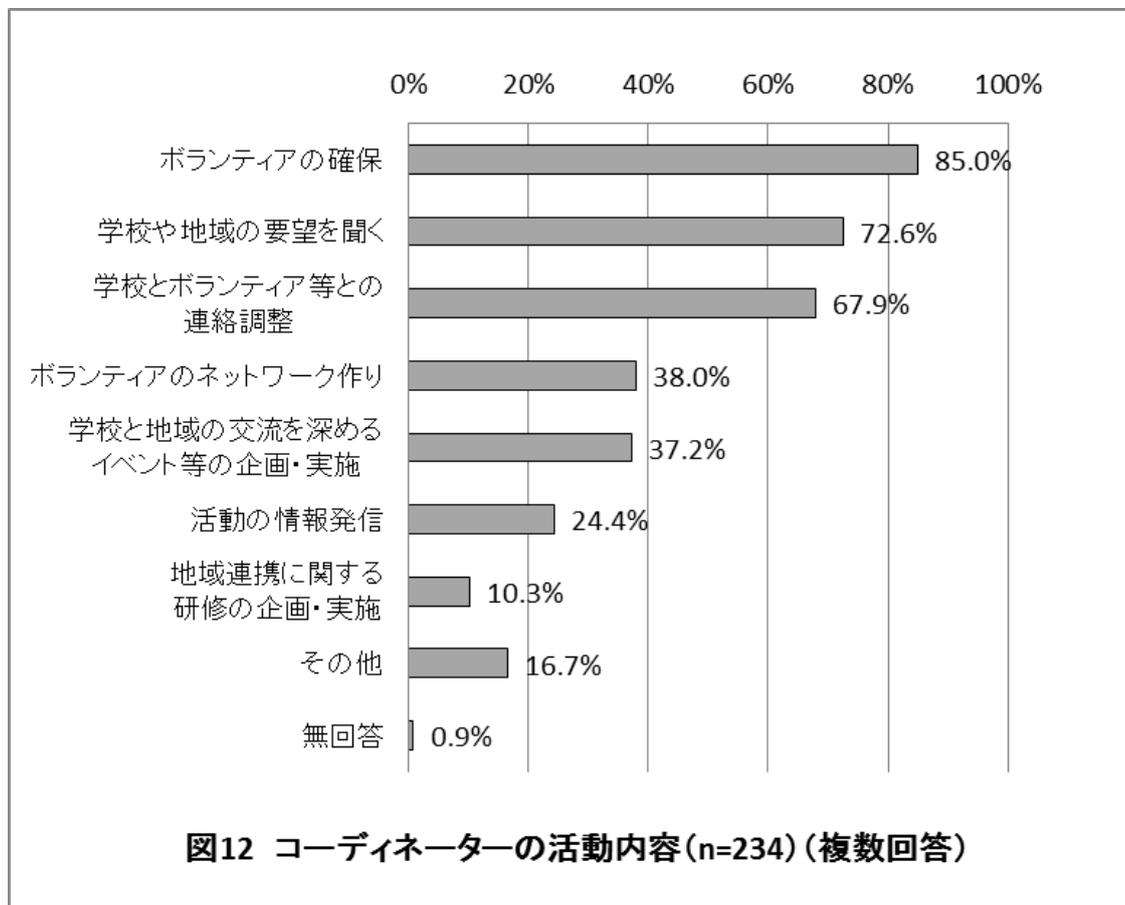
- ・先生も忙しいと思うが、事前の打合せが十分でないから。
- ・授業の進み具合に合わせてボランティアがどのような点に注意すればよいのか、打合せが不十分だから。
- ・コーディネートした内容について、活動後、担当した先生とのコミュニケーションが十分でないと感じているから。
- ・今年度からの活動なので、まだ活動が少ないから。
- ・まだ具体的な活動はしていないから。



コミュニケーションの満足度について、地域連携教員とコーディネーターの回答を比較してみると、コーディネーターの方が「満足している」と回答した割合が高いことがわかった。調査では、「自分が学校側の窓口となっていない」「連絡を取り合う時間の確保が難しい」等の理由から、コーディネーターとのコミュニケーションに「満足していない」と感じている地域連携教員は、担任をしている教諭では 35.0%、担任をしていない教諭では 31.3%いることがわかった(P10 資料 3、P11 図 4-2 参照)。一方、コーディネーターは、「学校全体がコーディネーターの仕事を理解している」「担当の先生が不在でも、他の先生が窓口となり、伝言できる」等の理由から、学校とのコミュニケーションに「満足している」と感じている人もいる(P18 資料 5 参照)。地域連携教員は自分がコミュニケーションをとることが難しいことに対して、コーディネーターは他の教員が代わりに対応してくれる等で学校とのコミュニケーションが図れることから、コーディネーターの満足度の方が高いと推測される。【図 11-2】

④ コーディネーターの活動内容について

コーディネーターの活動内容について聞いたところ、「学校支援ボランティアを確保する」が 85.0%、「学校の先生や地域(地域住民、ボランティア、外部団体・機関等)の要望を聞く」が 72.6%と高くなった。「ボランティア間の交流を深め、円滑な関係づくり(ネットワークづくり)を行う」、「学校と地域の交流を深める行事やイベントなどを計画したり、実施したりする」といった地域の住民同士や学校と地域間の相互理解を深める活動を行っているという割合は 4 割程度であった。また、「地域連携に関する研修を計画したり、実施したりする」と回答した割合は全体の 10.3%であった。【図 12】

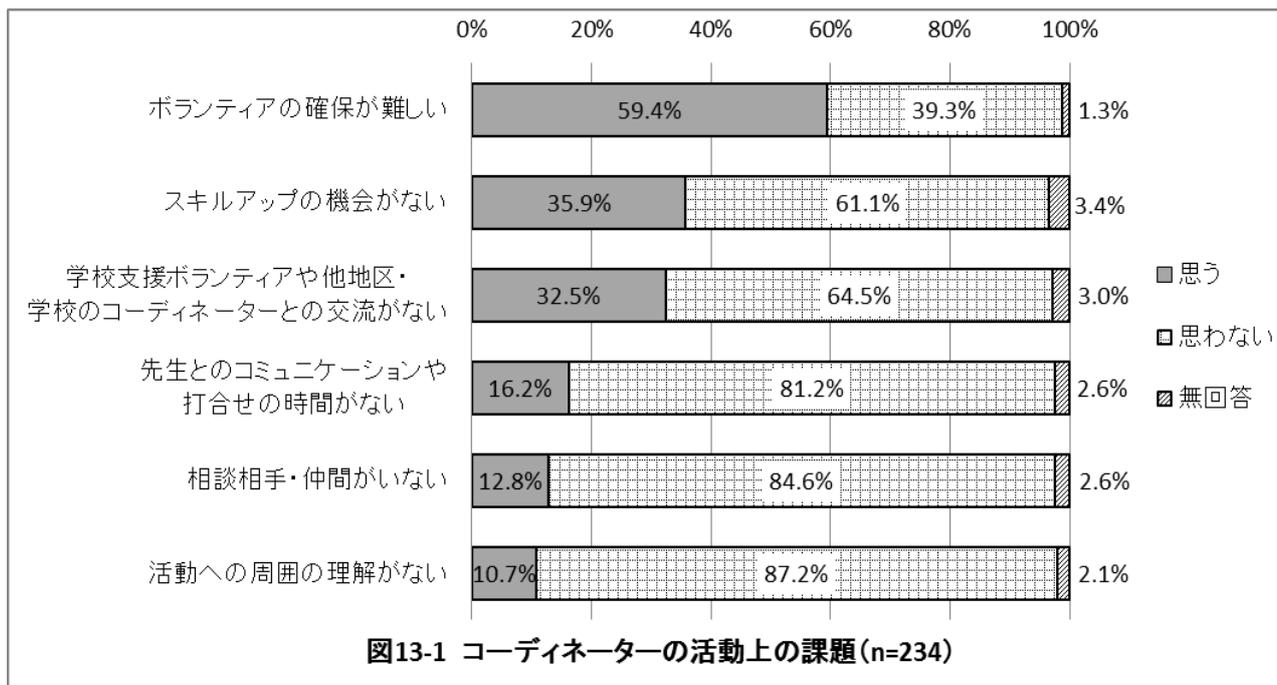


<参考>その他の回答

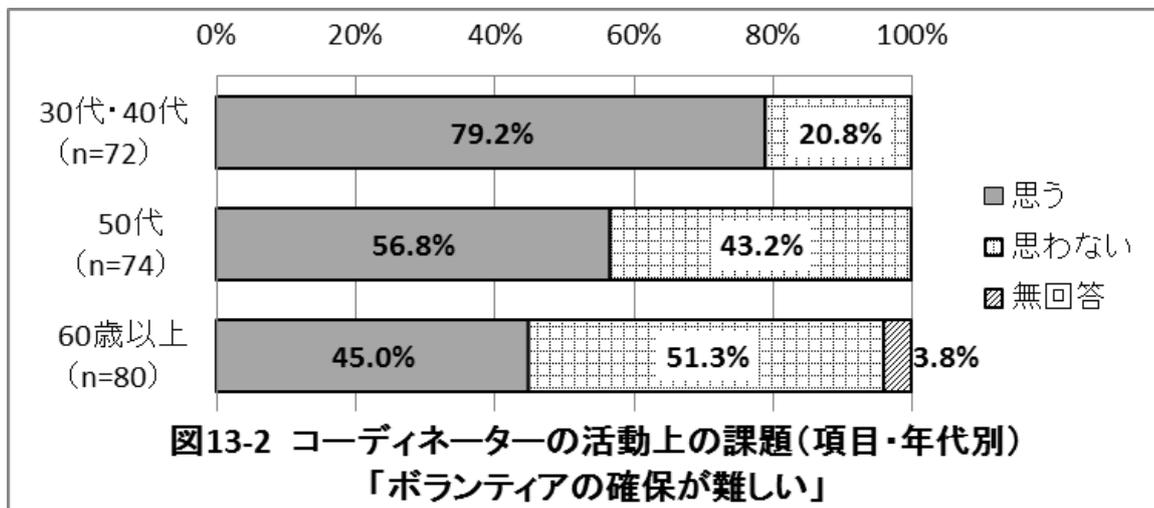
- ・公開授業等に計画的に出向いて、状況を把握する。
- ・学校行事を見学したり、参加をしたりしながら、学校の取組を理解する。
- ・ボランティア後、協力してくれた方々と反省等の話合い。
- ・外部の団体、機関等の会合に参加する。
- ・地域メッセへの参加、地域協議会の準備・地域行事のお手伝い
- ・学校(教員)とボランティアの交流・親睦会を設け、意見交換する機会をつくる。
- ・地域協議会の事務局として、担当の先生と協力しながら協議会の開催と協議会運営事務の全般を行っている。
- ・会議の準備・会議記録の作成・経費の精算など
- ・市への事業報告(ヒアリング含む)、会計全般、会議開催準備、物品購入
- ・学校からの依頼をまとめ、書類を作成して各ボランティアに渡し、まとめる。
- ・ボランティア団体の会議の時にお知らせ、募集、報告

- ・学校から地域の人へのアンケート。取りまとめる場合、単に配布するだけでなく、事項に即し、内容にあった人材を見つけて実施する。
- ・地域のイベントに積極的に参加し、コミュニケーションを深める努力をしている。
- ・市内のコーディネーターによる月 1 回の情報交換
- ・夏休みの作品仕分け等の手伝い
- ・夏休みのサマースクールへの全面的な協力
- ・学校支援地域本部委員(各自治会 1 名)との情報交換を心がける。
- ・放課後子ども教室の運営
- ・学校の文化祭を軸にした地域連携の拡大
- ・学校支援ボランティアとして活動する。
- ・地元警察と連携して青色パトロールを実施。
- ・学校支援組織「親父の会」の活動に参加・指導・協力。
- ・家庭教育学級の運営や支援
- ・活動広報紙の発行、会議だよりの発行
- ・年 3 回ボランティアだよりの発行
- ・担当する先生と月 1 回の地域連携活動推進打合せ会の実施。
- ・学校が安心して教育に打ち込める環境づくりを念頭におき、地域や学校の保護者ができる支援を考え、必要に応じて学校長と懇談する機会を設けている。
- ・まだ具体的に活動していない。

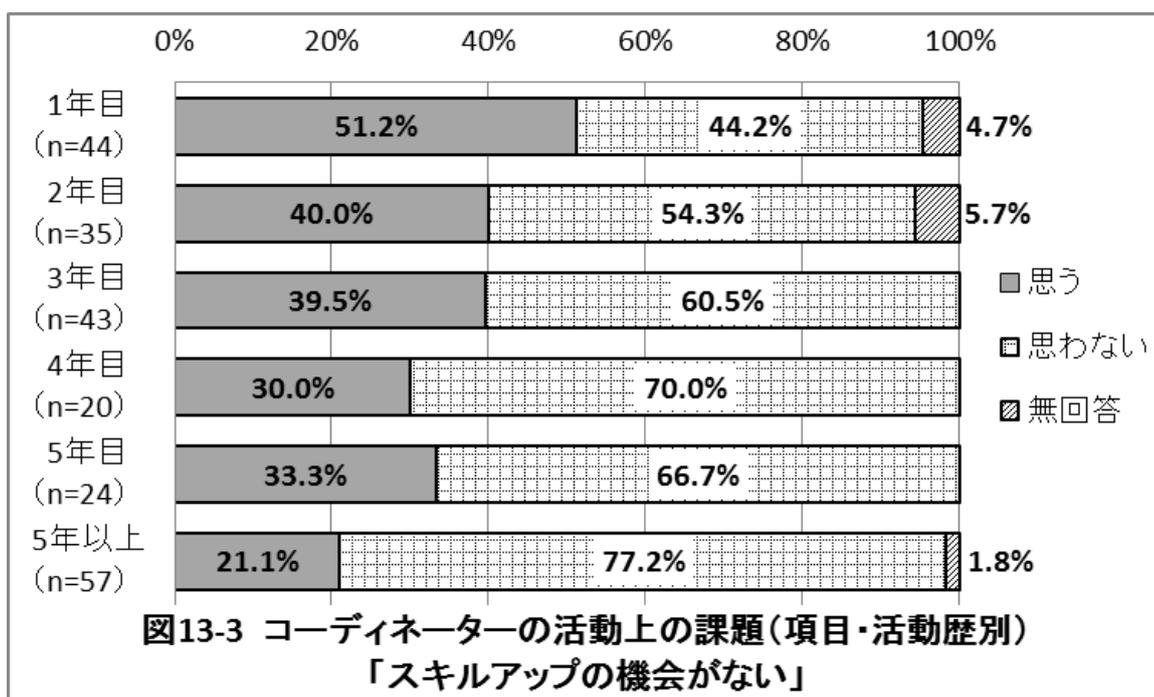
⑤ コーディネーターの活動上の課題



コーディネーターとして活動する上での課題として、【図 13-1】にある 6 つの項目について聞いたところ、「そう思う(課題だと思う)」と回答した割合が最も高かったのは「ボランティアの確保が難しい」で 59.4%であった。一方、「活動に関して、教職員や保護者、地域住民の理解が得られない」については 10.7%と最も低かった。



コーディネーターの活動上の課題について年代別に見てみると、コーディネーターの年代が若いほど「ボランティアの確保が難しい」と感じている割合が高いことがわかった。【図 13-2】



コーディネーターの活動歴別に課題を見てみると、活動歴が短いほど、自分自身のスキルアップの機会を求めている傾向にあることがわかった。【図 13-3】

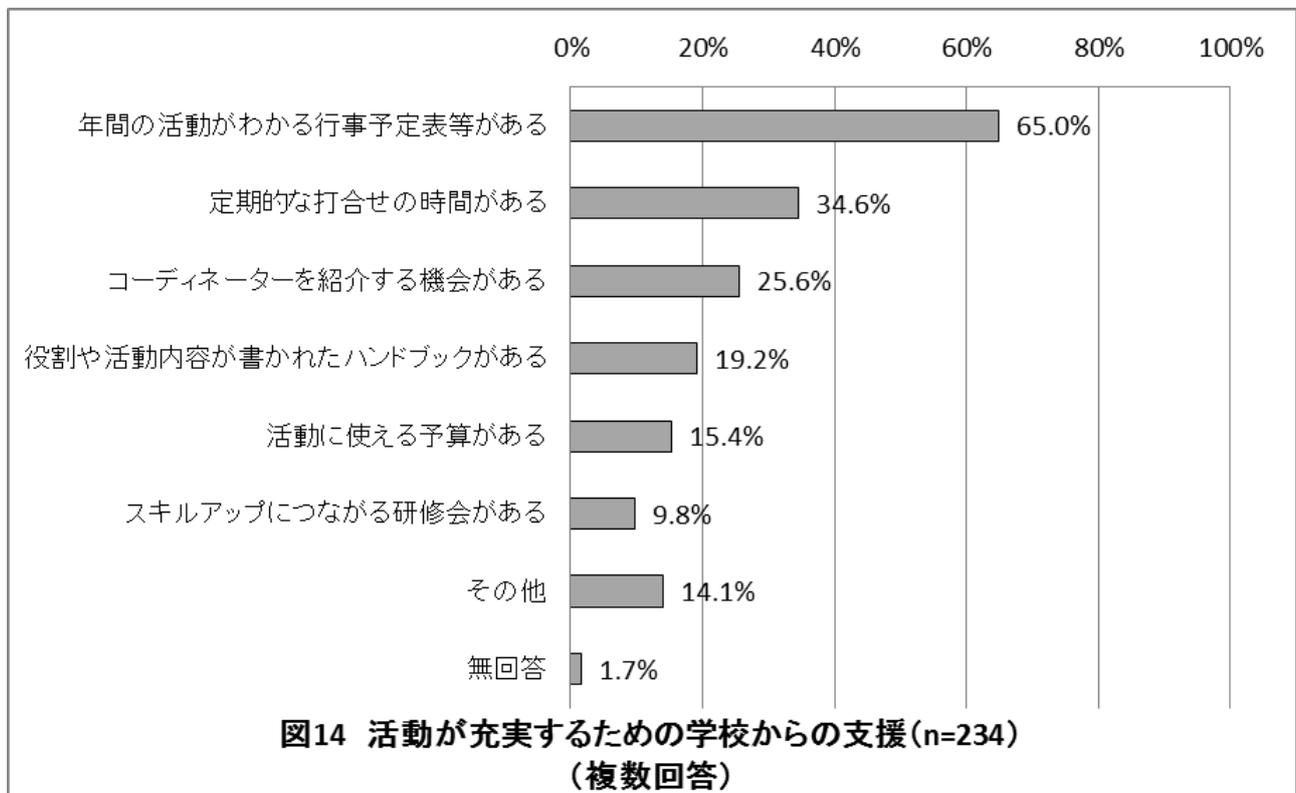
「その他」の課題として、「コーディネーターを複数名配置してほしい」、「コーディネーターである自分自身が忙しい」、「後任を見つけることが難しい」、「コーディネーターの認知度が低い」といった課題があげられた。

＜参考＞その他の回答

- ・学校に余計な負担をかけないよう、どう活動していくか。
- ・活動の継続(計画性)←自分たちの管理能力が低い。
- ・コーディネーターの認知度は低い。コーディネーターが複数ほしい。
- ・5人のコーディネーターがいるので助かっている。
- ・活動への周囲の理解がないことについて、教職員はそう思う、地域住民・保護者はそう思わない。
- ・学校からボランティア登録者全員に依頼があるわけではなく、活動の協力をお願いできない人がいること。

- ・ボランティアの人数の確保はできているが、複数のボランティアをかけもちしている方が多い。
- ・新しいボランティアの確保
- ・ボランティアの高齢化、固定化によって、活動自体が制約を受けつつある。
- ・活動を継続させるための後継者が見つからない。
- ・後任が見つからない。
- ・教育事務所の研修を受け(H18)、活動も10年間続けてきたが、そろそろ後継者づくりも考えていかなければと思っている。
- ・学校にどんなボランティアが必要か。どこまでボランティアが入っていけるか、入っていいのか、必要とされているのか、わからない。
- ・地域やPTA関係の行事が多く、地域協議会まで協力の手がまわらないように感じるため、負担をかけずに支援できるあり方を日々模索している。
- ・コーディネーターをしている自分自身、時間の都合をつけることが難しくなっている。
- ・コーディネーター自身が忙しいと(自分の仕事などで)研修等の参加が難しい。
- ・まだPRが足りないためか？学校支援ボランティア活動の認知度が低い。
- ・未来アシストネットの言葉や組織のことが地域に浸透していない。
- ・地域の課題や人材についてのアンテナをより広く持つこと。

⑥ コーディネーターの活動を充実させるための学校からの支援

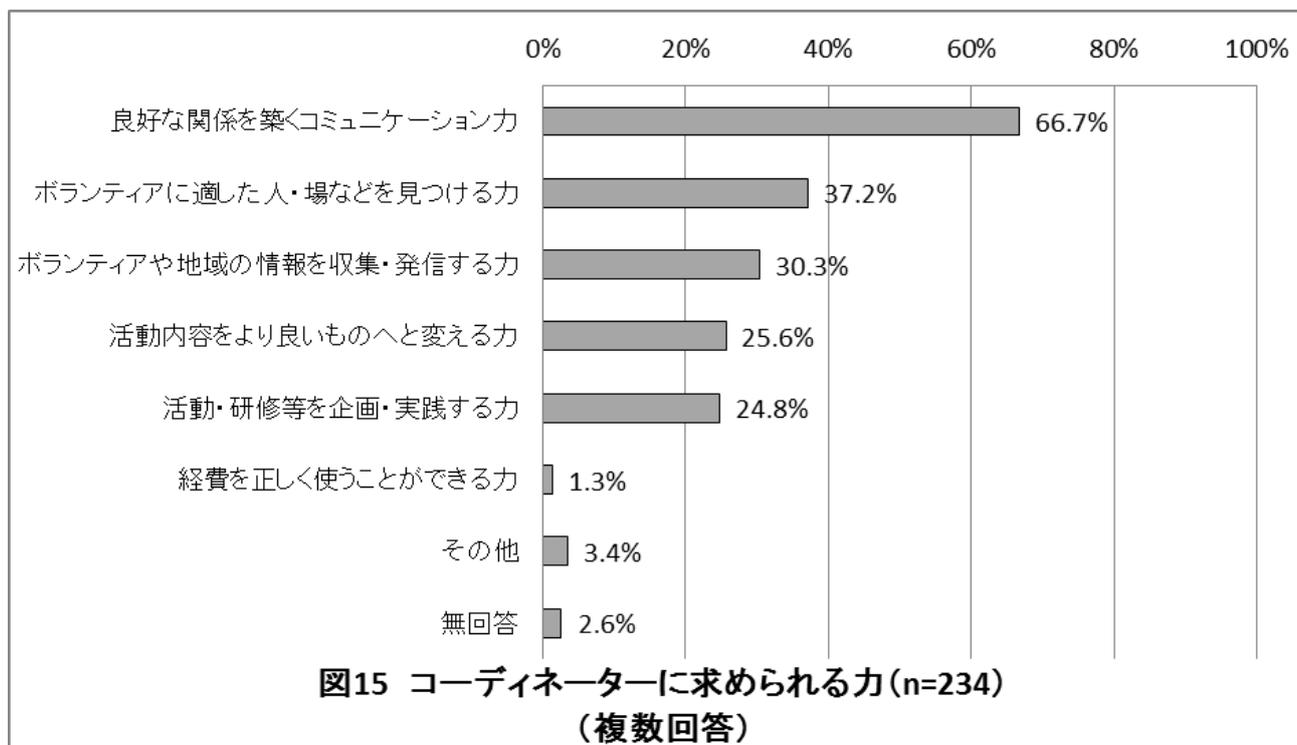


コーディネーターの活動が充実するために、学校からどのような支援があるとよいかについて聞いたところ、「年間の活動がわかりやすくなるような、学校支援ボランティアに関する行事予定表などがある」が65.0%と最も高くなった。【図14】また、「その他」の意見として、「コーディネーターやボランティアが活動・交流できる専用の場所がほしい」等という意見が見られた。

<参考>その他の回答

- ・ボランティア専用部屋があるとよい。現在コーナーなので、学校にスペースの許可をとらずに活動を行えると楽かも…。
- ・ボランティア・コーディネーターetc 活動できるスペースの提供
- ・(私が関わる学校にはあるが)共有でもいいので、コーディネーターやボランティアの活動拠点となる決められた部屋が設置されているとより充実する。
- ・コーディネーターが活動に使うことができる拠点(居場所)が学校内にある。
- ・資料を置けたり、作業が行える専用の部屋がほしい。
- ・ボランティアルームなどのボランティアの居場所
- ・ボランティアの居場所(ボランティア同士の情報交換)
- ・学校支援ボランティアと交流できる場があるとよい。
- ・ボランティアが身近に学校を感じ、支援しなければならないような雰囲気。ボランティア室がほしい。
- ・コーディネーター同士の情報交換の時間が定期的にあるとよい。
- ・学校が今何を必要としているのか、遠慮なく伝えてほしい。
- ・学校からどんなニーズがあるのかを把握したいので、どんなささいなことでも話しやすいことが大切。
- ・学校のボランティアに期待する活動内容がより明確になるとよい。
- ・コミュニティスクールの在り方を先生とシェアしたい。
- ・担当の先生以外の先生の意見・希望を知る機会がある。
- ・全部の先生の理解が同じように深められたらよい。
- ・学校から支援をいただく考えは全くありません。
- ・十分に足りている。
- ・学校歴や教育方針等があるとよい。
- ・ボランティアや先生との確実な連絡ツール
- ・学校の課題等の情報
- ・年度が変わるのに伴い担当の先生が替わるときなど、引継ぎをし、継続性を維持してほしい。
- ・ボランティア要請の際、日程に余裕をもって依頼していただきたい(1ヶ月前)。
- ・先生からもボランティアの人数が増えるよう、なるべく声をかけてもらいたい。
- ・先生たちのあいさつが力になっている。

⑦ コーディネーターに求められる力



地域連携を進める上でコーディネーターに必要な能力やスキルについて聞いたところ、「先生やボランティアと良好な関係を築くコミュニケーション力」と回答した割合が最も高く、66.7%となった。【図 15】

<参考>その他の回答

- ・学校の実情をしっかりと把握して、真に役立つ活動をする力。
- ・コーディネーターに責任や能力を求めない。誰もが気軽にコーディネーターを引き受けられる環境。
- ・子どもたちのため、学校のためといった奉仕の精神？
- ・想像力(それぞれの立場や事態を客観的多角的に捉えさまざまな場面を想定する力)と創造力(気づきや思いつきを大切に自分なりの工夫やアイデアを企画に生かす力)
- ・地域との人脈
- ・すべてを受け入れるのではなく、「NO」も言える力。
- ・時間的なゆとりがほしい。

⑧ その他、コーディネーターの活動・配置等に関する意見

コーディネーターの活動・配置等に関する意見として、コーディネーターの活動上の課題に関する意見が多くあげられた。

全体としては、ボランティアの確保が難しいという課題が多くあげられた。その理由として、「保護者は、仕事をしているため時間的な余裕がなく、ボランティアが集まらない」、「活動が保護者にきちんと理解されていないため、ボランティアとして手を挙げてくれる人がいない」等、身近なボランティアとして活動してほしい保護者の協力を得ることが難しいという意見があげられた。また、「これまで依頼していたボランティアが高齢となり、活動が難しくなった」といったボランティアの高齢化も課題としてあげられた。

長く活動しているコーディネーターからはコーディネーターの後継者に関する課題があげられた。コーディネーターを引き受けてもらえない理由として、「コーディネーターの役目は荷が重い」、「コーディネーターの活動に魅力がない」というイメージがあるのではないかと意見が聞かれた。

40代、50代のコーディネーターからは、コーディネーターの負担が大きいとの声が聞かれた。コーディネーター自身も仕事や子育て等にまだまだ忙しい時期であり、「コーディネーターを中心に活動するのが難しい」、「責任や能力を求められると重荷を感じる」といった理由があげられた。

また、50代のコーディネーターを中心に、コーディネーターの予算(謝金)を付けてほしいという意見が出された。「無償のコーディネーターの活動を有償にしてほしい」という声とともに「コーディネーターの活動頻度や内容によって予算(謝金)を調整してほしい」との声が聞かれた。

コーディネーター活動の充実、負担の軽減、後継者を育成する等という視点から、コーディネーターの複数配置に関する意見も多くあげられた。

コーディネーターの活動上の課題に関する意見の他に、「学校の負担にならないように活動したい」、「学校の要望に応えられるように活動したい」といった学校への全面的な協力について意見を出されるコーディネーターもいた。

ここでは、主な記述内容のみ掲載する。【資料6】

※詳細はP72「学校支援のためのコーディネーターに関する調査(コーディネーター用) 問8 記述内容一覧」参照)

<資料6> その他、コーディネーターの活動・配置などについての意見に関する主な記述内容

- ・ボランティアへの依頼が大変で、一番のネックになっている。
- ・学校支援ボランティアの確保については、年度によってばらつきがあるように思う。理由として、学校支援ボランティアのような活動をしている人がいるということが保護者、地域の方に浸透していないからではないか。
- ・ボランティアの確保について。中学校では働き始める保護者も多く、企画してもなかなか集まらないのが課題である。
- ・長年担当し、定着しているボランティアが高齢となり、依頼が無理になった場合、バトンタッチできる人材を探すのは難しい。多少の技術を要するもの場合は特にそうである。
- ・地域の文化や歴史を知る人が高齢になり、いなくなった。
- ・コーディネーターの後任問題。バトンを渡す準備はできているのに渡す相手がいない。ボランティアならいいけど「コーディネーターはお断わり」。深刻である。
- ・コーディネーターに魅力がないと思う。だからコーディネーターどころかボランティアの確保すら難しい時代になっていると思う。
- ・コーディネーターは、普通の主婦や一般の保護者である。責任や能力を求められると重荷を感じる。
- ・個人的に多忙なため、コーディネーターを中心に活動するのが難しく、これから積極的に活動するには負担を感じる。
- ・同じ市内でも、学校によってコーディネーターの負担や存在感、依存度が大きく異なる。コーディネーターは、無償ボランティアではなく、場合によっては、有償であることも必要だと思う。
- ・有償で働くコーディネーターでなければ、十分に機能しない。
- ・コーディネーターもボランティアなので、複数配置をして負担を少なくし、活動が長くそして広く行われるようにしたい。
- ・活動の連続性維持のために、次世代のコーディネーターの育成が必要である。現在の学校ではコーディネーターが4名配置されているので持続的な活動が可能になっている。複数配置のメリットである。
- ・世代ごとにコーディネーターがいると、ボランティアの活動が広がると思う。
- ・学校の負担にならないように、子どもたちのためになる活動ができるとよいと思う。
- ・学校の要望にできる限りの協力ができるようにと思っている。

2 ヒアリング調査結果

(1) コーディネーターの活動状況について

アンケート調査の結果より、活動地区、活動歴、学校種等を踏まえ、活動を意欲的・継続的に進めているコーディネーター7名に協力いただき、活動状況、成果、課題等についてヒアリング調査を行った。

	学校名	コーディネーター名(敬称略)	活動歴
1	宇都宮市立晃陽中学校	齋藤 恵美子	7年
2	日光市立轟小学校	渡辺 新太郎	3年
3	益子町立七井小学校 益子町立七井中学校	大岡 忠男	14年
4	栃木市立皆川城東小学校 栃木市立皆川中学校	関口 浩子	5年
5	さくら市立上松山小学校	黒澤 道子	12年
6	那須町立田代友愛小学校	金田 裕美子	3年
7	佐野市立城北小学校	小林 みゆき 丸山 和美	3年 2年

ヒアリング調査では、以下の項目について聞き取りを行い、事例としてまとめた。

1	コーディネーターを始めるきっかけ コーディネーターとして活動を始めたきっかけについてまとめた。
2	コーディネート活動の概要 コーディネーターの活動内容、学校支援活動の中で特徴的なもの等についてまとめた。
3	コーディネート活動がうまくいくためのポイント 学校からの支援、自分自身で工夫していること、行政からの支援についてまとめた。
4	コーディネーターとしてのやりがい 活動していて感じる喜び、やりがい等についてまとめた。
5	活動上の課題 活動していて難しいと感じること、よりよい活動に向けての改善点等についてまとめた。
6	その他 活動への思いや意見についてまとめた。

事例 1

コーディネーター名	齋藤 恵美子	活動学校	宇都宮市立晃陽中学校
コーディネーター歴	7年目	経 歴	元保護者（PTA 役員）

1 コーディネーターを始めるきっかけ

宇都宮市が各学校に「魅力ある学校づくり地域協議会」を設置するのに伴い、晃陽中学校でもコーディネーターを配置することになり、PTA役員をやっていたことがきっかけでコーディネーターとして活動することになった。

2 コーディネート活動の概要

地域協議会のコーディネーターは 3 名である。活動内容は、「サポート会」活動の企画、活動ボランティアの募集、連絡調整、活動の運営補助等である。また、ボランティアの活動を保護者・地域住民に広く発信する「サポート会だより」の作成や「サポート会」の会計、事務書類の作成、会議の運営補助等も行っている。会計等の事務的な内容は 3 名で分担し、助け合いながら活動している。

「サポート会」は、晃陽中学校地域協議会の愛称であり、地域の代表として学校とともに学校経営の理念である「生徒が安心して力を発揮できる学校を目指す」の実現のため、教育の在り方を追求し支える団体として活動している。具体的な活動内容は、学校畑のうね作り、グリーンカーテン作り、宿泊体験学習の支援、先生の研究授業時の自習見守り活動等である。

○自習の見守り活動

先生たちが研究授業で他の授業を見るため自分の授業を自習にしなければならないとき、地域のボランティアが各教室に入り、生徒の自習を見守るという活動である。ボランティアが生徒を見ているため、先生たちも安心して研究授業に参加することができ、授業力の向上を図ることができている。



見守り活動の様子

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 活動への理解

学校は、「サポート会」の活動を理解してくれており、学校長がコーディネーターの相談によくのってくれている。

■ 保護者・地域との信頼関係づくり

コーディネーターとして活動していると、保護者や地域の代表等から学校への要望や意見を相談されることがある。それらの要望・意見に対して、学校はよく話を聞き、対応してくれるので助かっている。コーディネーターとしては、学校からの意見や情報も保護者・地域に伝え、学校・保護者・地域のコミュニケーションがよくとれるように心がけている。

② 工夫していること

■ 活動を始めるまで

コーディネーターを始めた頃は、学校で地域と連携した活動が行われておらず、ゼロからのスタートであった。「どうやって活動を始めたらいいいのか」、「他の学校でやっている活動を自分の学校でもやらなくては…」というプレッシャーばかり感じていたが、最初の 2 年はまず学校の状況を把握すること、PTA や地域団体の意見を聞くことから始めた。PTA の役員をしていたこともあり、先生と話をする機会は多かった。話をして、信頼関係ができてくる中で、学校から「こんな活動ができないか」といった要望が聞けるようになり、活動につながっていった。

■ 負担にならないように大切にしていること

先生も保護者も地域の方々も皆余裕がないと感じる。保護者や地域の方々の多くは仕事や生活が忙しく、また時間的に少し動ける方もPTAや地域の団体活動等でいろいろな役職をいくつも担っており、これ以上何かを強いるようになると負担になってしまうと感じている。先生も学校の業務が忙しく、時間的な余裕がないのが現状である。このような中、「サポート会」の活動として何か新しい活動を生み出していくことは難しい。そこで、新しくいろいろな活動を立ち上げるのではなく、学校が安心して教育に打ち込める環境づくりを応援するために、今ある学校の活動の中から地域や保護者が支援できるものを厳選し、「サポート会」の活動内容としている。

■ ボランティアを集める際に工夫していること

3年前に活動ボランティアを募集したところ、ボランティア団体が立ち上がり、現在は20名が活動している。ボランティア募集は年に一度、新入生の保護者に対して入学式で説明・募集するとともに、随時ボランティア同士で顔見知りにならざるを得ない状況で募集している。ボランティアは「やらされている」と感じてしまうと拒否反応を起こしてしまう。活動の趣旨(本当に子どもたちのためになることだけをやる)を理解してもらい、自主的にやりがいを持って取り組んでもらうことが長く続くポイントだと思う。決して無理強いせず、年に一度でもいいから活動に来てもらい、楽しさを感じてもらえるよう心がけている。やりがいや楽しさをわかってもらうことで活動が口コミで広がり、ボランティアも少しずつ増えてきている。

■ 活動しやすくなるために工夫していること

- ・ボランティアとして親が学校に来ることに抵抗を感じる子どももいる。なるべく自分の子どもがいるところにはボランティアに入らないように配慮している。
- ・自分自身がコーディネーターの活動を負担に感じないように、コーディネーター同士でやることを分担するようにしている。また、先生、保護者、地域の方々にまず活動を知ってもらい、理解者を増やすことが大切だと考えている。

4 コーディネーターとしてのやりがい

今活動している内容は、すべて「子どもたちのためになること」である。やらなくてよいこと、余計なことはやらずに、本当に必要なことだけをやっているという思いがある。この思いがあることで、傍から見れば大変に感じることも大変だとは思わず、楽しく活動できている。

5 活動上の課題

現在、特に課題と感じていることはない。今後も、学校とよく連携を図りながら、生徒が安心して学べる環境づくりを目指していきたい。

6 その他

- ・コーディネーターの活動を充実させるために、コーディネーター同士が互いの活動を知り、意見を交換できる情報交換の場は大切である。宇都宮市では、市がコーディネーターを対象とした研修を実施してくれているのでありがたい。
- ・他の学校のコーディネーターから話を聞くと、活動について学校から何の要望もないところもあるようである。コーディネーターの中には何をしたいのか、どうやって始めたらいいのか等がわからずに迷っている人もいて、学校から困っていること、協力してほしいことを率直に言ってもらえた方が活動はしやすくなる。先生とコーディネーターが、学校の課題や地域にできる支援等について一緒に話し合い、考えることができる場を持つことが大切だと思う。
- ・すべての先生が地域連携の意義をよく理解してくれなければ、活動はうまく進まない。地域連携教員が、他の先生とコーディネーターがつながる機会を作る等、先生の理解が深まるような活動をしてもらえるとうい。

事例 2

コーディネーター名	渡辺 新太郎	活動学校	日光市立轟小学校
コーディネーター歴	3年目	経歴	元教員（高等学校長）

1 コーディネーターを始めるきっかけ

平成 26 年度に学校評議員及び地域教育協議会の委員長に選出されたことがきっかけで、学校から依頼され、コーディネーターとなる。コーディネーターと学校評議員、地域教育協議会委員長を兼ねていることで、より学校の活動を後押しできていると感じている。

2 コーディネート活動の概要

現在は 2 名がコーディネーターとして活動し、それぞれの特性や持ち味を生かして活動している。学校支援ボランティアとの関係性も良好である。

轟小学区の地域性として、学校のために活動することが自然にできる人が多く、地域の人同士のかかわり合いも深い。平成 26 年度には登録ボランティアが 51 名だったが、28 年度には 69 名となり、平成 27 年度は延べ 300 名が学校支援ボランティアとして活動しており、活動は広がりを見せている。

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 学校の理解

- ・学校は、コーディネーターにもボランティアにも、常に丁寧に対応してくれ、このことがボランティアの意欲や活動の継続につながっている。また、学校長をはじめとして、地域の方々をととても大切にしてくれるという学校の姿勢がある。
- ・地域連携教員（教頭）や学校長が地域に出向いてくれる。また、教職員も同じ姿勢で対応してくれ、学校の対応の素晴らしさを感じている。
- ・地域連携だより、学校だより、HP(300 アクセス/日)などを通して、ボランティアや地域の方による活動を情報発信することをはじめ、感謝の会、ボランティアと子どもたちの会食などを実施し、活動を後押ししてくれている。

② 工夫していること

■ 地域の交流の場づくり

地域には多様な人々があり、文化的水準も非常に高い。平成 27 年度から、学校を会場に、地域の方の専門的な技能を発表する機会として「地域ギャラリー」を実施している。ギャラリーには多くの作品が出品され、学校が交流の場となっている。

■ 学校の応援団

地域の方やボランティアは学校の応援団でありたいと思っている。子どもたちの教育は学校が主であり、学校運営は学校長の権限である。学校支援活動を行うときは、活動内容等について学校と相談し、教育活動を後押しできるようにしたい。



地域ギャラリーの様子

■ ボランティアの確保

若い人への働きかけは、コーディネーターとして限界がある。学校支援や学校と関わりをもつことが自分を表現できる素晴らしい機会であるという良さに気付いてもらうなどの工夫をし、ボランティアの裾野を広げていくことで、活動は継続していくのだと思う。

■ その他

会議等以外での立ち話などのコミュニケーションなども大切な機会である。

4 コーディネーターとしてのやりがい

教員として働いていたこともあり、学校への恩返しの気持ちで活動している。コーディネーターとして活動していると、地域のことがよくわかり、自分の視野が広がると感じる。また、活動を通して、地域の方々みんながもっている「学校の役に立ちたい」という思いを大切にした上で、具現化できることにやりがいを感じている。以前、研修会で聞いた「地域の中の大切なものをなくさないように」という言葉の意味が今はよく分かるようになった。

コーディネーターとして活動することで、地域教育協議会を本来の目的どおりに運営し、よりよくすることもできるので、そこも魅力の一つである。

5 活動上の課題

現在、特に課題と感じていることはないが、学校の応援団として、まず自分ががんばれるようにしていきたい。

6 その他

○学校長より

- ・コーディネーター、ボランティア、地域の方に学校を支えてもらっている。
- ・管理職として、地域と連携した活動の維持と今後の向上、地域の想いを汲んだオリジナリティーのある取組等に力を入れている。また、多くのボランティアの活動を地域連携だよりやHP(学校長が更新)で随時情報発信している。
- ・地域の方々に子どもたちとかかわってもらうことは、コミュニケーション力の向上を含め、子どもたちの成長にとっても大切である。
- ・地域と連携した活動を通して、地域の想いと学校の願いを地域と学校が一緒になって考えることができている。
- ・学校を核としたコミュニティの大切さを感じている。形だけではなく、心のつながりが大きい。活動の積み重ねが互いの信頼関係になっていく。
- ・コーディネーターの存在がとても大きい。教職の経験があり、学校への理解が深い方をお願いすることができ、学校の応援団としてふさわしい方である。

事例 3

コーディネーター名	大岡 忠男	活動学校	益子町立七井小学校 益子町立七井中学校
コーディネーター歴	14年	経歴	元役場職員（益子町）

1 コーディネーターを始めるきっかけ

定年退職後、何か人の役に立ちたいと考えていたところ、役場職員であったことの強みで町内に知り合いが多いことなどから声をかけられたことがきっかけである。さらに芳賀教育事務所主催の学校支援ボランティアコーディネーター養成研修を受講し、以後、益子町立七井小学校を中心に活動している。

2 コーディネート活動の概要

現在、七井小学校では6人のコーディネーターが活動しているが、自分はそのまとめ役として必要に応じてメンバーを招集し、ボランティアの確保状況の確認や活動の情報交換等を行っている。

活動内容は主に学校支援ボランティアの確保である。ミシン学習、昔遊び体験、農業体験等の学習支援ボランティアや校内の枯れ木の伐採、夏休み中の校庭の除草等の環境整備ボランティア等での実績を積んでいる。

また、七井小学校には平成12年から、学校の教育活動を支援したい地域住民が登録している「七井っ子ネット」という組織がある。ボランティアの確保等でスムーズに機能が発揮できるよう、現在組織の整備に取り組んでいる。平成29年2月に新たな組織が発足する予定である。



図書ボランティア研修会の様子

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 教職員の理解

学校長をはじめ、教職員が地域連携活動に積極的である。学校だよりには学校支援ボランティア活動の紹介が掲載されている。これは学区内の全戸に回覧され、地域住民が活動について理解を深めることにもつながっている。

■ 地域連携教員との連携

地域連携教員(教務主任)が窓口であることがはっきりしているので連携しやすい。地域連携教員が、活動略案や内容を知らせる文書を作ってくれている。それに応じてボランティアの確保や活動の確認ができるので、助かっている。

② 工夫していること

■ 学校の負担を軽減する

- ・学校に頻繁に足を運ぶようにしているが、できるだけ負担がかからないよう、打合せ時間は5～10分くらいにしている。

・ボランティアが学校とやりとりする場合、学校に負担がかからないように、事前に電話を入れて都合を聞いてからやりとりするようにアドバイスしている。

■ ボランティアの確保

・ボランティアを依頼しても、当日に用事があつて活動できないというケースもあるので、必要数の倍くらいの候補があつてよいと考えている。七井っ子ネットの整備がここにつながるとよいと考えている。

・地域の知り合いには、日頃から、学校でこうしているのだからやってみないかと声をかけて、関心をもってもらえるようにしている。

■ コーディネーターの確保

コーディネーターの候補者を見つけて声をかけている。人柄(信頼できる人)、学校との関わり(できればPTA役員経験者、子どもや孫がいる等)、地域に知人が多い等をポイントにしている。

■ その他

ボランティアにはボランティア保険への加入を勧め、安全を心がけて活動できるようにしている。

4 コーディネーターとしてのやりがい

・何よりも、ボランティアが入ったときに子どもたちが見せる普段とは違った表情を見るのがうれしくて、やりがいになっている。また、ボランティアからも学校の先生が教えられないものを教えているという満足感が得られている様子が見られてうれしい。

・町民から、学校だよりや広報を見たとき声をかけられることがあり、活動に関心をもってくれている様子で、励みになっている。

5 活動上の課題

■ 学校の負担を軽減していくこと

学校は忙しい。地域連携活動に関する文書の作成などで、コーディネーター側でもできるものがあるのではないかと検討している。

■ 中学校での活動

中学校にも積極的に入っていきたいが、今のところあまり関わっていない。コーディネーターの養成も含めて今後検討を要するところである。

6 その他

町の広報誌の生涯学習コーナー「まなびの広場」や町生涯学習課発行の「学校支援ボランティアだより」に七井小学校の活動が掲載されており、全戸に回覧されている。町を挙げて活動をPRしてくれていることがありがたい。学校の考え次第で、地域連携活動の取組は変わってしまうと思う。活動の活性化のためには、教育委員会や教育事務所のバックアップも必要と考えている。

事例 4

コーディネーター名	関口 浩子	活動学校	栃木市立皆川城東小学校 栃木市立皆川中学校
コーディネーター歴	5年目	経 歴	元保護者 (元皆川城東小学校 PTA 本部役員)

1 コーディネーターを始めるきっかけ

栃木市が平成 24 年度から、学校・家庭・地域の連携・協力を組織的に発展させ、より効果的に学校支援や地域の絆づくり等を図る教育システムとして「とちぎ未来アシストネット」を導入したのを機に、コーディネーターとして活動することになった。

2 コーディネート活動の概要

皆川地区には 3 名のコーディネーターが活動しているが、自分は、皆川城東小学校と併せて 2 校に携わっている。また、皆川地区で約 60 名のボランティアの方々が、アシストネットに登録し活動している。皆川地区アシストネットの具体的な活動内容は次のとおりである。

- PTA 総会におけるアシストネット説明会・・・アシストネットを知らない保護者が多いため、毎年実施。
- 読み聞かせ・・・3 年目の活動で、年 3 回実施している。
- ディスプレイ・・・玄関への生け花の展示、校内掲示板の装飾、未使用だったショーケースを活用した地域の方々の作品展示
- 特別支援学級振興会補助・・・作品作りの手伝い
- ふるさと学習・・・地域の歴史講話(皆川歴史部の方々に依頼)
- 学校祭班別発表の指導・・・「日本文化を」という学校からの要望に応え、今年度から実施。(太鼓、箏・よさこい)
- キャリア教育講座講師紹介・・・様々な職業の方による講話

その他、持久走大会伴奏者協力、授業アシスト(剣道)、部活動指導、賞状の浄書、制服バンクの設置等を行っている。



校内掲示板の装飾と地域の方々の作品展示の様子

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

- 年間スケジュールの作成
毎年実施するような活動については、学校側で年度初めに年間スケジュールを作成してくれる。
- 情報発信
アシストネットの関わった活動について、学校だよりやホームページを通じて紹介してくれる。

② 工夫していること

- 先生とのコミュニケーション
 - ・学校側からの連絡はまず FAX で行い、その後必要に応じて電話やメールで連絡し合う。
 - ・用事がなくてもこまめに学校へ足を運び、顔を出すようにしている。
 - ・打合せは職員室内中央で行う。たくさんの先生がいるところで行うことで、打ち合わせている先生以外の

先生も話に加わったり、気軽に相談したりしやすい雰囲気ができている。

■ ボランティアの声を把握する

- ・実際の各活動にコーディネーターも顔を出し、ボランティアと一緒に参加・協力するようにしている。
- ・活動をよりよくするために、ボランティアには実施後に活動日誌を書いてもらっている。よかった点や改善点などを含め、どんなことでも記載してもらおうようにしている。日誌はファイリングし、次年度以降に生かしている。
- ・ボランティアから学校・先生へ、また学校・先生からボランティアに直接言いにくいことは、コーディネーターを通して話してくださいと声をかけている。

■ ボランティアの確保

一番苦労したのは、ボランティアを探すこと。初めは地域で説明会を行って募集をかけた。その後はボランティアが自分の知り合いを紹介してくれて、どんどん広がっていった。

■ 保護者への周知

アシストネットの保護者への周知については、年度初めに説明会を実施している。また、PTA本部役員を兼務しているコーディネーターを頼りにしている。

■ 後継者への引継ぎ

後継者への引継ぎを見越して、3名のコーディネーターの年齢を50代、40代、30代で構成している。

■ 負担にならないように大切にしていること

- ・若いコーディネーター(子どもが小さい方)は特に大変だと思うので、子育てを終えた年代がコーディネーターの総括役を務め、若い方をサポートできるようにしている。
- ・コーディネーターの負担軽減のため、3名で仕事を分担して行っている。また、読み聞かせのような常時の活動については、その活動のリーダーに任せるようにしている。
- ・ボランティアの活動が負担にならないよう、無理なときは気兼ねなく無理といえる雰囲気、関係づくりに努めている。長続きさせるためにも大切なことであると考えている。

■ その他

アシスト地域協議会を年2回開催している。(学校、地域、コーディネーター、公民館が参加)

4 コーディネーターとしてのやりがい

子どもたちがかわいい。そして、自分自身がとても楽しい。コーディネーターをしていることで、人間関係がとても広がり、地域のことをたくさん知ることができた。

5 活動上の課題

■ 中学校での活動

中学生や先生が忙しいのは十分わかっているが、もっと中学生に年数回の地域の行事に参加してほしいと思う。若い人が参加することで地域が盛り上がるし、ボランティアとの関係も広がり、深まりができるかもしれない。

■ 若い世代の参加

ボランティアに若手が参加しやすいような仕組み作りが必要だと考えている。現在、國學院短期大学生が何人か参加している。若い人がいると、活動に活気が出る。

6 その他

- ・中学生は小学生に比べて何でも自分たちでできてしまうので、初めは中学校へボランティアに入りこくかった。しかし、活動を重ねるにつれ、学校側からの要望やコーディネーター側からの提案で、活動がどんどん広がっている。
- ・私生活(仕事)との両立は、なかなか大変である。家族の理解と協力が必要不可欠である。
- ・コーディネーターはこまめに学校に顔を出しているのが大丈夫だが、ボランティアは自分が担当するクラスの先生の顔と名前が分からない。年度初めに、アシストネットのメンバーが先生の顔と名前を覚えられるように、何か工夫をしたい。

事例 5

コーディネーター名	黒澤 道子	活動学校	さくら市立上松山小学校
コーディネーター歴	12年目	経 歴	元保護者（PTA 副会長） 家庭教育オピニオンリーダー

1 コーディネーターを始めるきっかけ

さくら市は平成 17 年度から各小中学校に「地域と学校を結ぶコーディネーター」を配置した。それに伴い、上松山小学校でもコーディネーターを配置することになり、以前、PTA 副会長をやっていたことと、当時、家庭教育オピニオンリーダーとして活躍していたことから、さくら市より委嘱され、地域コーディネーターとして活動することとなった。

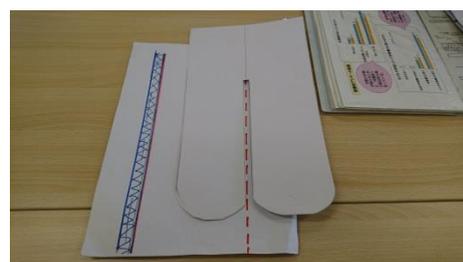
地域コーディネーターとして配置された直後に、学校から「特別支援学級でのうどん作りの支援」の依頼があり活動した。その後、2 年間は全く依頼がない状態が続いたが、「クラブ活動での昔遊びの支援」の依頼が来たのをきっかけに、児童との関わりも増え、そこから活動が活発になっていった。

2 コーディネート活動の概要

学校から依頼された活動にはほとんど対応している。具体的な活動は、家庭科のミシン活動補助や生活科のさつまいも作り補助等の授業支援、社会科等の校外学習における引率補助、総合的な学習の時間の米作り指導及び支援、そして授業参観や先生の授業研究会等で下校が早くなった際の「お預かり」（学童に行っていない児童）等である。お預かりには毎回 40 名程度の児童が参加しており、ボランティア側は常時 3～6 名の体制で対応している。

地域コーディネーターは 2 名であるが、1 名は仕事をしているため、実質的な活動は 1 人で行っている。ボランティア依頼に関しては、特に「人材バンク」のようなものを持っていないため、同じ家庭教育オピニオンリーダーのメンバーであったり、知人や以前から学校支援に関わっていたりする人たちに依頼している。コーディネートしたほとんどの活動に参加し、一緒に手伝ったり、様子を把握したりするようにしている。

今年度より、学校が、保護者からボランティアをやってくださる方を募集するようになり、「学校支援ボランティア」と「保護者ボランティア」の両方が協力して行っている活動もある。



「さつまいも作り」の補助教材
（コーディネーター作成）

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 教職員の理解

学校側の窓口は、地域連携教員（教務主任）のみであるため、連絡が取りやすい。学校から依頼された活動は、地域連携教員との連絡調整の後、活動の担当教員と話し合いをもち、内容を詰めていく。現在はほぼ全ての活動で打合せがもたれている。打合せの内容は活動当日に、コーディネーターからボランティアにしっかりと伝えている。地域連携教員を含め、担当の教員にも恵まれ、活動しやすい環境を整えてもらっている。

■ 情報発信

学校は、コーディネーターやボランティアの顔写真を学校の掲示板に掲示したり、「学校だより」で連携活動を紹介したりすることで、児童や保護者への周知もしっかりと行ってくれている。

② 工夫していること

■ ボランティアの確保

- ・ボランティアの得意分野を把握し、活動に合ったボランティアをコーディネートしている。無理強いはしない。そうすることで、ボランティアの負担軽減になるとともに、活動に参加したボランティアが十分に活躍することができ、「楽しかった」と言ってもらえる。そして、また次につながっていく。やはり、「子どもとのかかわりの楽しさ」がボランティア活動には大切であり、それをわかってもらえると継続した活動につながっていく。
- ・さくら市の他校のコーディネーターと交流を図り、横のつながりを大切にしている。コーディネーター同士で連携してボランティアを紹介し合っている。自分自身も他校の読み聞かせのお手伝いをするなどしている。

■ ボランティア活動の際に

- ・活動にはできるだけ参加し、一緒に活動している。自作の説明用教材なども作成し、児童に説明する際に用いている。
- ・子どもに対する配慮は忘れないようにしている。例として、さつまの苗植えの時、指導はしていても、植え方が不十分な苗もできてしまう。その時に、子どもが見ている前で直すのではなく、子どもが教室に戻ってから、そっと手直すなどしている。そうすることで、子どもが満足したまま活動が終えられる。
- ・新しいボランティア(特に「保護者ボランティア」)には、活動が始まる前に、活動の仕方や心得等を丁寧に説明している。そうすることで、活動中のトラブルなどがなくなった。
- ・保護者ボランティアに関しては、活動中に自分の子への集中指導になってしまったり、他のボランティアとの私語に終始してしまったりしたこともあったので、その反省から自分の子どもの活動やグループには入れないということと、守秘の徹底を図ってもらうようにしている。
- ・難しい活動は、特定のボランティアに依頼している。例えば、特別支援学級での支援では、児童への対応に慣れた方に依頼することで、トラブルや児童が傷つかないようにするなどの配慮をしている。

■ 反省会の実施

特にコーディネータールームはないため、会議室で活動後に反省会を行っている。課題を吸い上げ、改善点等は、必ず地域連携教員等に伝えている。

■ 後継者への引継ぎ

次にコーディネーターをお願いする方として、何よりも人柄が一番大切だと考えている。また、若い方がいいと思うが、若い方は仕事をしていて難しい。自分の中で後継者の候補者がいるので、学校や周囲の人たちとも相談しながら、複数配置の方向で検討している。やはり複数いれば役割が集中せず、負担も少なくて済む。

4 コーディネーターとしてのやりがい

大変だと思うこともあるが、子どもたちと関わることで楽しくなる。「子どもたちとの触れ合い」が一番のやりがいである。またコーディネートしたボランティアが喜んでくれた時はうれしくなる。すべては「子どもたちのため」という想いで活動している。

5 活動上の課題

ボランティアの高齢化が一番の課題である。若い年齢の人を少しずつ増やしていきたい。

6 その他

- ・先生やボランティアの方々に本当に恵まれて活動できている。
- ・もう少し子どもたちと触れ合っていきたい。また子どもたちの楽しい様子を見守ってあげたい。

事例 6

コーディネーター名	金田 裕美子	活動学校	那須町立田代友愛小学校
コーディネーター歴	3年	経 歴	元保護者（PTA 副会長）、統廃合委員

1 コーディネーターを始めるきっかけ

那須町では、学校適正配置に伴い統廃合が進んでおり、統廃合しても「地域の子どもは地域で育てよう」という地域の思いを継続し高めるために、那須町版コミュニティスクールを導入している。統廃合した学校から順次このシステムが導入され、学校と地域ボランティアとを円滑に結ぶため、学校内に非常勤のボランティアコーディネーターが配置されている。このコーディネーターは、統合する学区それぞれから1名選出されることとなっており、旧田代小学校でPTA副会長や統廃合委員等をやっていたという経緯から、学校長より指名され、統合当初よりコーディネーターとして活動することとなった。旧室野井小学区より選出されたコーディネーターも1人いて、現在、計2名で活動している。

2 コーディネート活動の概要

主な活動としては、学習支援や環境支援のコーディネート、情報の収集と提供である。学校との打合せは、週2回訪問し、地域連携教員（教務主任）と行っている。特に時間等は決めていない。先進的な活動として、教育課程で実施しているもの以外に、学校を会場にして、コーディネーターが企画し実施している「サマースクール」「プログラミングディ in 那須町」がある。

○サマースクール

夏休みに、英語、パソコン、工作等の8講座を2日間にわたり実施。隣接学区のコーディネーターから講師情報の提供を受けたり、先生や中学校区のボランティアの協力を得たりしながら、子どもたちの興味を引くような講座を開設することができ、今年度は延べ215名もの参加があった。（全校生167名）

○「プログラミングディ in 那須町」

休日に学校を会場に、プログラム体験イベントを今年度初めて開催。このイベントは、米IT大手のマイクロソフトとNPO法人「キャンパス」（東京）が推進するプログラミング学習普及プロジェクトの一環で、コーディネーターが那須町教育委員会とこのプロジェクトをつなげ、実施に至った。大人の部、子どもの部の2部構成で行われ、各30名の参加があった。



「プログラミングディ in 那須町」の様子

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 情報発信

学校長が学校だよりのなかに「地域連携コーナー」を設け、コーディネーターの紹介や地域連携活動の紹介を行っている。

■ 地域連携教員（教務主任）との連携

地域連携教員は、学校側の要望を遠慮せず本音で全て伝えてくれる。例えば、コーディネーター側で提案したことに対して、学校の状況に応じて無理なことは無理、駄目なことは駄目とはっきり伝えてくれる。

■ コーディネーターの活動場所

コーディネーターの居場所、活動場所が職員室にある。先生たちのボランティアのニーズを把握するとき、まず先生が要望を紙に書き、地域連携教員がそれをまとめてコーディネーターに依頼するといった流れをとっている学校が多いと思う。本校では、コーディネーターが職員室にいて、休み時間の先生とのたわいもない話から信頼関係を作ることができ、要望を直接把握しやすくなっている。また、地域連携教員である教務主任から「紙に書いて提出してください」などと依頼されると、トップダウン的な感じになり、先生たちはやらされている感が強くなってしまおうと感じる。

② エ夫していること、心掛けていること

■ 活動を始めるまで

コーディネーターとして配置された当初は、学校から「負担が大きい、保護者が職員室に入ることも負担だ」といった声があった。そこで、まず、先生との信頼関係作りにも努めた。職員室で聞こえた話は外へは漏らさないことを徹底するとともに、なかなか学校まで届かないような地域の情報を先生に提供した。2年目になると、先生との信頼関係が少しずつできてきたので、先生に「学校支援ボランティアとしてこんな人がいる」「学校支援活動としてあんなことができる」等と積極的に情報提供し、前向きに行動した。地道な活動を続け、3年目にやっと先生からリクエストをもらえるようになった。今では、先生たちが地域連携以外のことで相談してくることもある。

■ 先生やボランティアとのコミュニケーション

- ・学校長の采配次第で、地域連携は大きく変わる。学校長は地域連携を推進していく上で要である。したがって、学校長との十分な話し合いの時間を確保し、よくコミュニケーションをとることを心掛け、学校経営方針や学校長の考えを理解し、その意に沿うような地域との連携を行うことができるよう努めている。
- ・ボランティアの性格、やりたいこと、評価されたい気持ち等を踏まえながら学校側の要望とマッチングさせることはとても難しい。だから、どちらともよく話し合う、コミュニケーションをとるように心掛けている。また、悪いことも含めて受け入れ、相手側に上手く伝えるようにしている。

■ コーディネーター同士の連携

コーディネーターが2人いるので、役割分担を明確にしている。自分は学区内の人脈が薄いので主に企業や学区外のコーディネートを、もう一人は学区内の人脈が厚いので主に学区内のコーディネートをするように役割分担をしている。また、普段のコミュニケーションを大切にしている。

■ 名前を覚えてもらうためにしていること

名前を覚えてもらえるよう、名刺を作成し、持ち歩いている。(以前、名刺交換時に名刺がなくて困った)

③ 町の支援

地域コーディネーター交流会を年3回、那須町教育委員会生涯学習課が事務局となり、開催してくれている。これによって横のつながりができ、互いに悩みやボランティアの人材情報を共有したり、相談したりすることができる。サマースクール開催の時にも、このつながりが役立った。また、コーディネーターの活動がまだよくわかっていないような新しいコーディネーターが、活動について相談しやすい環境が整ったと感じる。

4 コーディネーターとしてのやりがい

コーディネートした授業や活動の時に、子どもたちが目をキラキラ輝かせ、先生たちが笑顔になったとき、「つながったな」という思いを感じることができ、達成感がある。その瞬間がたまらなく、やりがいを感じる。

5 活動上の課題

■ 後継者について

後継者は、PTA・育成会の役員OB、またはボランティアに何度も協力している人がよいと考える。いつまでも自分がコーディネーターをやるわけにはいかないの、次に引き継ぎたい候補を考え、今から声を掛けている。できれば何年か一緒に活動し、軌道に乗ったら自分が退きたいが、町が配置するコーディネーターの定数が決まっているため、そのような流れがとれないのが課題である。

■ 活動の継続について

つながったものを継続させていくには、よいものを残していくには、どうしたらよいか、悩んでいる。

■ 先生一人一人の地域連携に関する理解、意識の向上

地域連携に関わっていない先生の地域連携に対する理解や意識は、まだまだ低いように感じる。また、個人差も大きい。地域連携についてヒントを探れるような動画配信などがあればいいのではないかと。(パンフレットや冊子を作っても、先生たちは読む時間がないので。)

6 その他

- ・様々な世代のコーディネーターがいるが、年代が上の方ほど「教えることはできないし、教育についてわからない」と言っている。人脈等、自分たちの世代とは違う強みがあるので、それを生かしてほしいと感じる。
- ・地域と学校がつながることで、何かわくわくするようなことができたらと思っている。そんなわくわくを積み重ねることによって、地域や学校を元気にしたい。そして、子どもたちのやる気につながればとも思っている。そのやる気がやがては学力の向上にもつながるのではないかと思っている。

事例 7

コーディネーター名	小林 みゆき 丸山 和美	活動学校	佐野市立城北小学校
コーディネーター歴	小林：3年目 丸山：2年目	経 歴	小林：元保護者（PTA 役員） 丸山：保護者

1 コーディネーターを始めるきっかけ

平成 20 年度に佐野北中学区において学校支援地域本部事業が実施されたのをきっかけとし、城北小学校に初めてコーディネーターが配置された。2 年後、学校長から依頼を受け、読み聞かせ等の学校支援ボランティアをしていた方がコーディネーターを引き継ぐこととなった。読み聞かせを中心に学校支援ボランティア活動をしていた自分たちにも、先輩コーディネーターから依頼があり、コーディネーターとして活動することとなった。現在は、3 名で活動している。

2 コーディネート活動の概要

コーディネーターとしての活動内容は、学校支援ボランティア活動の運営・支援、読み聞かせボランティアの募集、ボランティアと先生の連絡調整、ボランティアの人材発掘等である。また、ボランティアの活動を広報するために新聞や案内チラシを作成している。仕事内容は、各自の得意分野を生かすように 3 名で分担し、協力し合いながら進めている。

ボランティアの活動内容は、全クラスに 1 名の配置が可能な読み聞かせボランティアを中心に行いながら、校外学習の引率や家庭科のミシン操作の補助といった授業のサポート、夏休み中に行われる学習会の支援、休み時間に図書室利用の手伝いなどがある。



夏休み学習会の支援の様子

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 教職員、保護者への周知

年度初めにコーディネーターの紹介を学校長が職員に対して行ったり、校内にコーディネーターの写真を掲示したりして、職員や保護者に広く知ってもらう取組がされている。

■ 定期的な打合せ

コーディネーター担当教員との打合せができる機会が月に 1 回確保されている。

■ 活動場所の確保

情報交換等ができる場としてボランティアルームという居場所が確保されている。

②工夫していること

■ 活動が充実するために

・自分自身の仕事に支障をきたすことがないよう、3 名で連携を取りながら活動している。

- ・3名それぞれの得意分野(連絡調整、文書作成、情報収集など)を生かして仕事の内容を分担している。
- ・ボランティアルームにおいて、アンケートの記入や感想等を聞く場を設けて、課題改善につなげている。

■ ボランティアを確保するために

- ・一度ボランティアに関わった方が、その後も他のボランティア活動に参加するという傾向があるため、初めてボランティアをする方に積極的に声かけなどを行っている。
- ・読み聞かせボランティアでは、募集案内を配布してもなかなか集まらない現状がある。そこで、既に登録している人がボランティアに興味がありそうな人にどんどん声をかけ、ボランティアの人数を増やしている。

■ 後継者への引継ぎ

- ・自分たちはコーディネーターを始めたばかりなので、後継者のことを考えたことはない。ただ、ボランティア活動をしている様子などから、コーディネーターとしてふさわしい方もいるので、少しずつ声かけ等していきたい。

4 コーディネーターとしてのやりがい

子どもや先生、保護者、地域の方などに関わる機会が増え、たくさんの人と強くつながっていると感じ、やってよかったと思える。また、子どもと接するといつも元気をもらうことができ、とてもうれしい。自分の子どもが学校に在籍なくなると学校との関わりがなくなってしまうことが多いが、コーディネーターになったことで学校との関わりをもつことができ、さらに地域の一員として力を注ぐことができていることに喜びを感じる。

5 活動上の課題

子どもが学校に在籍していないと学校支援に関われない状況にある。子どもの有無や年代に関係なく、地域の人がもっと学校に関われるような取組をしていく必要がある。

6 その他

- ・小学生の時に読み聞かせボランティアをしてもらい、とても楽しかったので自分もボランティアをやろうと思った中学生や、夏休み学習会にボランティアをして、教える側と教わる側の気持ちを知ることができ、大変勉強になったと感想を述べた高校生に出会うことができた。ボランティア活動が子どもを成長させる一つのきっかけになっていると実感した出来事だった。
- ・コーディネーターと担当教員がうまくつながっていることが、学校支援活動をやりやすいと感じる重要な部分だと思う。

(2) 県立学校におけるコーディネーターとの連携事例について

平成 27 年度調査研究「地域連携教員の実態に関する調査研究」において、「コーディネーターがいる」との回答があった県立学校 13 校の中から、学校種等を踏まえ、以下の 7 校に協力いただき、各学校の地域連携教員を対象にヒアリング調査を行った。

	学校名	地域連携教員	地域連携教員歴
1	宇都宮商業高等学校(定時制)	大宮 裕治 教諭	3 年
2	上三川高等学校	島田 桂 教諭	1 年
3	石橋高等学校	山崎 浩之 教諭	1 年
4	壬生高等学校	合田 理映 教諭	2 年
5	佐野高等学校	宇賀神 茜 教諭	1 年
6	真岡工業高等学校	高野 史晃 実習教員	3 年
7	富屋特別支援学校	見持 英児 教諭	3 年

ヒアリング調査では、以下の項目について聞き取りを行い、事例としてまとめた。

1 コーディネーターについて
コーディネーターの経歴、連携を始めたきっかけについてまとめた。
2 コーディネーターとの連携の実際
地域連携に関する活動の中から、主にコーディネーターと連携することで、内容が充実している活動についてまとめた。
3 成果と課題
コーディネーターがいることによる成果、コーディネーターとの連携上の課題についてまとめた。
4 その他
地域連携教員として力を入れてきたこと、地域連携の意義や活動の在り方に対する考え、生徒に見られる成果等についてまとめた。

宇都宮商業高等学校（定時制）

地域連携教員	大宮 裕治 教諭	地域連携教員歴	3年
--------	----------	---------	----

1 コーディネーターについて

宇都宮東地区自治会連合会の会長が、コーディネーターの役割を担ってくれている。きっかけは、3年前、これまで近くの小学校の運動場で行っていた連合会主催の地区運動会が小学校できなくなってしまい、宇都宮商業高等学校の運動場を借用に来たことであった。このことを機会に顔見知りとなり、互いに連携をとるようになった。そのため、近隣の自治会の回覧板に学校からのお知らせ等を入れてもらえるようになり、地域への情報発信が簡単にできるようになっている。

2 コーディネーターとの連携の実際

○田川(きぶな)清掃活動

9年前から、定時制課程の生徒と教員で、学校の近くを流れる田川の清掃活動を行っている。3年前に連合会長とのつながりができたことで、自治会を通して地域の方々の参加を呼びかけるようになり、現在は地域のボランティアと生徒・教員と一緒に清掃活動を実施している。

○学校祭での連携

全日制課程と合同で行われる学校祭において、食品の販売を行う際、地域の方々が手伝いに入ってくれている。

○地域連携教養講座の開催

小・中学校で行われている地域連携活動の実際を知り、高等学校でもやれることはないかと考えた地域連携教員の発案から、平成27年度より実施している講座である。地域の方々を対象に、教員の専門性や特技を生かした教養講座を年3回実施している。平成27年度は、商業雑学や日光の自然・植生に関する講座等を実施し、自治会を通して地域の方々の参加を呼びかけたところ、地域に住んでいるOB等の参加があった。また、講師以外の教員も地域の方々と一緒に受講しており、教員の地域連携への理解を深める機会ともなっている。



田川（きぶな）清掃活動の様子

3 成果と課題

○成果

・地域側の窓口が明確になり、地域に声をかけたいとき、どこに話せばよいか明らかになった。コーディネーターの役割を果たす地域の窓口があることで、地域との連携がスムーズにできるようになり、活動が充実し、生徒と地域住民が交流する機会が少しずつ増えるようになった。定時制での教育は、よく知られていないために先入観を持たれることもある。地域住民と生徒と一緒に活動し、直接交流することは、定時制の教育や生徒について地域の理解を深め、先入観をなくすためにも重要であると考えられる。

・これまで、学校の情報はホームページから発信してきたが、地域の高齢者やインターネット環境が整っていない家庭の方にはなかなか情報が届かなかった。自治会との連携が図れるようになったことで回覧板からの情報発信ができるようになり、これまで情報を届けられなかった方々に情報を届けられるようになった。学校の良い情報を多く発信することで、地域の学校理解につながっている。

○課題

地域とともにある学校として地域連携への取組は大切な部分である。しかし、小・中学校と異なり、地域の方にとっての「自分たちの学校」とならない高等学校は、地域と心の距離があると感じる。そのため、教員は自分の学校の地域がはつきりせず、地域連携のイメージが浮かびづらいと考える。今後、教員の理解をさらに深め、窓口となる教頭や地域連携教員以外の教員とコーディネーターを初めとする地域の方々とのつながりを作り、さらに連携を図っていけるかが課題である。

4 その他

○社会に出る準備としての地域連携

人にはそれぞれの考え方や多様な生き方があるということを知ることは、生徒一人一人が自分に合った進路を選択する上で大切なことであると考えます。また、社会に出てから必要とされる人間関係形成能力を身に付けるためには、様々な人々と交流し、一緒に活動することが必要である。生徒が社会で活躍するための準備段階として、地域連携を推進していけたらよいのではないかと思います。

事例 2

上三川高等学校

地域連携教員	島田 桂 教諭	地域連携教員歴	1年
--------	---------	---------	----

1 コーディネーターについて

上三川高等学校では、社会福祉部を中心に、以前から上三川町でのボランティア活動に積極的に参加・協力していた。そこでの生徒の活動の評判がよく、様々な活動への協力依頼が部に来るようになった。依頼が多くなるにつれ、部の活動だけでは対応が難しくなってきたこともあり、対象を全生徒に広げ、ボランティア活動への参加を奨励するようになった。町は、上三川高校の活動を全面的に支援してくれており、特に社会福祉協議会では「学校担当」の職員を設置し、現在、その方がコーディネーターとして活動してくれている。

2 コーディネーターとの連携の実際

○社会福祉協議会プログラム「サマースクール」への参加

社会福祉協議会では、青少年の福祉への関心を高めるため、中高生を対象に「サマースクール」を実施している。コーディネーターを通じて、上三川高校へも参加者の募集があり、今年度は 30 名以上の生徒が参加した。今年度の「サマースクール」は 4 日間の日程で、開講式・事前研修、体験学習(2 日)、閉講式が行われた。事前研修では、「生きる中で大切なこと」についてDVD鑑賞やグループワークを通して考え、体験学習への準備とした。体験学習では、グループごとに福祉施設、幼稚園、病院等を訪問し、子どもたち、障がい者、高齢者等とふれあいながら、命やコミュニケーションの大切さについて学んだ。「サマースクール」を通して、生徒は普段の生活ではなかなか体験できないことに挑戦できており、一度参加した生徒の中には次年度も続けて参加する者も多い。

○ふくしアクションプログラム

社会福祉協議会が実施している「ふくしアクションプログラム」と連携し、学校では福祉教育の充実を図っている。このプログラムは、社会福祉協議会と学校が連携し、生徒の福祉への理解を深め、積極的にボランティア活動へ参加するための基盤整備を図ることを目的として実施している。具体的には、全生徒を対象とした「福祉講演会」を実施した後、希望者を募り、「特別授業」として災害で被災した場所へボランティア活動に行くというものである。講演会の講師選定、特別授業のバスの手配や現地との連絡調整等は社会福祉協議会が行ってくれ、生徒は昼食代だけで特別授業に参加できる。毎年、特別授業への参加希望者が多く、参加者の選考を行うほどである。



ふくしアクションプログラム
「特別授業」の様子

○コーディネーターとの連携を深める工夫

活動を行う際は、コーディネーターとの事前打合せや電話での進捗状況確認等の細かい連絡をとるよう心がけている。また、コーディネーターを通して町が学校に協力してくれる恩返しとして、生徒に町の他のイベント(ふくしまつり、交通安全週間のボランティア等)への参加・協力を促している。こうした活動の機会を増やすことで、これまで活動に参加しなかった生徒の参加の機会も生まれている。

3 成果と課題

○成果

福祉講演会では、コーディネーターの幅広い人脈のおかげで様々な講師が講演に来てくれるようになり、講演会が充実している。教員は、講師の選定から講演会を企画しなくてよいので、とても助かっている。サマースクールや特別授業では、コーディネーターを中心とした社会福祉協議会の職員が企画・運営を行ってくれるため、教員は当日の生徒指導だけに集中することができる。長年の継続した活動でコーディネーターと学校の間信頼関係ができており、役割分担もスムーズである。また、異動等の理由で学校の担当が替わっても、コーディネーターが活動の流れをよく理解しているため、教員はコーディネーターに教えてもらいながら活動を進めることができている。

○課題

コーディネーターとの連携上の課題は特に感じていない。コーディネーターは学校に頻繁に足を運んでくれており、顔の見える関係づくりができている。

最近では、上三川町以外の市町から、ボランティア活動協力の依頼が来ることもある。多くの依頼があることはありがたいが、なかなか他の市町の活動まで引き受けられていないのが現状である。さらに活動を広げるためには、地域連携担当を複数名にする等の学校側の体制整備と、町の社会福祉協議会のような地域側の主体的なかかわりが必要であると思う。

4 その他

生徒がボランティア活動に参加する最初のきっかけは、担任に勧められた、進路実現に向けて自分のアピールポイントを作りたい等の理由も多い。しかし、実際に活動に参加すると、活動を通して人の役に立てる喜びを感じてか、次の活動にも継続して参加する生徒が多い。ボランティア活動を中心とした地域連携活動は、上三川高等学校の教育の特色の一つであると考えられる。

石 橋 高 等 学 校			
地域連携教員	山崎 浩之 教諭	地域連携教員歴	1年

1 コーディネーターについて

石橋高等学校では、部活動、委員会、生徒会活動等を通して、生徒が地域で様々なボランティア活動を行っている。地域の窓口は活動ごとに異なっており、それぞれの窓口がコーディネーターの役割を担っている。

2 コーディネーターとの連携の実際

○音読CDのボランティア

音読CDボランティアは、高等学校が所在する下野市ではなく、他市で活動している。活動場所がある市から通学している生徒からボランティアの情報を聞き、教員がボランティアを取りまとめている図書館関係連絡協議会に連絡して朗読ボランティア団体につながり、活動できることとなった。活動では、視覚障害者への音声による市の広報紙等の情報提供を行う際の基礎を学んだり、デイジー図書と呼ばれる視覚障害者向けデジタル録音図書を体験したりすることができ、生徒にとって日常生活ではなかなか体験できないことを体験できる機会となっている。このように、石橋高等学校へは下野市外から通学している生徒も多く、ボランティアに関する広域の情報を生徒から収集することもある。

○部活動単位での連携

野球部が行っている地域連携活動の一つに、学童野球の子どもたちを対象とした野球教室がある。野球部保護者会の元会長が下野市の野球審判部に所属していることから、その方がコーディネーターとなり、市内の学童野球チームに声をかけ、参加者を募集してくれている。教員は、市内の各学童野球チームを知っている訳ではない。コーディネーターがいることにより、市内の全チームに情報が届き、たくさん子どもたちが教室に参加してくれている。

また、野球教室の開催と併せて、自治医科大学附属病院の医師が、子どもたちの野球肘の検査と保護者への野球肘防止のための講話をしてくれている。これは、野球肘の調査をしていた医師のニーズと学校の地域連携活動のニーズが合致したことから実現した活動である。

3 成果と課題

○成果

教員は、学校の所在する市や町の出身者ではないことも多く、地域の情報を集めることはなかなか難しい。地元の方がコーディネーターとして活躍してくれることで、地域の知らない情報や活動をまとめて知ることができるとともに、活動の際は円滑に連絡調整してもらえる。

○課題

活動によっては、活動状況や人数調整等について、コーディネーターが間に入ることで相手側に連絡がうまく伝わらず、行き違いが生じてしまうことがあった。また、学校、地域のどちらか一方だけが活動の準備や運営をするのではなく、学校と地域が対等な関係で活動に関われるよう、コーディネーターを通じてどのように地域に働きかけたらよいか課題である。

4 その他

○地域連携教員として力を入れていること

地域連携活動では学校での教育活動だけでは学べないことが学べ、参加した生徒は活動後に満足感や達成感を得ている。教育的効果のある活動だと感じるが、学校行事や部活動でも生徒は忙しく、連携活動を取り入れながら教育的効果を上げていくにはどのようにすればよいのかと考えた。そこで、新しい取組として、部活動を活用した近隣中学校との連携事業を始めた。地域連携活動のために新しい体制を立ち上げたり、生徒に参加を呼びかけたりすると、教員の負担感が大きくなる、関心の高い生徒しか活動に参加しなくなるという課題が出てくる。今ある既存の組織・体制を生かし、無理なく活動を始めることは、活動を充実させる上で大切なことである。また、中学校にも地域連携教員が設置されており、近くの学校同士で地域連携教員の連携を図ることも大切である。そこで、市内にある4つの中学校に働きかけ、合同練習・練習試合の実施、学校祭への参加・協力、合同発表会の開催等といった各部活動を通した連携活動ができないかと考えた。部活動には、既存の組織を活用できる、ボランティアに興味・関心のない生徒にも参加を呼びかけられる、多くの教員が地域連携活動に関わるといった利点がある。地域連携教員が中心となり、中学校と高等学校が部活動を通して連携できる体制整備を始めたところである。



部活動を通した連携活動（陸上部）

事例 4

壬生高等学校

地域連携教員	合田 理映 教諭	地域連携教員歴	2年
--------	----------	---------	----

1 コーディネーターについて

壬生高等学校は、「社会人・職業人として自立できる人間を育てる」ことを教育目標とし、特色ある教育活動に取り組んでいる。1学年では、自分の個性や適性について理解を深めるため、総合的な学習の時間に「職業と進路」を設定し、全員が職場体験学習(インターンシップ)を行っている。2・3学年では、自分自身の興味・関心や進路に合わせて選択する「コース別学習」を設定している。これらの教育活動では、生徒は地域での体験活動を通して学びを深めている。

また、壬生高等学校は町内で唯一の高等学校であることから、地域からの声かけも多く、生徒がボランティアとして地域行事に参加する等、地域との交流活動を長い間継続してきた。

このような背景から、壬生高等学校では、コース、部活動、生徒会ごとに地域と連携した教育活動やボランティア活動が多数行われており、それぞれの活動ごとに異なった地域側の窓口があり、コーディネーターの役割を担っている。

2 コーディネーターとの連携の実際

○壬生町主催の地域行事・イベントへの参加・協力

壬生町は、中学生及び青少年の地域活動を推進しており、町主催の行事・イベントで青少年のボランティアを募集する際は、町教育委員会の社会教育主事を通して学校に案内が来ている。町教育委員会から案内が来る活動は、複数の部活動が参加したり、有志を募って参加したりする活動であるため、学校側は主に地域連携教員が窓口となっている。

5月に行われた「蘭学のまち みぶ チャリティー交流会」では、吹奏楽部がステージで演奏、書道部とアニメーション部は作品の展示、美術部は展示と体験活動(ぬり絵)の実施、JRC部はステージの司会や記録写真の撮影等の運営ボランティアとして参加した。特に、JRC部は、不足しがちな運営スタッフとして参加しており、運営上欠かせない存在となっている。



「蘭学のまち みぶ
チャリティー交流会」の様子

○壬生町立藤井小学校との交流

藤井小学校とは、1999年から交流活動が始まっており、17年間継続している。主な交流活動として、生徒会役員と有志の生徒ボランティアが児童の学習支援を行う「サマースクール」、福祉コースの生徒が児童と協力して調理を行う「調理交流」、生徒会役員とJRC部の有志が小学校学区内の清掃活動を行う「クリーン活動」、運動会の前日準備・当日の運営協力、小学生の「まち探検」への協力等がある。交流活動の小学校側の窓口は、教務主任や地域連携担当の教員が行っている。

○部活動の特色を生かした連携活動

野球部は、壬生町内の学童から高校生までの野球チームで構成されている「みぶまちを野球で盛り上げる会」に参加し、野球を通じて、町の活性化や子どもたちとの交流に協力している。このように、各部活動ごとに地域の団体等と連携し、部活動の特色を生かした連携活動を継続して行っている。

3 成果と課題

○成果

壬生高等学校では、活動ごとにコーディネーターの役割を果たしている地域の窓口があり、指名された明確なコーディネーターはいない。また、学校の窓口も各活動ごとに分担されており、有志を募る活動や新しい活動等は地域連携教員が窓口となっている。個々の活動を無理にまとめずに、それぞれの活動でそれぞれの担当が対応することにより、地域側も学校側も、窓口となっている者の負担が軽くなるとともに、連携が深まり、継続した活動ができている。また、継続している活動も多いため、各担当が直接話した方が話が伝わりやすいという利点もある。

○課題

行政と連携した活動では、行政担当者の異動の周期が短く、年度ごとに担当が替わりやすい。新しい担当者が慣れるまで、特に年度当初の活動では連絡がうまくいかないこともある。

4 その他

○生徒の様子について

地域と連携した様々な活動において、生徒はみな生き生きと、伸び伸びと活動に参加している。地域のイベント等への参加は、生徒たちが普段はなかなかできない体験ができる場になっている。また、地域の大人たちと一緒に活動することは、社会とはどういうものかを知ったり、地域がどのように作られていくのかを知ったりするよい機会ともなっている。地域でのボランティア活動に一度参加したことがある生徒は、有志のボランティアを募るときも積極的に応募してくれている。このことから、生徒は、活動を通して、やりがいや達成感、人と交流する喜び、楽しさ等を感じてくれているのではないかと考える。

○地域と連携した活動への教員の理解について

壬生高等学校では、地域との交流活動が長く続いていることもあり、課外授業や部活動と生徒の地域活動が重なったときなど、教員は地域活動を優先する雰囲気ができている。地域活動で生徒が生き生きと活動し、前向きに変化する様子を身近に感じているため、理解も深まっているのではと考える。

佐野高等学校

地域連携教員	宇賀神 茜 教諭	地域連携教員歴	1年
--------	----------	---------	----

1 コーディネーターについて

佐野高等学校のコーディネーターは、学区内の中学校を活動拠点とし、近隣の小・中学校で積極的に地域コーディネーターとして活動されている方である。この方は、佐野市の中間支援センターの職員でもあり、職員である利点を生かし、高等学校でも活動してくれている。佐野高等学校の校務に地域連携担当が設置されたこと、また、教員とコーディネーターの家族が知り合いであったことがきっかけとなり、活動が始まった。

2 コーディネーターとの連携の実際

○小学校への読み聞かせボランティア

コーディネーターの活動拠点である中学校では、生徒がボランティアとなり、以前から小学校での読み聞かせを行っていた。小学校から、高校生のボランティアもぜひ紹介してほしいという話がコーディネーターにあり、佐野高等学校の生徒ボランティアを募集することとなり、昨年度から活動が始まった。昨年度は図書委員会を中心にボランティアを呼びかけたところ、高校生 10 名、附属中学生 4 名が参加することとなった。活動するにあたり、昼休みの時間を使って事前練習を 2 回行った。事前練習では、市立図書館の司書や市内の図書ボランティアが講師として来校し、本の選定や読み方の指導をしてくれた。実際の活動では、小学校の朝読書の時間に 2 人 1 組となって各教室に行き、読み聞かせを行った。小学生にとって、年齢の近いお兄さん、お姉さんはとても親しみやすい存在であり、活動は好評を得ている。また、ボランティアとして参加した中学生にとっては、年上の先輩として振る舞える良い機会となっている。



事前練習の様子

○小・中学生への学習支援ボランティア

コーディネーターが活動している小・中学校及び市民活動センターにおいて、小・中学生を対象に、夏休みの課題の支援や授業の補習等を行う学習支援活動を行っている。コーディネーターからの呼びかけで、昨年度から佐野高等学校の生徒が、教員のサポートを行う学習支援ボランティアとして参加・協力している。ボランティアとして参加している生徒の中には、将来、小学校の教員を目指し、自分の進路を踏まえて参加している生徒もいる。そのような生徒にとっては、自分の進路に結び付く貴重な機会となっている。また、小学生は高校生が丁寧に教えてくれることがうれしいようで、質問も積極的に出され、学習がはかどる良い機会となっている。

○コーディネーターとの連携上の工夫

コーディネーターとの連絡は、電話やFAXでのやりとりが多い。コーディネーターが来校してくれることもあるが、授業に出ている場合等は、教員側が時間を合わせるのが難しい。附属中学校にも地域連携教員がおり、活動は一緒に行っているため、中学校の教員と連携して、どちらかがコーディネーターに対応できるようにしている。

3 成果と課題

○成果

コーディネーターは、地域連携活動の様々な連絡調整を主体的に行ってくれるので、とても助かっている。ボランティアを募集する際は、募集のチラシを作成してくれるため、教員が日時や会場等の必要事項を細かく確認しながら作成することがなく、すぐに生徒の募集をかけられる。また、受け入れ先との連絡調整も万全で、このような点からも教員の負担がかなり少なくなっている。

小学校での読み聞かせボランティアについて、小学校からは回数を増やしてほしいとの話があった。しかし、高校生も多忙であり、回数を増やすという要望には応えかねた。このような相手先に伝えにくい返事もコーディネーターが間に入ってくれることでうまく伝えることができ、学校と受け入れ先がお互いの要望・状況等について率直に伝えやすくなっている。

○課題

コーディネーターとの連絡は電話、FAXを使うことが多い。FAXでの連絡の場合、教員が出張等で不在になる場合や、気づかないうちに連絡が入っていた場合に確認が少し遅れてしまうことがあり、生徒への連絡が活動の直前になってしまうこともある。学校や地域連携教員の予定をコーディネーターに事前に伝える等、連絡がよりスムーズに伝わるような工夫も考えていきたい。

4 その他

地域連携教員になり、活動をする上での学校側の連絡調整(生徒の出欠、担任教諭への連絡等)の業務が増えたが、活動の企画、受け入れ先の連絡調整、当日の生徒の活動支援等、多くのことをコーディネーターが行ってくれるので、地域連携教員としてとても大変だと感じることはない。コーディネーターがいてくれてよかったと感じている。

真岡工業高等学校

地域連携教員	高野 史晃 実習教員	地域連携教員歴	3年
--------	------------	---------	----

1 コーディネーターについて

○自治会とのつながり

地域連携の取組の初めとして、毎年実施していた授業公開の案内を学校が所在する自治会に配布したいと考えた。しかし、どこへ連絡すればよいかわからなかったため、教頭が卒業生に問い合わせたところ自治会の区長の連絡先にたどり着き、回覧板に案内チラシを入れてもらえることになった。このつながりをきっかけとし、区長が地域の窓口の役割を担ってくれている。

○社会福祉協議会とのつながり

市の社会福祉協議会の職員がコーディネーターとなり、福祉施設等の要望を把握して、学校に活動を依頼してくれている。社会福祉協議会との連携は、学校長が協議会主催の会議に委員として参加していることがきっかけとなっている。

2 コーディネーターとの連携の実際

○音楽部と自治会の連携

音楽部は、以前から市の音楽祭に出演し、練習の成果を発表していた。昨年度、音楽祭での発表を見た学校近くの自治会の方から、音楽部の生徒に自分の地域で演奏会を実施してほしいとの依頼があり、公民館主催の行事に参加し、地区の人を対象に演奏会を行った。このように、音楽部は部の活動として地域連携を行ってきたが、窓口となっている区長を通して自治会の回覧板に演奏会の案内を入れたところ、広く地域住民に情報を提供することができ、新たな方が演奏会を見に来てくれるようになった。部の活動が地域に広がってきている。

○「防災キャンプ」の取組を通じた地域との連携

真岡工業高等学校は、平成 26 年に県の「県立学校未来創造推進事業」の委託を受け、特色ある教育活動として防災教育の充実と地域防災の活動拠点としての活動に取り組んでいる。学校が災害時の避難所指定を受けていることから、学科の特徴を生かし、非常用電源装置や防災かまど等を製作し、避難所に必要な設備の充実を図った。その設備を使い、災害時を想定した「防災キャンプ」を夏に実施した。実施にあたり、自治会を通して周辺地域の住民にも参加を呼びかけたが、今年度は残念ながら地域からの参加はなかった。しかし、案内を出したことで様子を見に来てくれた方もいて、顔をつなげることができた。キャンプの活動を通し、今後に向けてよいつながりができた。



防災キャンプの様子

○「真心工房」の活動

真岡工業高等学校では、「ものづくりを通じた地域貢献」を目指し、生徒が学校で学んだ成果を生かして地域住民の困ったこと(建具の調整、網戸の張り替え等)をお手伝いする「真心工房」というボランティア活動を行っている。最近では、個別の依頼だけでなく、市の社会福祉協議会からの依頼もある。

○「真工高だより」の作成・配布

地域の方々にとって、高等学校は小・中学校と比べて地元の自分たちの学校という印象がなく、足を運ぶことも少ないため、学校の教育活動を知ってもらったり、理解してもらったりする機会がない。そこで、学校の情報を地域に積極的に発信していくため、地域の方を対象にした「真工高だより」を地域連携教員が作成、回覧板を通して配布している。内容は、授業公開・学校公開、音楽部の演奏会の様子等、地域連携活動に関するものを主に掲載している。

3 成果と課題

○成果

自治会の区長が地域側の窓口の役割を担ってくれるようになってから、地域の方に学校に来てもらう機会や学校の学習内容を知ってもらう機会が増えたと感じる。高等学校が地域にとって少しずつ身近な存在になっているのではないと思う。また、区長とのつながりができたことで、地域への情報発信の機会が増え、多くの方々に学校のことを知ってもらえるようになった。このことから、今まではつながっていなかった地域の方が学校に来てくれるようになったり、連絡をしてくれるようになったりして、地域連携に関する活動が少しずつ広がりを見せている。

「真心工房」の活動を通して、生徒は、学校で学んだ成果を地域に還元することができ、自分の技術や制作物が地域のために役立っていることを見たり感じたりすることができている。地域の方が喜んでくれている姿を見ることは、生徒にとってとてもよいことであると感じている。

○課題

現在は特にないが、これから連携が広がることで、新たな依頼が増えることも想定される。依頼が増えることはうれしいことではあるが、依頼の内容が生徒が対応できる簡易的なものでなくなってしまった場合、対応ができなくなってしまう恐れがあると考える。

《地域の皆様方へ》

～真工高だより～ 12月号

発行 真岡工業高校
住所 真岡市寺久保1-2-9
電話 0285-82-3303

寺久保地区の皆様には、日頃より本校の教育にご協力ご理解を賜り誠にありがとうございます。本校の様子を真工高だよりにてご紹介させていただきます。

真工高「ものづくりをととした地域防災の取組み」

真工版防災キャンプ

2014年度から取り組んできた「県立学校未来創造推進事業」も今年度で最終年度を迎えました。今年4月のNHK取材の際には、地域の方に来校していただき本校の取り組みを実際にご覧いただきました。お忙しい中、ご協力いただきありがとうございます。
8月23日～24日には、真工高版防災キャンプを行い、公益社団法人 若手県民農士会 太田代健二氏を講師にお招きして講演会およびバッククッキングを行いました。



バッククッキングの様子 防災キャンプの様子

ピザ釜が完成しました!! ～地域人材育成事業～

本年度の地域担い手人材育成事業で、株式会社 家守様にご指導いただきながら防災かまどの機能拡充を目指しピザ釜を製作しました。



ピザ釜制作の様子 ピザ釜小屋

真工高 音楽部によるJAZZコンサート開催!!

今年も「真岡工業高校音楽部 定期演奏会」を開催します。部員一同楽しい演奏会となるよう日々練習を重ねていますので、是非ご来場くださるようお願いいたします。

第6回 音楽部定期演奏会

白 時 平成29年1月14日(土)	
開 場 14:00	※入場無料
開 演 14:30	
演奏内容 第1部 Jazz 第2部 J-pop	場 所 真岡市民会館小ホール

真工高だより

富屋特別支援学校

地域連携教員	見持 英児 教諭	地域連携教員歴	3年
--------	----------	---------	----

1 コーディネーターについて

○富屋地区まちづくり連絡協議会

富屋特別支援学校がある富屋地区には、地区の自治会、青少年育成会、婦人会、老人会、社会福祉協議会、小・中学校、特別支援学校、保育園・幼稚園・認定こども園、文化保存会、地区市民センター等の各種機関の代表で組織された「富屋地区まちづくり連絡協議会」がある。協議会では、協議会主催のまちづくりに関連するイベントや地区の年間行事等をまとめている。参加している各機関は、互いに連携しながらイベント・行事等に参加・協力している。富屋特別支援学校は、この協議会に地域連携の調整を依頼していることから、協議会が地域のコーディネート機能を果たしていると言える。

2 コーディネーターとの連携の実際

○連携している内容

- ・協議会参加機関である富屋地区市民センターを介して、各自治会の回覧板に学校だよりや行事の案内等の通知を入れてもらっている。反対に、地区の会報等の案内もセンターを介して送られてくるので、学校と地域の情報共有が図られている。
- ・特別支援学校やその教育について理解を深めてもらうため、協議会において、学校や地域連携教員について説明する機会を作ってもらっている。
- ・「とみやふるさとまつり」において、作業製品の展示・即売を行っている。また、同まつり内の文化祭において、生徒の作品を展示している。

○コーディネーターとの連携を深める工夫

これまで総会等の協議会の集まりには学校長が代表として参加していたが、地域の方々に顔を覚えてもらうため、地域連携教員も一緒に参加するようになった。また、関係機関の関連行事やイベントにも地域連携教員が参加し、地域の人々とのネットワークを広げている。まず顔のつながりを作り、地域連携教員として積極的に協議会に関わることで信頼関係が生まれ、連携が深められている。

3 成果と課題

○成果

最も大きな利点は、地域側の窓口が明確であり、連絡調整の時間と労力が縮小され、地域連携をスムーズに進められることである。

県立学校では、地域をどう捉えるかが難しいところだが、学校が所在する地域や近隣の小・中学校とのつながり、学校や生徒について理解してもらうことは大切であると考え。富屋特別支援学校では、まちづくり協議会が中心となり、学校同士や学校と地域のつながりを作ってくれている。このことで、他の学校や地域住民・団体等に特別支援教育を理解してもらう機会が生まれ、ひいては、地域から学校の教育活動への幅広いサポートが期待できる。

○課題

他の教員とのつながりを作る機会があまりない。そのため、定期異動などにより地域連携教員が変わった際の引継ぎ等に課題が出るのではないかと考える。

4 その他

○どのようにしたら、コーディネーターとの連携がうまくいくか

一人にコーディネーターを任せるとはならず、地域、学校の双方の代表が集まれる会議や委員会等を作って、そのメンバーがコーディネーターの役割を担えるといいのではないだろうか。複数でコーディネーターの役割を担うことで、一人一人の専門性を生かすこともでき、より充実した連携が図れるようになるのではないかと考える。

○地域連携教員として、力を入れてきたこと

地域に開かれた学校として、ボランティア養成講座や学校開放等、これまで地域を学校で受け入れる活動は行ってきていたため、地域連携教員設置後は、受け入れるだけでなく、学校が外に向かって働きかけることが大切だと思い、地域行事等へ積極的に参加してきた。その結果、とみやふるさとまつり実行委員会から声がかかり、昨年度から、「とみやふるさとまつり」で作業製品の展示・即売ができるようになった。まつりには、学校のことをよく知らない人も多く訪れている。まつりでは、作業製品を手にとった多くの方々から称賛を得た。学校を理解してもらうとてもよい機会であったと思う。一方、まつりへ参加できたのは教員だけであり、まだ、児童生徒の参加につながっていない。今後も、地域へ参加しながら、児童生徒がどのように関わっていけるかを検討したい。そして、児童生徒も教員も地域と関わることで、学校が地域の一員としての役割を果たしていければと思う。



「とみやふるさとまつり」での展示即売会ブースの様子

第3章 分析と提言

1 調査の分析

地域コーディネーターの存在は、学校支援地域本部事業以来、学校支援ボランティアの導入だけでなく、団体との共催事業や子どもを対象とした事業への協力、学校行事への協力依頼など、広く多様な地域連携の際に不可欠な存在として位置づけられている。

栃木県内の概ね 6 割強の小中学校にコーディネーターが配置されていることがわかった。しかし、その実態は学校の規模や歴史、児童生徒の通学区域内の地域の様子によって多様であることがわかった。配置されている地域コーディネーターは、保護者あるいは元保護者の 40～60 歳代の女性が多い。

3 割の学校はその必要性を感じているが配置できていないと回答しており、必要性を感じないと回答したのは 7.8% である。特に、小規模校でややこの傾向があり、PTA や地域の人々が学校を支援する体制が整っており、改めてコーディネーターとして配置する必要性を感じないという学校が見られる。しかし、9 割以上の学校で配置されているまたは必要性を感じていることがわかる。

コーディネーター配置に関する効果は、概ね小学校において中学校と比較してより肯定的であることがわかった。中学校では教職員の負担軽減を含めてその効果がやや低くなっている。

地域コーディネーターの活動としては、ボランティアの確保、学校や地域の要望を聞く、学校とボランティア等との連絡調整の 3 つが中心であり、半数程度が直接学校に出向いて活動を行っている。活動としては、ボランティアの確保で手がいっぱいであるという現状が見えている。必ずしも総合的な学校と地域の連携に向かっているわけではない。

活動上の課題として、ボランティアの確保以外では、3 割程度のコーディネーターが他のコーディネーターとの交流やスキルアップの機会を挙げている。しかし、コーディネーターの活動を充実させるための学校からの支援を聞くと、年間行事予定表や定期的な打合せは求めているが、研修会や交流会、あるいはハンドブックといったものに対する要望は少ない。

コーディネーターと教員とのコミュニケーションの満足度について、教員は教頭(副校長)、主幹教諭・教務主任がやや多くなっているが、双方ともほぼ満足していると回答している。また、教員とコーディネーターでは、コーディネーターの方がより満足度が高い。

さらに、コーディネーターに求められる力を聞くと、コミュニケーション力との回答が最も多くなっている。教員もコーディネーターもほぼ同様の傾向を示している。

総じて、栃木県の地域コーディネーターの配置は相当程度進んでいるが、活動内容としては未だ学校支援ボランティアの導入に焦点化されており、地域との連携にまでは進展していない。しかし、行政の支援やコーディネーターの複数配置によって、今後は広く地域連携全般にわたってコーディネートしていく可能性がみられるのが特徴である。また、中央教育審議会答申で示された地域学校協働本部のコーディネーターとして活動するため、コーディネーターの資質向上や研修は、ニーズとしてはみられないが、方向性としては必要となる。

2 提言

1 コーディネーターの活動内容やその在り方は、学校によって多様であること

小中学校で活躍するコーディネーターの活動内容は、現在のところ、ボランティアの確保や連絡調整などにその多くのエネルギーが割かれている。しかし、その在り方は、学校やコーディネーターによって大きく異なっている。学校支援ボランティアを探してきてもらうといった基本的なことだけでなく、ボランティアの学びの場を企画立案したり、地域の団体との共催事業を企画したりといった事業にまで拡張してきている。親子を対象

として学校を会場に事業を企画運営したという、市町村の社会教育主事のような活動をしているコーディネーターも存在する。このようにコーディネーターの活動はモデルを示して一律に実施するという性格のものではなく、学校や地域の実態に即して柔軟に活動内容が選択されてよい。その場合、学校支援ボランティアの受入れを基本としながらも、教育を中核とした地域づくりと学校の課題解決に寄与する方向に向かうことが望まれている。

また、コーディネーターの在り方は、活動期間が長くなるとその役割も次第に変化してくる。当初は全てに関与する必要があるが、次第に担当教員とボランティアが直接連絡をとれるようになれば、コーディネーターの役割も大きく変化する。コーディネーターの有り様は、ボランティアの経験の量や教員の受入れの経験の量によって影響される。コーディネーターは自分自身の役割を自分で変化させながら、コーディネートの方法や形態を変えていく必要がある。さらには単に学校教員の要望に応えるコーディネートだけでなく、コーディネーター自身が教員も気づかない学校のニーズに気づき、ボランティア活動の場を開発していくことが期待されている。

一方、県立学校、特に高等学校の場合、コーディネーターの在り方は小中学校とは大きく異なる。活動の主体が生徒である場合が圧倒的に多く、ボランティア活動等の場をどのように提供しアレンジしていくのがコーディネーターに問われている。今回実施した個別の聞き取り調査では、社会福祉協議会やボランティアセンターの職員が活動をコーディネートしているが、その在り方は学校の専門性や地域の特性に大きく影響を受けている。高等学校では、小中学校のように一律にコーディネーターを配置するというよりも、事業によってそれぞれにコーディネートする人々を見つけ、それらの人たちとつながっている。高等学校の場合には、具体的には活動により異なるが、社会福祉協議会の職員、市民活動センターやボランティアセンターの職員、自治会・町内会の役員、まちづくり団体の役員など、コーディネートに係る人々との丁寧なコミュニケーションによって生徒の円滑なボランティア活動が可能となる。

2 行政による支援の充実が必要であること

学校にコーディネーターを配置するかどうかについては、学校独自の判断よりも市町の教育委員会で包括的に配置を推進する必要がある。コーディネーターの人選、養成、研修、交流なども教育委員会で全体として実施する方が合理的である。コーディネーターの複数配置や予算措置なども、学校の規模や活動の規模によって検討されていくべきであろう。

コーディネーターの配置を進めることはよいことではあるが、学校の規模や地域の実態によっては必ずしもコーディネーターを一律に配置するという選択をする必要はない。既にコーディネーターとしての機能を果たしている関係者が存在する場合には、別途配置するのではなく、既存の制度や実態に即して対応する方が合理的である。

また、コーディネーターの予算化を推進する必要がある。コーディネーターは、ボランティアとはかなり性格の異なる業務を行っており、その責任も大きいことから、市町の教育委員会は、報酬の予算化を検討して、推進していく必要がある。

3 学校の受入れ態勢の整備が必要であること

コーディネーターあるいは学校支援ボランティアに対して、学校はどのようにそれを受け入れ、年間指導計画に位置付けていくのかについて、学校の意思を統一的に理解する態勢を整える必要がある。具体的には、校内研修のテーマとしたり、校務分掌の地域連携教員や地域連携係の仕事内容を他の教員に周知したりするなど、教員全体で理解することが必要である。

また、このためには、地域連携教員を含む地域連携係の教員とコーディネーター、教頭(副校長)などによって構成される委員会を設置し、定期的に情報交換し、円滑なコーディネートの推進を図るべきである。地域コーディネーターを孤立させず、学校全体で支援する態勢を整備することが必要である。

3 まとめにかえて

今回の調査では地域連携教員とコーディネーターに対して意識調査を行った。そこから、それぞれの役割や目指すべきこと、留意点が浮かび上がってきた。そこで、それぞれについて、今後の留意点を次のように整理しておくこととする。

【地域連携教員の留意点】

1 社会教育主事の資格を取得しておこう

半数程度の地域連携教員は資格を取得しているが、半数は未取得である。主事資格の取得を通じて、どのような地域連携が必要なのかを系統的に理解しておく必要がある。

2 コーディネーターと話をしよう

コーディネートがうまく機能したり、地域連携教員としての役割が十分に機能したりすることができるのは、地域連携教員とコーディネーターとのコミュニケーションの量が大きく影響する。雑談や世間話も含めてコーディネーターとつながることが不可欠である。特に、学校の情報を提供するとともに、コーディネーターの話を聴くことが重要である。できる限り、定期的な情報交換の場を設定する方が効果的である。

3 学校支援ボランティアやコーディネーター配置の効果を他の教員に伝えよう

教員の間には、当然ではあるが、受入れに関する温度差がある。こうした現状を改善するため、プリントや朝の打合せなどで効果を含めた情報提供に心がける。また、全校集会や職員会議、朝の打合せなどでコーディネーターや学校支援ボランティアを紹介する時間を設定することも効果的である。

4 コーディネーターに学校情報を提供しよう

児童生徒の個人情報ではなく、学校全体の動きがわかるような行事予定表や学校の運営方針、児童生徒に対する基本的な考え方など、学校の意思についての情報を提供すること。コーディネーターに学校教育や学校の実情を理解してもらい、よりよい活動をコーディネートしてもらうためには、学校通信、PTA通信、行事予定表、在籍者数、学校経営計画、校務分掌などの情報を学校から提供し、共有することが大切である。

5 コーディネーターやボランティアに関する情報を教頭（副校長）や教務主任と共有しておこう

学校が組織として機能するためには、こうした基礎的な情報の共有は欠かすことができない。前述したが、理想は関係者によって構成されるコーディネーション委員会である。確かに仕事は増えるが、学校とは意思疎通を的確に行わなければ教育活動を円滑に展開することができない。

6 校内研修で地域連携に関する情報を共有し、共通の行動がとれるようにしておこう

地域連携や学校支援ボランティアをテーマとして校内研修を行う。その際、コーディネーターや学校支援ボランティアにも同席してもらい、お互いが理解できるように配慮しておく必要がある。一般の教員がもっとボランティアやコーディネーターに声をかけたり、話ができたりすることが大切である。

【コーディネーターの留意点】

1 最初は直接学校に出向いて活動しよう

電話や文書だけでは、一見合理的なようで、実は意思疎通が不十分な場合が多い。直接学校に出向き、教員の話聴き、コーディネーターの話も聴いてもらい、確認しながらコーディネートする必要がある。何度も出かけていると次第に電話でも十分意思疎通が可能になる場合もあるが、当初は直接のコミュニケーションが重要である。そこでは、教員との雑談も含めて、会話の量が活動の質を高めることに留意しておきたい。その際、単に学校の要望を聴くだけでなく、教員の動きや仕事の流れを理解しておくことによって、教員でも気づかないボランティアニーズを発見することができる。活動内容をコーディネーターから提案できるようになる。

2 地元の団体の行事や公民館まつりなどに出かけよう

地域の人材は主として公民館で活動している。公民館は優れた人材情報源でもある。コーディネーターの情報源は公民館でのイベントや事業のチラシ、公民館職員とのコミュニケーションにある。これが最も効率的なボランティアの確保につながる。そのためには、公民館や地域に関わる様々なお祭りなどのイベントや事業に積極的に参加し、人を知るための努力が必要である。

3 学校の先生と話しよう

日頃多忙な教員と話することは困難なことも多いが、教頭(副校長)、教務主任だけでなく、県内の学校に必ず配置されている地域連携教員とのコミュニケーションが大切である。教員の仕事の様子や配慮していることなど、直接ボランティアのことだけでなく、幅広く学校での活動についての話をするのが大切である。その会話の中にボランティア活動の場の開発のヒントが隠されているからである。学校教員が気づかない些細なボランティアニーズに気づき、ボランティアが得意な活動としてつなげるようコーディネートできるチャンスが埋もれている。

4 他のコーディネーターやボランティアと話しよう

複数配置されているコーディネーターの場合、コーディネーター同士のコミュニケーションが最も重要である。複数配置の場合には両者の意思疎通がコーディネートの成否に関わるので、細かいことや些細なことを情報共有しておく必要がある。また、ボランティアの話聴くことも大切である。そこでは様々な課題や成果を確認すると同時に、内容を学校側に的確に伝達し課題を解決する必要がある。

5 コーディネーターの存在を周知しよう

全校集会や職員会議などでコーディネーターの紹介と活動内容の周知を図る必要がある。同時にPTA総会や役員会、PTA通信などでコーディネーターを紹介してもらい、学校支援ボランティアの活動も併せて紹介してもらえるように働きかける必要がある。これは教頭(副校長)を通じてアプローチするのが合理的である。そのことによってボランティアの確保や教員や保護者への周知につながる。

第4章 参考資料

1 学校支援のためのコーディネーターに関する調査 調査票

(1) 地域連携教員用

学校支援のためのコーディネーターに関する調査【調査票】

地域連携教員用

○本調査は、学校支援にかかわるコーディネーターについて、その現状を把握するものです。本調査における「コーディネーター」は、次のような人を表します。

学校と地域の教育支援人材や機関（地域住民、学校支援ボランティア、団体・関係機関等）が連携する際の窓口となり、学校の地域連携活動について1回きりではない協力をを行う地域の人材（公民館職員等の行政職員を含む）。

調査項目

※記述以外の回答については、あてはまる欄に「1」をご入力ください。

■ 問1. 貴校には、コーディネーターがいますか。

- 学校や教育委員会から指名されたコーディネーターがいる → 人数 人
- 正式に指名されていないが、コーディネーターの役割を果たしている人（地域の相談役）がいる
→ 人数 人
- コーディネーターはいない
→ 貴校において、コーディネーターがいない理由をお聞かせください。
※どちらかあてはまる方をご回答ください。
- a コーディネーターの必要性を感じない
→ 必要性を感じない理由をお聞かせください → 回答後、問6へ
- b コーディネーターの必要性は感じているが、配置ができていない
→ 配置できない理由をお聞かせください → 回答後、問6へ

■ 問2. 地域連携の担当として、コーディネーターとコミュニケーションが十分に図れていますか。

※どちらかあてはまる方をご回答ください。

- どちらかと言えば十分である（満足している）
→ どのようなところから「十分」と感じますか。理由があればお聞かせください。
- どちらかと言えば十分ではない（満足していない）
→ どのようなところから「十分でない」と感じますか。理由があればお聞かせください。

■ 問3. 地域連携に関してコーディネーターに依頼している内容について、あてはまるものすべてを選んでください。

- 学校支援ボランティアを確保する
- 学校とボランティアや外部の団体・機関等との連絡調整を行う
- 教員や地域（地域住民、ボランティア、外部の団体・機関等）の要望を聞く
- 地域連携に関する研修を計画したり、実施したりする
- 学校の広報紙やホームページを通して情報を発信する
- 学校と地域の交流を深める行事やイベントなどを計画したり、実施したりする
- ボランティア間の交流を深め、円滑な関係づくり（ネットワークづくり）を行う
- その他（具体的に）→

■ 問4.コーディネーターの配置に関する効果について、2つの選択肢の中からあてはまる方を選んでください。

- | | | |
|-------------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| a 様々な人がボランティアとして協力してくれるようになった | <input type="checkbox"/> そう思う | <input type="checkbox"/> そう思わない |
| b 学校と地域のつなぎ役となり、継続した連携活動ができるようになった | <input type="checkbox"/> そう思う | <input type="checkbox"/> そう思わない |
| c 教職員の負担が軽くなり、子供と向き合う時間が増えた | <input type="checkbox"/> そう思う | <input type="checkbox"/> そう思わない |
| d 研修や情報発信などを通して、地域連携に関する教職員の理解が深まった | <input type="checkbox"/> そう思う | <input type="checkbox"/> そう思わない |
| e 地域住民の学校への理解が深まった | <input type="checkbox"/> そう思う | <input type="checkbox"/> そう思わない |
| f その他(具体的に)→ | <input type="text"/> | |

■ 問5.コーディネーターの活動が充実するために、学校ではどのような支援体制が必要だと思いますか。必要だと思う項目上位2つを選んでください。

- 年間の活動がわかりやすくなるような、学校支援ボランティアに関する行事予定表などを作成する
- コーディネーターの役割や活動内容を示したマニュアル等を作成する
- ボランティアだよりやPTA通信などで、コーディネーターのことを紹介し、周知する
- 定例会等のコーディネーターとの定期的な打合せの時間を作る
- コーディネーターの活動経費を予算化する
- コーディネーターのスキルアップにつながる研修等への参加を促す
- その他(具体的に)→

■ 問6.地域連携を進める上で、コーディネーターにどのような力が必要だと思いますか。必要だと思う項目上位2つを選んでください。また、コーディネーターがいない学校は、求めるコーディネーター像としてお答えください。

- 学校支援ボランティアに関する活動、研修、交流会等を企画し、実践する力
- 地域の施設、文化、歴史、人材に関する情報を収集したり、地域連携に関する情報を発信したりする力
- 教員やボランティアと良好な関係を築くコミュニケーション力
- 学校支援ボランティアに適切な人や団体、地域の学習の場(施設など)を見つける力
- 活動経費を適切に使うことができる力
- 活動内容やコーディネートした内容を振り返り、次回の内容をより良いものへと変えることができる力
- その他(具体的に)→

■ 問7.その他、コーディネーターの活動・配置等について、ご意見をお聞かせください。

■ 問8.最後に、あなたご自身のことについてお教えてください。

- (1) 所属校名
- (2) 回答者(地域連携教員)名
- (3) 年代 20代 30代 40代 50代以上
- (4) 職名 教頭(副校長) 主幹教諭 教務主任 教諭(担任)
- 教諭(担任外) その他(講師等)
- (5) 地域連携教員の経験年数 1年目 2年目 3年目
- (6) 社会教育主事の資格 有 無

ご協力ありがとうございました。回答が終わりましたら、上書き保存したデータをEメールに添付してご報告ください。

(2)コーディネーター用

学校支援のためのコーディネーターに関する調査【調査票】

コーディネーター用

○本調査は、学校支援にかかわるコーディネーターについて、その現状を把握するものです。

調査項目

※記述以外の回答については、あてはまる欄に「○」をご記入ください。

- 問1.あなたがコーディネーターとして活動している学校数をお答えください。また、中心的に活動している学校名を2つまでお答えください。

小学校 校

中学校 校

学校名

- 問2.コーディネーターとして活動する際、担当する先生とはどのように連絡をとっていますか。最も多い連絡方法1つをお答えください。

学校を訪問して会って話す

メールでやりとりをする

電話で話をする

通知等の文書で連絡をとる

その他(具体的に)→

- 問3.コーディネーターの活動を進めるにあたり、担当する先生とコミュニケーションが十分に図れていますか。※どちらかあてはまる方をご回答ください。

どちらかと言えば十分である(満足している)

→ どのようなところから「十分」と感じますか。理由があればお聞かせください。

どちらかと言えば十分ではない(満足していない)

→ どのようなところから「十分でない」と感じますか。理由があればお聞かせください。

- 問4.コーディネーターとして、どのような活動をしていますか。あてはまるものすべてを選んでください。

学校支援ボランティアを確保する

学校とボランティアや外部の団体・機関等との連絡調整を行う

学校の先生や地域(地域住民、ボランティア、外部の団体・機関等)の要望を聞く

地域連携に関する研修を計画したり、実施したりする

学校の広報紙やホームページを通して情報を発信する

学校と地域の交流を深める行事やイベントなどを計画したり、実施したりする

ボランティア間の交流を深め、円滑な関係づくり(ネットワークづくり)を行う

その他(具体的に)→

- 問5.コーディネーターの活動上の課題として、どのようなことを感じますか。2つの選択肢の中からあてはまる方を選んでください。

a ボランティアの確保が難しい

そう思う

そう思わない

b 活動に関して、教職員や保護者、地域住民の理解が得られない

そう思う

そう思わない

c 相談相手や一緒に活動してくれる仲間がいない

そう思う

そう思わない

d 先生とコミュニケーションや打合せの時間をとるのが難しい

そう思う

そう思わない

e 学校支援ボランティアや他地区・他の学校のコーディネーターとの交流や情報交換の機会が十分でない

そう思う

そう思わない

f 自分自身のスキルアップの機会が十分でない

そう思う

そう思わない

g その他(具体的に)→

■ 問6.コーディネーターとして活動が充実するために、学校からのどのような支援があると良いと思いますか。あると良いと思う項目の上位2つを選んでください。

- 年間の活動がわかりやすくなるような、学校支援ボランティアに関する行事予定表などがある
- コーディネーターの役割や活動内容が書かれたハンドブックがある
- ボランティアだよりやPTA通信などで、コーディネーターのことを紹介する機会がある
- 定例会等、先生との定期的な打合せの時間がある
- コーディネーターが活動に使うことができる予算がある
- 自分のスキルアップにつながる研修会などがある
- その他(具体的に)→

■ 問7.コーディネーターの活動をする上で、コーディネーターにはどのような力が必要だと思えますか。必要だと思う項目上位2つを選んでください。

- 学校支援ボランティアに関する活動、研修、交流会などを企画したり、実施したりする力
- 地域の施設、文化、歴史、人に関する情報を収集したり、学校支援ボランティアに関する情報を発信したりする力
- 先生やボランティアと良好な関係を築くコミュニケーション力
- 学校支援ボランティアに適した人や団体、地域の学習の場(施設など)を見つける力
- 活動に関する経費を正しく使うことができる力
- 活動やコーディネートした内容を振り返り、次回の内容をより良いものへと変えることができる力
- その他(具体的に)→

■ 問8.その他、コーディネーターの活動・配置などについてご意見がありましたら、お聞かせください。

■ 問9.差し支えなければ、あなたご自身のことについてお教えてください。

- (1) 氏名
- (2) 性別 男性 女性
- (3) 年代 30歳未満 30代 40代 50代 60歳以上
- (4) コーディネーター歴 1年目 2年目 3年目 4年目 5年目 5年以上
- (5) 経歴 ※最もあてはまるもの1つをお答えください。
- 保護者・元保護者
 - 元教員
 - 民生委員・児童委員、自治会役員などの地域の代表
 - 公民館・生涯学習センター職員などの行政職員
 - その他(具体的にご記入ください)→

ご協力ありがとうございました。

回答が終わりましたら、下の返信先までFAXまたはEメールにてご返信くださいますようお願いいたします。

<<返信先>>

栃木県総合教育センター生涯学習部

FAX番号:028-665-7219

メールアドレス:shogai-c@tochigi-edu.ed.jp

※FAXの場合は、送付票を付けずに調査票のみを送信してください。

※Eメールの場合は、件名に「コーディネーター活動状況調査報告」とご記入ください。

2 学校支援のためのコーディネーターに関する調査（地域連携教員用） 問7 記述内容一覧

- 地域連携を推進するにあたり、コーディネーターの配置は不可欠と思われる。
- コーディネーターのおかげでとてもスムーズに地域と連携がとれている。活動もとても積極的で、放課後子ども教室等で様々な提案をしてくれるので、子どもたちも有意義な活動ができている。
- コーディネーターが週に3日、学校に来てくれるので、とても助かっている。
- 学校と地域の双方向の連携を実現する。地域の教育力と学校との連携によって、より充実した活動を展開したい。その際の、まさにコーディネーターの役割を実現してもらいたい。
- 「家庭科学習支援」や「図書室支援」「読み聞かせ」等の各種ボランティアに対して、コーディネーターが円滑な連絡・調整を行っている。
- 中学校においては、生徒自身ができることが多くなるので、コーディネーターさんに依頼することは小学校ほど多くはないが、とても大切な活動をしているのは確かなので、今後も継続配置を希望する。
- 学校単位で難しいのであれば、中学校区単位でコーディネーターがいるとたいへんありがたい。
- 学校独自のコーディネーターの必要性は十分認識している。放課後スクールが今年立ち上がったので、これを契機に人選を重ね、学校独自のコーディネーター配置を図っていききたい。
- コーディネーターの力を有効に活用することが、校内行事の企画・運営に教員の負担の軽減、児童への有効な指導につながると思う。
- 社会に開かれた学校づくりにおいて、コーディネーターの果たす役割は大きい。
- 新たな学校支援ボランティアが必要となったとき、気軽に相談できるコーディネーターが身近にいたらありがたい。
- 地域へのコーディネーター配置を強く希望する。
- 今まで積み重ねてきた経験から、学校独自に地域の方々を発掘し、子どもたちに生きた学習の場を与えている。今後社会の様々なニーズと変化に対応するには、地域をまとめるコーディネーターの必要性をとても感じている。
- コーディネーターのお陰で、様々な方がボランティアとして学校に来てくれ、教育活動の充実が図れた。学校の要望に快く応えてくれてありがたい。
- 地域のコーディネーターの代わりに、市の生涯学習情報センターが学校支援ボランティアバンクを設け、連携の手助けを行ってくれているが、各学校ごとに地域を把握しているコーディネーターが配置されるとありがたい。
- コーディネーターの配置について情報を集め、研修を積み、いずれは本校でも正式にコーディネーターが配置できればと考えている。地域の力を引き出し、子どもたちの学習を含む諸活動に生かしていきたい。
- これからの教育活動にコーディネーターの存在はとても重要であると考えられるが、コーディネーターの具体的な活用方法や候補者の選択など、解決しなくてはならない諸問題が存在している。
- 地域の教育力を活用するためには今後重要な役割であると考え。地域の実情をよく把握した上での適切な活動計画が必要。
- 本校では、コーディネーターが配置されているため、地域連携に関する活動が円滑に実施されていると思う。
- コーディネーターの活躍により、外部人材活用がより推進されている。地域連携教員としては、教師間の情報の共有化や教育活動への効果的な活用方法をコーディネーターと共に模索していかなければならないと感じている。
- 今年度より、学校ごとに地域コーディネーターが配置され、地域学習に関する相談や、外部人材の選定や確保等についての協力が得られることを期待している。地域連携の窓口として、より一層活用していきたい。
- 現在、地域コーディネーターはいないが、公民館の館長がコーディネーターのような役割を担っている。なるべく早く地域コーディネーターが見つかるとうい。
- 本校では、公民館と協力してやっている。コーディネーター的なことは公民館が中心となってやってくれるが、なかなか時間がとれないということと、異動などで係がかわってしまい、一から関係づくりを行うなどの問題が課題となっている。
- 子どもにとって、様々な人たちと日常的に関わりあうことは、豊かな成長につながる。学校と地域をつなげるためにもコーディネーターの配置は必要不可欠であると思われる。
- コーディネーターの配置により、情報の集約が容易になった。また、コーディネーターと良好な関係を保つことで、何でも気軽に相談できる間柄になることを意識している。
- 本校は数年後に統合されることになっており、現在行っている地域連携を統合後、どのような形で継続していくかが課題となっている。現在行っている地域連携のいくつかを統合後も継続して行っていくためには、コーディネーターの配置が必要と考えている。
- 地域との連携を新たに開拓するときにコーディネーター的な方(相談できる方)がいるとういと思う。
- 本地区にも地域コーディネーターがいてくれるとありがたい。
- 学校支援ボランティアが確保でき、学校と地域の連携に関する活動の強力なパイプ役になってもらえ、充実した活動が期待できる。
- 「地域人材を活用しての授業をしたいのですが。」と同僚から相談を受けたり、市の生涯学習課から出前講座の資料をいただいたりしている。学校の地域連携活動について、必要があったときのみでない協力をいただけるコーディネーターがいて、スムーズに学校支援をしてもらえるようになるととてもありがたいと思う。
- 各学校の地域の実情に応じてコーディネーターを設置したり、しなかったりすれば良いのではないかと。一律にコーディネーターを配置したからといってうまく機能するとは限らないのではないかとと思う。
- 町の教育委員会や生涯学習課でいろいろ手配してくださるので、あえてコーディネーターの必要性を感じない。

- 地域連携教員が指名される前から町の生涯学習課の主導、支援もあり、学校における地域の教育資源を生かした教育活動は盛んに行われ、根づいていた。さらに、必要なことは学校支援ボランティアなどを通して人材を募っている。コーディネーターがいるに越したことはないが、管理職や地域連携教員、地域の学校支援ボランティア、町生涯学習課、町民活動支援センターなど今あるネットワークが学校と地域人材をつなぐ役目を果たしているため、大きな困り感はない。
- 小学校区でのコーディネーターも必要だが、小中一貫教育を進めるにあたり、中学校区、公民館単位でのコーディネーターが必要だと思う。
- 本校のコーディネーターは、忙しい立場であるにもかかわらず、学習支援者を探すのに奔走してくれている。生活科における引率支援や家庭科でのソーイング関係、夏休み明けの作品整理など、多くの場で協力してくれることで良質な学習を確保できている。しかしながら、要望すればするほどコーディネーターの負担が大きくなるため、依頼内容を厳選しているのが現状である。
- 本校のコーディネーターはとても協力的である。その分、負担も大きいように感じる。また、次期のコーディネーターを探すことが難しい。
- 2名のコーディネーターがそれぞれの持ち味を発揮し、うまく役割を分担して活動してくれているのでとても助かっている。ただ、いつまでも引き受けてもらえるわけではないので、交代をスムーズに行えるような環境づくりを考えておかなければならないと思っている。
- 現在のコーディネーターはずっと続けていただきたいと思うようなとても素晴らしい方で、教職員との信頼関係も十分構築されている。今後の大きな課題は、その方の後継者である。
- 本校のコーディネーターは長く活動してくれており、教員とも近い関係で接してくれるので、ボランティアを必要とするときには雑談的に相談できるような雰囲気、自然と地域と学校の関係が近くなっているように感じている。ただ、今後役を退かれるようなときに、コーディネーターになるような方が他にいないかどうかが地域との連携をいい状態で進めていくポイントになると思う。
- コーディネーターの活動はとてもありがたいのだが、この役にふさわしく中心となって長期間担当して下さる方を確保することはなかなか難しい。常に次の候補の方を探す必要がある。
- 地域住民の高齢化や少子化などにより、ボランティアの確保が年々難しくなっていることに加え、コーディネーターの交代時期も迫っているという現状がある。活動の継続や円滑な引継ぎが行えるか危惧しているところである。
- 現在のコーディネーターは3年目になるが、今後継続してくれるかは未定。コーディネーターを新たに見つけるのが大変。
- 一人の方の期間が長くなることが考えられ、交代のタイミングが難しい。
- 本地域は、積極的に学校支援ボランティアを紹介してもらえているので助かっている。しかし、高齢化のため、今後は後継者を養成しなければならないと思う。もっと若い方がどんどんコーディネーターとして活躍できる場を作らなければならないと思う。
- 本校の地域コーディネーターは、社会福祉協議会会長をはじめとして多くの役職を兼ねているのでとても忙しい方である。地域をよく知っている方なので適任者であると思うが、次につながる人材を育成する必要があると思う。
- コーディネーターが高齢のため、後継者の育成が急務となっている。
- 現状よりも多く予算を確保し、複数配置ができるとよい。
- 本校のコーディネーターは、よくやってくれている。ただ、本人は言っていないが、負担を大きく感じる。コーディネーターは複数人いると都合がよいと思う。現在、人を探している段階である。ちなみに、地域連携教員も複数人いると助かる。
- 現在3名のコーディネーターがいるが、適切な人数かと思う。多すぎても意見がまとまらず、活動しにくいのかと思う。とても意欲的で、協力的なので助かっている。
- 可能であれば、複数の方をコーディネーターとして指名できるようにしていきたい。
- コーディネーターとなる方は、仕事をしながら活動という形になることが多い。「活動したい」「協力したい」という思いを継続して持ってもらうため、複数配置をしたり、活動の幅を広げるためにも様々な世代の方々にかかわってもらったりするなどの体制づくりを工夫した方がよいと感じた。(地域の実態に合わせて)
- 活動内容が多岐に渡るので、コーディネーターは複数・男女配置が必要だと思う。
- コーディネーターが各学校1名だと、依頼が多くて大変である。また、将来コーディネーターの引継ぎが円滑に行われるよう年齢層を考慮した複数配置を考えるべきだと思う。
- 現在、本校のコーディネーターは男性ですが、女性のネットワークも必要になることがあるので、女性のコーディネーターも配置する方向で考えたい。
- 1人配置になっているが、実際には生涯学習課に直接依頼することの方が多いので、人数を増やすか本校のような生涯学習課との連携が図れれば学校はよいと考えている。
- 複数のコーディネーターがいるとよいと感じている。(新たなボランティア人材の発掘、一人のコーディネーターに負担がかからないように)
- 町内3校を一人で担当しているので、もう一人増えるとよい。
- 本校は1000人以上の生徒を抱える大規模校として、お一人のコーディネーターの対応容量を超えている。「総合係」「生徒会」「学年」等の担当による個別のつながりによって回っている部分もあり、一人配置ですべてのニーズに応えていくことは限界を感じる。
- 3校が統合し、それぞれの地区からコーディネーターを1名ずつたてることができたので、本当によかった。その地域の歴史・風土をよく知る方々がなってくれ、総合的な学習の時間もスムーズに実施できるようになった。
- コーディネーターは、できるだけ長く継続してお願いできるとよい。本校は、現在複数配置になっているが、今後も複数配置が望ましい。
- 本校では、毎年度複数(2~3名)のコーディネーターが活動しており、それが学校支援ボランティアなどの継続的な活動につながっている。また、コーディネーター自身がボランティアとしても活動しており、とてもありがたい。
- 本校ではPTA事務が1名おり、その方ともう1人が地域協議会のコーディネーターである。PTA事務は午前中職員室で執務しているため、連携が十

- 分にとれる。
- 地域コーディネーターの継続的・定期的な活動により、学校と地域の連携がよりスムーズになり、学校における教育活動の充実が図られている。地域とともにある学校づくりを進める一助となっている。コーディネーターの意識や意欲等によって、活動の内容・質が変化すると考える。
 - 学校のニーズ、地域のニーズを相手の実態に応じてとらえ、伝えていくことが求められると思う。
 - 学校の事情を理解し、かつ地域の人材に人脈が広いことなど、コーディネーターとして適任の人材は少ないと思われる。そのため、町の社会福祉協議会等の経験者が適任と考える。
 - 地域の人材に通じており、学校で学習支援をお願いしたときに的確に人材を集め、連絡調整ができる方がコーディネーターとしていてありがたい。
 - 中学校区に一人ぐらいずつコーディネーターがいると学校側から相談しやすいと思う。そして、担当する学校の生徒の様子をよく理解している方なら、適切なボランティアを紹介してくれると考える。また、地域の人材を紹介してもらい、ボランティアとの交流が継続的となるようにしたい。地域と共にある学校であるために。
 - コーディネーターに依頼し、情報を提供していただいても、学校の授業の中で人材活用をするまでに時間がかかる。学校の現状との調整が、円滑にできるとよいと思う。
 - コーディネーターになっていただく方は、例えば、地域のリーダー的存在となるPTA役員や学校職員の中で地域と密接に関わる教員(地域連携教員とチームを組める人)など、学校の実態に応じて決めることで効果が上がると思われる。
 - 地域で活動している団体をつなぐ役割をしてくれる方、一方的な協力ではなく、相互の活躍の場として考えてくれる方にコーディネーターをお願いしたい。
 - コーディネーターの人選がまず重要であると思う。地域の人的、物的、歴史的な資源に精通されていて、かつ学校教育への理解も深い方をお願いできると学校は助かる。
 - 学校の実情を理解し、積極的に協力してくれる方を望む。
 - コーディネーターが地域にしっかりとした人脈をもち、学校の要望に対して前向きに対応してくれるので、地域の人材を大いに活用することができている。適切な配置に感謝している。
 - 現在は、中学校区で1名の配置となっている。小学校での様子や児童生徒の様子もよく理解してくれており、ありがたい。
 - 学校の活動をよく理解して、地域との橋渡しをしてくれる人物をお願いしたい。
 - 配置については、地域に明るい方が適切だと思う。
 - 学校や生徒の実情を十分に配慮した上で、生徒に有益な活動を先生(地域連携教員)と協議しながら企画、運営、支援してもらえると助かる。
 - コーディネーターと連絡を取り合うと、すぐに動いてくれるので感謝している。
 - 図書館整備、読み聞かせ活動など、学校とボランティアの橋渡しをしてきている。また、ボランティアの中心となって活動を計画し、実践している。
 - 学校の実情や実態をよく理解し、学校にとってやりやすいような形で支援を行っていただけるととてもありがたいと思う。
 - 学校教育の実践のために、学校側の求める人材や情報を集めることのできる能力を備えた方や、時間に都合がつく方がいるとよい。
 - 学校の要望を聞き、教育活動に意見しすぎずに支援してくれるような人材は、なかなか見つけるのが難しいと感じる。
 - 本校では、コーディネーターとして活躍してくれる人材に声をかけている段階である。学校の実情をよく理解し、実情に応じて協力してくれる人材を確保できればと思う。
 - 地域によって学校支援ボランティア活動に対する温度差があるので、コーディネーターを見つける難しさにもつながる部分があると思われる。養成講座等実施してもらっているが、県内のコーディネーター間でどんどんネットワークを広げていき、より多くのコーディネーター候補者の情報もいただければありがたい。
 - 学校が独自でコーディネーターを見つけることは、現実的に難しい状況だ。今後、県や市と協力し適任者を探していく必要性は感じるが、地域連携教員の力では限界がある。また、「学校支援ボランティア」「地域連携」に関して、教職員を含め県民に広く理解してもらう必要もあると思う。
 - 一個人ではなく、地域・学校に密着して活動を続けている組織またはそのメンバーがコーディネートしてくださる体制でないと、長く学校に関わってもらえない。残念ながら本校学区ではそれが見つからないでいる。
 - コーディネーターとして適任の方を見つけることが難しいことと、見つけて依頼してもなかなか引き受けしてもらえない現状がある。
 - 学校独自でコーディネーターを依頼・選出する場合、どのような段取りで取り組んでいったらよいのか、その方法についてぜひ教えてほしいと思う。
 - 学校単位では、コーディネーターに適した人材を見つけることが難しいと感じている。
 - 地域にコーディネーターをしてもらえるような人材が見つればよいが、なかなか引き受けしてもらえないという状況もある。配置が望ましいものの、なかなか難しい面もある。
 - 学校だけでは、どのような地域人材がいるのかを把握するのが難しい。町教育委員会の生涯学習課などと連携し、情報の提供をお願いし、確保に努めていければと思う。
 - どのような手順を踏んでコーディネーターを配置することができるのか、よくわからない。
 - 学校独自でコーディネーターを探すのは難しい。地域の方はいろいろなボランティア活動に積極的・協力的であるが、まとめ役的なコーディネーターは荷が重いと感じていると思う。コーディネーター養成講座を紹介しても参加者はいない。
 - 各学校裁量では、進展は難しいと思われる。
 - コーディネーターが恒常的に活動できるように、活動の拠点となるような場所があるとよいが、学校施設に余裕がなく、非常に厳しい。
 - コーディネーターも仕事を持っている。私も担任しながら地域連携教員をしているので、お互い忙しく、なかなか打合せをする時間がない。子どもた

- ちに多様な教育活動をさせることはできるが、教師の多忙感が増える。(日程調整や打合せなど)なるべく、先生の負担にならないようにしたい。
- 地域連携教員の授業時間や学校業務が多すぎてコーディネーターと話すところではない。
 - 学校教育の中でボランティアを依頼したい活動があるときに、コーディネーターに依頼すれば人材を確保していただけるような体制ができていると、教職員の負担も軽くなる。
 - コーディネーターも仕事をもっているが、時間を割いて取り組んでくれているのでとてもありがたい。さらには、定例的に話し合いをもち、地域連携教員との交流を深めていけるとよいと考える。
 - 本校では既に流れができており、私が引き継いだ時点で特に苦労することはなかった。この流れができるまでが大変だったと思う。校内で組織化でき、担当者が替わっても、例年通りに活動できて、改善していける体制づくりが困難なのだと思う。コーディネーターが辛抱強く、その作業に向き合ってくれるかがひとつのカギになる。
 - 職員数にある程度余裕のある規模の学校は、地域連携教員として重きをそちらに向けて活動できるが、小規模で、いろいろな立場で多くの校務分掌を兼務していると、どうしても活動が滞ってしまうことが多い。各校に位置づけているので、人的増員を検討していただきたい。
 - 本町では、各学校にコーディネーターが配置されていないが、学校支援ボランティア活動が盛んである。まずは、地域連携教員が学校のコーディネーターとして機能することが重要ではないか。
 - 担任をしていると地域連携の仕事は優先順位で後の方になってしまう。そうでなければ積極的に外部と連携を取って、コーディネーターの配置を進められると思う。
 - 市で事業を立ち上げ、地域コーディネーターが配置されているためとてもありがたい。コーディネーターを通してボランティアを集めてもらっており、毎年同じ活動が継続して行えている。このことは、教員の負担軽減につながっているように思う。
 - コーディネーターに力を発揮してもらえるように、実際の授業を見てもらったり、十分な打合せの時間を確保したりしていくことが大切である。
 - せっかくのよい活動をどう情報発信し、どう広めていけるかが地域連携教員の課題である。研修でも話題になるが、担任をしているとボランティアが来校時に対応できない難しさがある。本校では、職員間で連携し対応するようにしているが、直接お会いし、あいさつ・説明等ができず、申し訳ないときもある。
 - 組織の中で学校運営協議会を立ち上げ、その中でコーディネーターを位置づけ、新しい活動を展開していける体制を作っていくことを考えている。
 - 係として活動するためには、授業時数や校務分掌のバランスを考慮してほしい。教員のニーズも地域の声も、話す時間がとれなくてはつかめないというのが現状である。
 - 地域連携を重視していくのであれば、コーディネーターの位置づけや活動について体制整備をしていく必要があると思う。
 - 校内の分掌にて、求められる内容の仕事ですで行っている分掌があると思っている。
 - コーディネーターが決まったところなので、大いに活用していきたい。しっかりコミュニケーションがとれるような環境を整え、連携していきたい。
 - 本校では、研修や実践を通して、教員の地域連携への意識が変容し、地域連携活動が活発に行われている。問4a・c・eについては、コーディネーターの配置によるものではなく、教員の日々の連携に関わる実践によって効果が上がっている。現在、コーディネーターとの連絡は不定期で必要に応じて行っているが、今後は、定期的来校を視野に入れて、連携を深めていきたい。
 - 教頭・学年主任・地域連携職員・コーディネーターの役割分担が難しいと感じる。
 - 地域との関わり合いや、校内の仕事の分担の関係でコーディネーターとの関わりがないので、少しずつでもコーディネーターとの連携がとれるようになってほしいとと思っている。
 - 学校は、コーディネーターを養成するために積極的に地域の方に呼びかける必要がある。
 - 以前、文科省の委託で学校支援地域本部事業に、教務として中心的に関わっていたことがある。幸い、地域に詳しく、また非常によくやってくれるコーディネーター3人に恵まれ、本当に充実した活動が行えた。一方で、「教員の負担軽減」という意味では、さほど大きな効果はなかったと述懐する。やはり、学校が関わるとなると、ほとんどお任せというわけにはなかなかいかないのが実情で、ある面かえって忙しかった職員もいた。検討課題だと感じる。
 - 本校の場合、毎週1日、4時間程度来校して活動してくださっているので、ボランティアといえども、少しでも謝礼の額を増やすことができればと思う。
 - 市で行っている事業の予算措置を今後も継続していただきたい。
 - 予算措置などの配慮があると、より活性化すると考える。
 - 活動にあたっての費用(謝礼等など)について、行政が予算化してほしい。
 - ボランティアの志をもって無給で活動してくれる人が多いが、交通費や必要経費等については市町村等で予算化してもらえると活動しやすいのでは。
 - コーディネーターは基本的にはボランティアであるが、活動の活性化のためには市全体として報酬(?)を予算化してもらえるとありがたい。
 - 地域連携を成功させる鍵は、地域コーディネーターの力量や人柄と教職員の意識改革だと思う。その点で、本校はコーディネーターにとっても恵まれ、着実に教育効果を上げてきた。また、町からは、決して少ない額ではない地域コーディネーター報酬を出してもらえ、感謝している。
 - 良好な人間関係のもとに、地域とつながっている方がコーディネーターの役目を果たしてくれているので助かっている。公的にこの役目を負う方を配置するならば、全てボランティアという訳にもいかず、経費の問題がからんでくるので難しいのではないか。
 - 市の教育委員会の方針により、全校にコーディネーターが配置され、財政的な支援も行われている。今後も継続・充実を希望する。
 - 学校により、コーディネーターの活動内容にバラつきがあるように感じる。どの学校でも活用できるマニュアルがあるとよいのではないかと感じる。
 - 児童に挨拶をさせるには、まず教師から積極的に声をかける必要があるように、地域連携を社会教育の立場から学校現場に浸透させたいと考える

のであれば、地域の方やコーディネーターからも学校に声をかけていく必要があるのではないかと感じている。地域連携教員が地域連携に興味がないわけではないが、一歩が踏み出せないでいる。担任をしていたり、他の分掌などと比較して優先順位を考えたりすると、地域連携に関する業務は後回しになっている現状を、自分も含め、あちこちの地域連携教員から聞く。今の学校現場の状況から、「学校からの積極的な地域連携推進」に期待するのは難しいと感じている。もちろん、学校では「地域連携」や「コーディネーター」という言葉を意識する以前から十分に地域との連携活動は行っているし、必要性を感じれば新規事業にも取り組んでいる。現状のままでよいのであれば今のシステムで問題はないが、今後さらなる地域連携推進を目指すのであれば、積極的に学校に働きかけをすることができるコーディネーターを養成していく必要があるのではないかと考える。そのためには「教師に授業力の向上」が求められているように、「コーディネーターにはコーディネート力」を求めていく必要があるのではないだろうか。お願いしやすい地域の方に委嘱するのではなく、予算と時間をかけて専門職に近い人材育成を行う必要があるのではないだろうか。（小学校の場合として書いています。）

- コーディネーターが参加する研修の旅費等については、学校によって様々であると思う。コーディネーターの配置にあたり、共通のきまりのようなものが示されるとありがたい。
- 男性・女性各1名ずつコーディネーターを行政(生涯学習課)で確保して欲しい。(学校が探すのは、とても大変)
- 市の生涯学習課でコーディネーターを対象とした研修会を開催してくれているので、学校支援に対する理解が深まっており、積極的に活動してもらっている。
- 社教主事の資格がないにもかかわらず、校務分掌上携わっている。社教主事有資格者を各校に配置してほしい。
- コーディネーター配置に関しては、各自自治体の指導・協力が欠かせないと思う。
- 地域には、コーディネーター的な役割を果たしている人材はいる。しかし、その方々がコーディネーターを担っているという意識や自覚は少ないように感じる。そこで、行政が予算化等して、このような人材を養成し、各学校に配置できれば一歩先に進むと思われる。
- 町の教育委員会及び社会福祉協議会が学校のニーズに合う方を紹介してくれ、積極的に関わってくれるので大変心強い。
- 地域人材の協力を得ながらの教育活動は大切であるが、今後はさらに教育活動全体を見直し、学校外のスペシャリストを招きながら子どもたちに社会とつながる学習活動を進める必要があると考えている。学校で必要な人材をピックアップし、必要な人材を探すということは大変である。そこで行政サイドとの連携が必要であり、コーディネーターも行政とつながった人であるとうれしい。現状でも地域連携はある程度(十分?)行っているの、さらなる開拓の必要性に迫られていないのが正直なところである。
- 行政(市町教育委員会・生涯学習課)の積極的な支援が必要だと思う。
- 市の事業が軌道に乗っているので、コーディネーターの活動が円滑にできていると思う。
- コーディネーターを支える予算的な裏付けが十分になされるとよいと思う。
- コーディネーターを配置してほしい。市で動いて、他市のようなシステムを構築してほしい。
- 学校で地域コーディネーターを選考するのが難しいので、市などの行政で人選して任命するなどの体制ができるとありがたい。
- 市や教育委員会がコーディネーターを割り振って配置し、各種活動を企画、実践してほしい。
- 本校では、地域連携をするにあたって、地域コーディネーターと公民館職員の2つの窓口がある。ボランティアの紹介をコーディネーターに、外部団体との連携は公民館に依頼している。市教委がコーディネーターの設置をしてくれているのでありがたい。
- コーディネーターを選出する手順・方法が難しいので、市町村単位で人選してもらえるとありがたい。
- コーディネーターの配置状況や活動状況が、同じ区内でも市町によってかなり違っている。ぜひ、先進市町の取組を参考に、行政側で整備を進めてもらえるとありがたい。
- 本校は、支援本部が設置され、コーディネーターが配置されている。ただ、地域連携教員の研修会で県内の状況を聞くと、未設置・未配置で困っているとの声。本県では、素晴らしいふれあい学習課や市町に社会教育主事が配置されているので、ただ立ち上げてくださるのではなく、状況に応じて行政が立ち上げの環境整備や後ろ盾になってあげてほしい。本市では、行政と学校の連携が非常にうまくいっているの。
- 市でコーディネーターを指名してくれているので、とても活動しやすい。
- 現在、学校支援ボランティアのリーダーやメンバーがコーディネーター的な役割を果たしてくれているが、できれば町や市単位で、明確に地域コーディネーターを配置してもらえたら活動の幅が広がると考えている。また、実際に活動するための資金がなくて困っていることもあるので、これも町や市単位で予算化されることを望む。
- 学校独自でコーディネーターを探すのは難しい。(主に関わっているのは保護者。保護者は時間に余裕がなかったり、地域についてネットワークがなかったりする方が多い。)生涯学習の観点から、地域のことがよくわかる方を紹介していただくとありがたい。
- 行政で地域連携コーディネーターを配置してもらえるとありがたい。例えば、各地区の公民館職員に担当していただくなど。
- 公民館の職員がとても協力的なので、学校の依頼に積極的に関わってくれて助かっている。
- ぜひ行政主体で積極的にコーディネーターの配置をお願いしたい。
- 市もしくは、地域コミュニティ単位で、学校支援のためのコーディネーターに向いている人材のリストを作成し、情報を発信してほしい。
- すでに、学校支援地域本部事業が委託された中学校区では「地域コーディネーター」が継続して活動し、体制が整っているが、それ以外の学区では横の連絡が十分にできる「コーディネーター」が確保できていない。各教育委員会が「統括的なコーディネーター」を委嘱し、他地区にも連携を広げてほしいと考える。
- コーディネーターを市で予算化し、各校に配置できるとよい。
- 地域(市町)によって、地域コーディネーターの制度の相違が大きいと過日の研修会で聞いている。本校とすると、行政が主導的な立場をとり、その

- 制度を確立していただけるとありがたい。
- 学校職員では十分な活動ができないため、行政関係から適切な方が、学校に配置されるとよいと思う。
 - 市として、各校にコーディネーターが配置できるように支援してほしい。(学校での支援体制やコーディネーターの育成等)
 - 市全体での養成を急ぎ、学校と連携しやすい体制を作ることが大切だと思う。
 - コーディネーターの配置については、学校単位では難しい。市町教委などが当該学校へコーディネーターになり得る人材等の情報を提供することで、学校も動きやすくなると思う。学校独自でコーディネーターを見つけ、研修等にお誘いするのは、教員の負担増になってしまうと思う。また、小中連携を考えると、中学校区を単位として活動をしていくのが望ましいと思う。
 - 本校は、地域との結びつきがとて強く、ボランティア協力の歴史もある。現在は、コーディネーターの役割を教頭が担っているが、連絡調整・文書の発送などの業務が膨らんでいる。コーディネーターには、学校の教育活動をよく理解した上で、地域との橋渡しとして連絡調整、文書の発送などの重要な役割も期待しているので、研修や報酬等も含めて、仕事に見合う行政からのきちんとした位置づけ等が必要ではないかと思う。
 - 平日の活動も必要なため、務められる人材の情報提供や必要経費の予算化等をお願いしたい。
 - 学校だけでなく、公民館の力も借りながら適切なコーディネーターを探したり育成したりできるとよいと思う。
 - 学校単独でコーディネーターを指名することは難しい状況にあるので、市町村単位で各校のコーディネーター指名の支援(コーディネーターとして推薦するリストの提示等)をお願いしたい。あるいは、学校単位でコーディネーターを指名するのではなく、各地区に公民館との連携の下、コーディネーターを活動の内容ごとに配置していただき、各校が連絡をとり活動のコーディネートをしてもらう方法もよいと考える。
 - コーディネーターの配置されている学校と、配置されていない学校では、地域連携推進のしやすさに差があるように思う。市教育委員会が全小中学校にコーディネーターを配置しているので、地域連携教員としてはとても助かっている。各市町教育委員会主導で各学校にコーディネーターを配置するよう、働きかけをしてほしいと思う。
 - 地域に開かれた教育課程による学習活動を展開するために、コーディネーター配置に関する体制整備をお願いしたい。
 - 現在、地域の人材活用に力を入れている最中であり、地域にも受け入れられ、協力を得られるようになってきている。実践を進める中で、コーディネーターの配置の可能性を探っていきたいと考えている。
 - 今年度赴任したので、まず本校及び地域の実態を把握し、その後検討したい。
 - 今後は、先進校の事例等を参考にしながら、コーディネーターの配置について実現できるよう努めていきたい。
 - 公民館や生涯学習課と連携し、活動を充実させていく中で、コーディネーターとして協力可能な方を見つけていければと考えている。
 - コーディネーターについては配置されていないが、地域の公民館や老人ホーム、読み聞かせボランティアなどと連携した活動を行っている。このように、ボランティアについて組織として統括されていない部分があるため、今後は地域コーディネーターと連携し、学校と地域をつなぐ役割を担っていきたい。
 - ボランティアの数も多くはないので、現時点でコーディネーターの配置が急務ではない。今後、ボランティア経験者の中からコーディネーター的役割をする人材が見つかるかよいと考える。
 - 本校は、以前からボランティア活動が盛んで、それぞれの活動ごとに組織ができているため、改めてコーディネーターを配置し活動してもらうのは難しいのではないかと考えるところがある。コーディネーターが配置されれば、もっと幅広く活動に取り組めるのではないかも思う。
 - 地域コーディネーターの必要性は感じてはいるが、本校の現状では、2か月に1度、定期的にPTA本部の運営委員会で学校行事や学年行事について、情報を共有する機会もっているため、その中で、ボランティアや活動支援についてある程度解決ができていく。コーディネーター等の配置については、現状を踏まえ、今後の状況を見通し、効果的な支援の態勢を整える中で考えていきたい。
 - 常時必要な仕事があるわけではないので、コーディネーターの活動や配置をお願いすることはとても難しいものであると感じる。
 - コーディネーターの必要性を感じているが、人材不足によって配置できない場合は、学習ボランティアの中から協力的な何名かをコーディネーターに育てることも考えなければならぬと思う。コーディネーターの育て方などの研修があるとよい。
 - コーディネーターを配置するにあたっては、経費・活動拠点・勤務態様などクリアしなければならない点が多々あると感じる。
 - 本校であれば、身近なところにある公民館にコーディネーターが配置され、地域連携教員と連携が図れるとよい。
 - 人、物、金、情報、時間の整備。
 - 本校は地域連携がとて充実しており、さらにコーディネーターがうまくまとめてくれているのでとても助かっている。教員と保護者間の風通しもよく、情報等がきちんと交換されている。強いと言えば、個人情報の保護について、十分に注意していきたい。
 - コーディネーターがまだまだ教員の下請け的な感じになっているので、コーディネーター同士の情報交換等も密に行って、学校に積極的に提案してもらえるとよい。
 - コーディネーターがそれぞれ使命を自覚し、責任を果たし、滞りなく仕事をしてくれている。
 - 他校におけるコーディネーターの活動事例を数多く知りたい。
 - 長期間に渡ってコーディネーターとして地域とのつながりを蓄積しながら務めてくれるとありがたい。そのためにも、無理のない形で徐々に活動を深めていくことができると、地域連携教員として協働しながら取り組んでいきたい。
 - 行事やボランティア活動が計画的に行われており、その行事や地域の担当教員が決まっている。
 - 幸いにも、学区には地域と結びつく施設などが多く存在するので、学年主任が中心となって学年の児童が地域に出ていくことができる。本校の地域連携のスタンスとして、地域の力を大々的に借りるのではなく、ちよつとの力で未永く続けられる活動(見守り、給食等)を行っている。
 - コーディネーターに人材を探してもらい、学校から連絡をするのだが、引き受けてもらえないことがある。コーディネーターは人物紹介が多いので、

このようなことが起きてくるのだと思う。

- コーディネーターが2名いるので、意見を合わせるのに苦労する。そのため、コーディネーター会議が不可欠と感じる。
- コーディネーターのみならず学校支援ボランティアの高齢化が進んでいるので、継続が課題である。
- コーディネーターの活動を通して、保護者、地域の学校活動への協力和理解がより深まっているように感じ、とてもありがたい。
- 学校支援ボランティアが学校に来てよかったと思える、お互いに有益な学習活動を行うことが大切だと思う。
- 本校は、コーディネーターのほかにも自治会長など、地域の方の協力が得やすい。コーディネーターとしてやりやすい環境である。
- 本校は小規模校であるため、コーディネーターを介さずとも地域連携教員が直接、指導ボランティアとの連絡を行っている。それでも不都合なくこれまで来ていたが、指導ボランティアの高齢化が進み、世代交代が可能かどうか頭を悩ませているところである。
- 本校では、コーディネーターとの連携がよくとられていると思う。コーディネーターの力量次第で、学校と地域のつながりの深さが決まる感がある。
- 現時点で、本校がある地域にはコーディネーターの役割を果たす人はいない。町では、保健福祉センター内に中間支援センターが設置されており、学校支援ボランティアに対する問い合わせや相談に応じるようになってきている。必要に応じ、活用していきたい。
- コーディネーターの配置においては、地域間の意識の差が大きい。これまであまり学校支援ボランティアの活動が活発でない学校や地域においては、コーディネーターの配置が難しい。また、世代に偏りがみられ、高齢化の傾向にある。
- 地域の方が自主的に取り組める内容の企画、推進が必要であると感じる。
- 本校では、優秀なコーディネーターが、先を見通した人材確保にまで尽力してくれている。コーディネーターの力量によって学校の負担感が変わるので、優秀なコーディネーターを育成することが必要だと思う。
- 地区ではずっと前から地域コーディネーターが根付いている。そのため、とてもスムーズに事業を展開できているように思う。
- 現在2年程度でコーディネーターが替わっているが、できれば継続してほしいできるとよい。
- 地域人材の開拓及びボランティアとの連絡調整をしてくれ、感謝している。
- 授業や行事などでお世話になり、とても助かっている。
- 本校では、地域と連携した教育活動が定着しており、年間の計画や定期的な打合せも行っている。学校での活動に必要な学校支援ボランティアについて、コーディネーターは地域の窓口となって親身に活動している。
- 地域のコーディネーターを配置している学校の様子を見せてもらうと、とてもよい実践が行われており、本校でもさらに地域とつながった実践ができるよよいと思っている。
- 現状は地域のコーディネーターはいないが、本校では保護者を中心とした学校支援ボランティアが活発に機能しており、地域連携教員等が中心となって、その調整を行っている。
- ボランティアの依頼はコーディネーターの人脈に依存することが多い。学校でどんなことが行われていて、どこに協力が必要なかを見てもらい、コーディネーターからも提案できるくらい学校をオープンにしていく関係づくりが必要だと思う。
- 学校職員とコーディネーターの密接かつ良好な関係を維持するためには、双方がコーディネーションを継続、そして年度をまたぎ引き継げる準備体制を維持する必要と努力が不可欠であると考える。
- コーディネーターの配置がようやく決まり、動き始めたばかりの状況である。試行錯誤しながら本校の地域に適した地域連携のあり方をコーディネーターとともに模索していきたいと思う。
- 地域のボランティアは、ほぼ固定し、毎年同じ方に学校から直接依頼したり、地域以外の外部人材の活用が多くなったりして、コーディネーターを通すことが減っている。
- コーディネーターの配置は、必要だと思う。しかし、中学校の場合は、忙しくなってしまうかもしれないが、教員がコーディネートする形が、やりたいことができ、現実的だと思う。
- 困りごとがあると公民館を訪ねる。地域をよく知っている方が公民館にいてくれると助かる。
- 地域の人材との連携は、必要に応じて学年が行っている。
- 現在の活動も充実しているが、コミュニケーションを密にし、さらに充実したものになるように努めたい。
- 本校のコーディネーター役の公民館長は、自ら児童の体験学習の講師をする等、精力的に活動されているが、常々、地域と学校は持ちつ持たれつの関係でうまくくと話しており、学校からも地域にできることを行っていくことも大切だと考えている。
- 現在、学校と地域がよい関係にあるのは、よくコミュニケーションが取れているからだと思われる。他の地域では、コミュニケーションをとる機会があるのかどうか、それを作り出すのも大変なのではないか、と想像するのですが…。
- 現在の勤務校が小規模特認校ということもあり、職員の配置数も多く、かなりの数の授業がTTで行えるなど、生徒一人一人に関われる時間が多いこともあり、学校支援ボランティア等の必要性をあまり感じていない。
- 学校行事・生徒会活動・特別活動において、学校側とコーディネーター(教育委員会)との1年間を見通した調整期間がとれていない。地域連携教員の入れ替わりがあるため、新しい活動をする事への難しさと日程調整に難しさがある。
- 各校、実情に合わせたコーディネーターの役割があり、活用の仕方がある。以前の勤務校では、地域連携教員というシステムがまだ未構築な時代、社教主事有資格者なのでその学校にいたコーディネーターと週1で打合せをする機会が設けられ、行事依頼や、ボランティア探しを依頼することができた。しかし、本校にはその機会がないので年間に顔を合わせるのも数回である。どの学校でも通じるプラットフォームがないと、連携教員はコーディネーターを活用できない。
- 学校・教員からの希望や要請をさらに具体的に話し合い、コーディネーターとも十分に協議して進めていきたい。

- 今年度からコーディネーターがついてくれたので、今後時間をかけて、アンケートの項目にあるような効果が見られるような状態を目指していく。
- 本校は、コーディネーターを配置して2か月程度であるため、まだ準備段階である。これからの活動が重要であると感じている。

3 学校支援のためのコーディネーターに関する調査（コーディネーター用） 問8 記述内容一覧

- 地域協議会の委員と学校支援ボランティアの役割分担が不十分。また、学校からコーディネーターでなく直接、地域協議会委員へ連絡がいくことがあり、学校支援ボランティアへの依頼がスムーズにいかない。ボランティアの要請にコーディネーターが必要なのが戸惑う。
- 学校支援ボランティアの確保については、年度によってばらつきがあるように思う。理由として、学校支援ボランティアのような活動をしている人がいるということが保護者、地域の方に浸透していないからではないか。みなさんの理解が進み、毎年、自ら手を挙げてくださる方が増えることを願う。
- 地元の出身者でない私にとって、地域の方に何かをお願いするのはなかなか難しいことだった。地域の方は、結局学校から直接お願いいただいて動いてくださるのが常で、コーディネーターとしての達成感は無いまま閉校となる。
- コーディネーターは、ボランティアとしての立場であり、上下関係のないやり方がよい。ボランティアの協力人数を増やすのが難しい。学校時間に合わせるができないため。
- ボランティアの確保について。中学校では働き始める保護者も多く、企画してもなかなか集まらないのが課題。近隣校の情報交換を軸に、ボランティアを共有できるようなシステムや特定エリアで活動するボランティアグループのようなものができればよい。
- 学校側は、学校と地域をよく知り、公的な立場で教育活動を支援できる資質をもつ人材を望んでいると思う。地区では、仕事をしている方が多く、コーディネーターもボランティアも確保が難しい状況であるが、たとえ1人でも見つければ学校支援は推進できる。できれば、非常勤のような扱いができるとよいと思う。
- 学校によって、コーディネーターの考え方、扱い方が異なることが問題だと思ふ。ボランティアへの依頼が大変で、一番のネックになっている。
- 長年担当し、定着しているボランティアが高齢となり、依頼が無理になった場合、バトンタッチできる人材を探すのは難しい。多少の技術を要するもの場合は特にそうである。（学校支援ボランティアの活動として「魚釣り」を実施している。川で、実体験で継続活動してきたもので、代表の方には3年前から後継者探しを依頼してきた。今回は、代表ができないということで、緊急だったが、別の方にお話ししたところ実施できた。）
- PTA役員をしていた当時のPTA会員や、その家族の方々等、ボランティアの確保は何とかなしている。ただ、器用だから、人柄がよいからだけではお願ひできず、学校内の出来事や児童の行動等を守秘できる方にお願いしている。若い方は仕事をしている人が多く、ボランティア依頼は難しい。地域の活動団体の仲間たちとお互いに協力し合っている。
- 私の地区では公民館が主体となり、昔から地域ぐるみの活動が他方面にわたって行われ、子ども教室等を長年にわたって実施している。地域の文化や歴史を知る人が高齢になり、いなくなった。
- コーディネーターの後継者を見つけるのが難しい。PTA本部役員のように強制的に抽選でとするのも難しく、今後続けていくことができるのかかわらない。声をかけては限界がある。学校、地域、保護者に活動内容が浸透していないことも原因の一つである。
- コーディネーターの後任問題。バトンを渡す準備はできているのに渡す相手がいない。ボランティアならいいけど「コーディネーターはお断わり」。深刻である。長く関わるコーディネーターの後任は特に荷が重いらしい。要するに情報通の口うるさいおばさんは安心感もあるが「なんか～偉そう」で敷居が高く、おまけに「役」につくと大変というイメージ。現実的な理由としては報酬がない、つまりタダ働きよりはパート、当然である。学校支援が継続的に行われるためには任期などを設けて次の人にうまく繋げていくことが必須。理想は、PTA役員などからの流れができてくれること。保護者(PTA)に対して学校支援活動やふれあい学習、コーディネーターの役割などへの理解と、地域連携への意識向上を図る取組を実施してほしい。
- コーディネーターの養成に直結するような研修の企画を望む。
- 地域協議会が発足してからもうすぐ10年になるうか。各小中学校のコーディネーターの活動もマンネリ化して、新鮮味が欠けるように思う。（各校の活動が充実していないという訳ではない。地道な活動の毎日の積み重ねこそが学校支援に必要なことだとは思ふが）ボランティアの確保の難しさや次期コーディネーターや地域協議会会長の引継ぎ等を考える時期にきていると思ひ、悩んでいる。
- コーディネーターに魅力がないと思ふ。だからコーディネーターどころかボランティアの確保すら難しい時代になっていると思ふ。教員によっては、こちらに丸投げの人もいて、これでは次に私が！という人は現れない。
- 後任の方が困らない体制づくり。
- コーディネーターは、普通の主婦や一般の保護者である。県教育委員会主催の講習会のように、責任や能力を求められると重荷を感じる。ボランティア・コーディネーターは気軽に誰もが参加できるものであるべきと考える。また、学校により子ども・教師・保護者の求める活動も違うと思ふ。その学校なりの活動を始めていると思ふので、セミナーなど画一的な指導ではなく、学校ごとの活動を支援してもらえれば幸いである。コーディネーターも担当教諭も、忙しい中、時間をやりくりして学校支援に取り組んでいるので、セミナーの回数の見直しや、休日の原稿依頼自粛など、負担を減らす対応を検討してもらえればとてもありがたい。
- 報償等、他市町のボランティアとの違いがあり、やる気が奪われた。先生たちと子どもたちのより良き学校生活が送れるようにサポートするつもりという一念だが、自分にとってのメリットが感じられず、ボランティアって一体何なのかと疑問に思ふ。また、このようなアンケートについて、FAXで送るといいうり方はお金がかかる。報告書作成のためのアンケートに参加するのがコーディネーターの仕事ではないので、やり方を検討してほしい。
- コーディネーターの立ち位置がまだ不明確で、職域をはっきりさせてほしいところがある。正直、仕事をしながらの活動であるため、相方の負担が大きく、心苦しいが、ボランティアである以上、これ以上の業務は無理であるため、考え方の板挟みがある。また、学校によってコーディネーターの活動、役割に差があり、費用弁償の額に虚しくなる。（一条コーディネーターは週1で本格的な活動をしているので、ほぼ再任といつていい程。メインで活動

- されているコーディネーターがもっと評価されることを望む。)
- 個人的に多忙なため、コーディネーターを中心に活動するのが難しく、これから積極的に活動するには負担を感じる。後継者もしくは仲間の発掘をお願いしたい。
 - 1年間のボランティア活動に使える費用が明瞭でなく、その都度学校側へ費用を請求している。参加してくれたボランティアにお茶などの用意が可能なのかどうかも不明瞭だし、各学校での費用の配分など、どうなっているのか。
 - 同じ市内でも、学校によってコーディネーターの負担や存在感、依存度が大きく異なる。コーディネーターは、無償ボランティアではなく、場合によっては、有償であることも必要だと思う。コーディネーターは、学校の相談役、クッション材だと思っているので、コミュニケーションをとって上手に利用してほしい。
 - 現在、活動費が支給されて活動しているが、多くの活動でも、ほんの少しの活動でも同額なのである。調整も必要と思われる。
 - 各中学校区に最低1人のコーディネーターが必要である。しかも、コーディネーターはボランティアではなく、お給料をもらうべきである。有償で働くコーディネーターでなければ、十分に機能しない。
 - コーディネーターとして地域すべてに精通していないので、学校支援地域本部委員(各自治会1人)とより密な情報交換を心がけると同時に、コーディネーターは複数配置により、学校の地域連携教員の負担軽減にも配慮できるようにする。
 - コーディネーターは、できるだけ長く継続していくことがよい。本校は、複数配置になっているが、今後も複数配置をお願いしたい。
 - 現在の活動を続けていければよいと思う。配置も、学校が統合する前の旧エリアごとに1名ずついるのでよいと思う。
 - 現在2名で活動しているが、仕事・家庭の事情で研修や活動に参加できないことが多くなった。あと2名くらい増やして分担したいが、なかなか見つからない。
 - 世代ごとにコーディネーターがいると、ボランティアの活動が広がると思う。
 - コーディネーターもボランティアなので、複数配置をして負担を少なくし、活動が長くそして広く行われるようにしたい。また、活動費の確保が難しい場合は、行政にも考えてもらいたい。
 - 現在3名のコーディネーターがおり、分野ごとにボランティアを確保したり、連絡したりできるのでよいと思う。後任の方へ負担なく引継ぎができる仕組みが作れるとよいと思う。
 - 現在1人でコーディネーターを受けているが、将来のことも考えて、2~3名のコーディネーターで活動していく体制の構築が課題である。
 - 学校や先生が支援を要望する項目ごとにコーディネーターを配置する。また、コーディネーターには、その部門の専門性を意識できるようなスキルアップのための研修会等があるとよい。
 - 次世代のコーディネーターの育成(活動の連続性維持のために)。現在の学校ではコーディネーターが4名配置されているので、持続的な活動が可能になっている。複数配置のメリットである。
 - コーディネーターが複数人いると、補いながら活動できる。
 - 現在、1人でコーディネートしているので、複数名で活動できれば、よりよい活動になるのではないかなと思う。
 - 先生たちの縦横のつながりがうまくいっていないと思うことがある。毎年同じ活動をしているのだから、昨年実際に活動した先生に話を聞いたり、引継ぎをしっかりしたりすれば、スムーズに活動できるのではないかなと思う。また、同じ教科でも別々の先生が担当するときは話し合って同じように活動してもらえると、それもスムーズな活動につながると思う。
 - 現在、地域内のコーディネーターの活動を公民館の社会教育指導員にPRしてもらっている。しかし、担当が替わると多少コミュニケーションがとりにくくなることから、自分から発信していけるようにしたいと考えている。
 - できる限り学校の要望に添えるように活動しているつもりであるが、どこまでやるのか(やれるか)について答えがないようなものなので難しいところである。担当の先生が替わると、一からやり直しということもあり、少々大変なこともある。
 - 今年初めてコーディネーターの活動をしたが、もっとたくさんのコーディネーターとの交流があれば、もっと幅のある活動ができと思う。
 - 市の小中では約30名のボランティアコーディネーターがいて、その中の約20名が組織を立ち上げ、毎月会員が集って、情報交換等の有意義な活動を行っている。
 - 自分の特色を生かして活動できることが第一と考えている。コーディネーターになる前から、地元の小中学校に協力すべきだと考えていた。
 - コーディネーターが学校職員でない方が活動の幅が広がるとも考えられるが、地域連携教員とコーディネーターが職員同士という組織でも、連携が深まる。学校の実態に応じて、より適する配置をするということで柔軟な対応ができるとよいかなと思う。
 - 学校は児童生徒と教職員、保護者が力を合わせて創意工夫を重ねて、特色ある教育活動を展開している。外部から支援の手を出さずにあたっては、このことを大切に、さらに教頭先生などが余計な負担を負わないよう、十分に考慮していく必要がある。
 - 本来PTA役員だが、充て職も多く、このコーディネーターもその中の一つで、初めは戸惑った。しかし、学校に相談すると来年度についてもきちんと対応の意思を示してくれたので安心した。また、始まってみるとコーディネーターの活動はいろいろな勉強になっている。
 - 学区内全体(4町会)で学校を支援できるコーディネーター配置が望ましい。また地域全体で学校関係者と協働できる現状の体制を生かし、稼働させてくれれば。
 - 地域連携教員とコーディネーターで協力体制を築けると、また違った広がりができる気がする。現状は、校長先生に直接お願いし、学校全体で動いてくれている。
 - コーディネーターは不慣れでよくわからないが、ボランティアは学校側の足りない部分を補うものであって、先生たちを悩ませたり、余計な手間を取らせたりすることのないよう心がけて、今までは学校より要望のあったものにだけ対応してきた。さらに、新しいボランティアをコーディネートした方がよい

- となると、何をどこまでやれるのかがわからない。いろいろな事例が知りたい。
- まだ活動を十分と言えるほど行ってないので、今後の活動の中で多くの関心(問題意識)をもって臨んでいきたい。
 - PTA事務局として働いており、先生と会う機会がある。
 - 校内用の身分証(ネームホルダー)を発行してもらえると、学校に行ったときに先生や保護者に身分を明示できる。
 - コーディネーターは、地域にお住まいで、学校を退職された方をお願いできるとよいと思う。学校のことも、地域のことも、授業についても把握されていて、人脈もあるので。
 - 近隣の小・中学校のボランティア人材を共有し、必要な人材を容易に派遣できるような構造を作ることが必要だと考える。
 - 市では、いわゆる「地域コーディネーター」は配置されておらず、市(公民館)の社会教育指導員(非常勤)が、各学校の家庭教育学級・PTA事業の企画運営の支援を行っている。
 - コーディネーターが必要な学校とあまり必要でない学校があると思う。学校の実情に応じて、必要な活動を考えながら行うことが大切だと思う。
 - コーディネーターがいなくても、開かれた学校、愛される学校、誇れる学校として、地域と一体となった環境で、支援ボランティアが来てくれるようになればよい。
 - 学校の負担にならないように、子どもたちのためになる活動ができるとよいと思う。
 - 社会教育指導員として生涯学習課に在籍している。指導員として地域の方と繋がっているため、コーディネーターの仕事に生かしていると思う。
 - 一つの学校にコーディネーターが複数いる場合、コーディネーター同士の学校に対する意識や気持ちが揃っていないと支援する時になかなかスムーズに事が進まず、学校に負担になってしまう恐れがある。学校もコーディネーターを選出する時は頼んだら引き受けてくれる人なら誰でもではなく、ちゃんとコーディネーターの役割を理解している人を選んでほしい。
 - あまり規則でしぼられすぎると動きづらくなるので、ある程度自由度がきくようにしておいてほしい。
 - 学校側の積極的なボランティアの活用。コーディネーターとボランティア活動の地域への紹介、発信。地域の方々のスキルの把握が必要。
 - 全体にコーディネーターが配置できるとよいと思う。
 - 日頃から、たくさんの方々が学校のためにいろいろと協力してくれている。また、その方たちを対象にした学校主催の「感謝の集い」というイベントがあり、本当に助かっている。
 - 現在の活動は、環境美化(労力)に徹しているので、ちょっと物足りない感じもする。
 - 学校によると思う。小規模校と大規模校では違うと思う。
 - 地域の人材についてよく知っていて、コーディネーターする際に適切な人選ができる方が必要だと思う。
 - よりよい活動のためには、新しいボランティアの発掘も必要であるため、地域の情報交換に努めたいと思う。
 - 活動は学校によってさまざまだし、要求もいろいろだと思う。コーディネーターとして、学校から依頼されたことはすぐやるように心がけている。先生が学校運営をするうえで、邪魔にならず、かといっていてもいなくても同じにならないよう努力しているつもり。もっとも必要なことは、常にコミュニケーションをとることだと思う。
 - コーディネーターの活動は地味ではありますが、学校と地域をつなぐパイプ役になれるように少しずつ努力を重ね、お互いに何を必要としているかなどを理解し合えることが必要である。
 - 栃木市内の小・中学校の様子をうかがうと、学校によって地域・外部ボランティアの受け入れや活動展開が大きく違っているように思える。各学校の実情があり仕方ない面もあるだろうが、学校運営をもう少しオープン、積極的にした方がよい学校もあるように思う。また、不登校の生徒へのアプローチとしてスクールカウンセラーに各家庭への働きかけをしていただければとも思う。コーディネーターは、できるだけ学校行事に参加・見学などして学校の実情を知るべきと思う。
 - とても楽しく活動させてもらっている。児童生徒とのふれあいは元気のもとである。
 - 学校支援ボランティアに関することやコーディネーターに関することについて、学校単位で詳しく話をしてもらえる専任の方がいるとよいと思う。地域性がいろいろあり、一概にコーディネーターだけでは立ち回れない場合があるから。成功しているコーディネーターの話ではなく、苦労している方の話が聞きたい。
 - 自分の生涯学習の実践の場として活動している。毎年のコーディネーターの記録を積み上げていくと、それが人材バンクになっていくし、同様の事業・行事の際にはコーディネーターを必要としなくても実施が可能となることもある。コーディネーターの活動は「縁の下の力持ち」的活動で、何でもかんでもコーディネーターじゃなく、必要に応じて学校教育の推進のため、児童・生徒の成長のためになればよいと思っている。
 - 学校の要望にできる限り協力できるようにと思っている。
 - コーディネーターの活動事例等、地区や学校単位で持っている情報を共有できるシステムがあるとよいと思う。
 - 自宅から徒歩1分。いつでも相談に行ける。中学校は4地区の学校が1つになったため、代表者が4人おり、今年度から代表者として担当することとなった。特殊な地域の学校である。
 - 地域と学校の連携はますます重要になると思う。
 - 学校と地域にどう関わってきたかで、アプローチの方法も変わるので、お互いに活動しやすいスタイルを模索すればよいのではないだろうか。

【 執 筆 】

- 第 1 章 栃木県総合教育センター生涯学習部
- 第 2 章 栃木県総合教育センター生涯学習部
- 第 3 章 北海道教育大学釧路校 教授 廣瀬 隆人
- 第 4 章 栃木県総合教育センター生涯学習部

【 監 修 】

北海道教育大学釧路校 教授 廣瀬 隆人

平成 28 年度
「学校支援のためのコーディネーターに関する調査研究」報告書

発行 平成 29 年 1 月

栃木県総合教育センター(生涯学習部)
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1070 番地
TEL:028-665-7206 FAX:028-665-7219
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

北海道教育大学釧路校 廣瀬隆人 研究室
〒085-8580 北海道釧路市城山 1 丁目 15 番 55 号
TEL:0154-44-3369 FAX:0154-44-3369